
神はシナリオを描く

まつちい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神はシナリオを描く

【Nコード】

N7107P

【作者名】

まつちい

【あらすじ】

三年付き合って別れた彼女

いつかまた会おうと約束したけど、勇気が出なかった

でも…もう果たせない…

村上俊幸 25歳

死期が迫っているなんて、未だに信じられない。

神様はなんでこんな試練を与えるんだ……。

でもいいんだ、俺は甘んじて受け入れる。

だからどうか…どうか香奈だけは…この先苦しまずに生きていけるように……

そうしないと、恨みます

神様………

1 死までの、道のり

いつの頃だろう。人生はそう簡単に上手くいかないものだと思つた。幸いにも生きるということ自体に疑問を持つたことはないが、生きることが難しいと知つたのはきつと同年代の子供より早かつたのではないか。僕は今までに二度、神様に裏切られた、という身勝手に妄想混じりの感情を抱いたことがある。一度目は小学生、父親が癌で死んだ時だ。当時十歳だった僕は、それまで死という存在をあまりにも遠く感じていたが、何も分からないほど子供ではなかつた。今でも父親の介護を必死に続けていた母親の背中だけが脳裏に焼き付いている。それは、子供でも目に余るほどの過酷な毎日だったに違いないのに、記憶の中にあるその後ろ姿はなぜか綺麗で輝いている。駆け落ち同然に結婚した両親に、親戚と呼べる付き合いは存在しなかつた。父親の病気が確認されてすぐ、母親は病院での介護にかかりきりになった。父親は勤めていた会社を退職、母親がパートで家計を支えていた。僕にとっては、お金という存在があまりにも漠然とし過ぎていてよく分からなかつた。

手を出せば貰えるほど裕福でも非常識な親でもなかつたが、それでもどこかに転がっているくらいに思っていたのかもしれない。最後はベッドの上で背中を丸め、小さくなつて死んでいった父親も、不思議と思ひ出すのは一緒に遊んでくれた元気だった時の姿が圧倒的に多い。両親のどちらの姿にしてもいい思ひ出しがないのは、自分が親不幸なのか、それとも嫌なことに蓋をしているのか。僕はその結論を自ら出そうとは思わないし、誰かに問いかけたこともない。どっちにしろ、父親にとってはいい息子でなかつたのが、僕が評価する息子としての自分像だ。母親によると、父親は最後に半年ほど入院し闘病生活を繰り返したらしいが、僕の頭のなかでは一瞬の出来事だった。ある程度の歳になるまで、僕にとって父親は早くに死ぬ生き物だと自然に脳にインプットされた。男と女、長生きするの

は女であるという世論もその考えに拍車を掛けたのは間違いないと今でも思う。それ故に、たとえ父親がいなくとも自分が不幸だなどと思わなかった。むしろ母親を独り占めできることに幸せを感じた幼少時代も存在した。しかし当たり前にも、気づけば運動会に友達の父親は来て仲良く走り回っている。授業参観には父親の作文を書かされる。遅ればせながら次第に自分だけ父親が死んだことに不満を感じるようになった。遅いだろうか。したが、その違和感も父が死んだ日にだけ見せた母の涙を思うと口には出来ず、胸にしまい込むしかなかった。

しばらくしたある日、偶然テレビドラマの中で男が天に向かって叫ぶシーンを見た。人通りの多い都会のビル街で、頭を抱えながらの姿は僕には衝撃だった。通り過ぎる人々がその男を振り返ることもない映像にも、妙に面白さがあった。

「俺は天に見放されたんだ！ うあああ！」

現実にはあり得ない。実際にそんな男が目の前にいたら町中はちよつとした騒ぎになるかもしれない。だからこそ記憶に残っている有名なドラマなど大抵そんなことが多い。それでもあり得ないからこそ憧れを抱き惹かれてしまう。そしてそんなものほど売れるのが現実だったりする。そのシーンはしばらく僕のお気に入りだった。主に使用するのは学校だ。田舎の学校で子供の数はやたら多かったが、その中で父親のいない子供は当時少なかった。掃除は当番制、隔週で様々な場所が各班に回ってきていたのだが、僕はその名台詞で嫌な仕事を避けることに成功した。たとえば、こんな時である。

「むらやん、今日トイレ掃除だよ」

クラスの女子が放課後僕にそう話しかけてくる。小学校四年あたりだと、男女関係なく大体あだ名で呼び合うものだ。僕は彼女にさつと答える。

「僕は天から見放されたからさ、早く帰って家のことをしなきゃいけないんだ……」

ちよつぴり悲しく見えるよう伏し目がちに言えば、彼女は気まずそ

うに姿を消してしまう。それは最も利口であり、さらに現実的な作戦で子供なりに満足した。そうして、僕はほくそ笑みながら家に帰っていたのだ。思い出すと背中に虫酸が走るほど情けない。兄弟のいない家に帰って僕は何をしていたか、それは小学生ならではの結果だ。ゲームや漫画に没頭し、一度だって夕飯を作ったこともない宿題さえまともにやろうと努力はしなかったし、家の中は散らかして歩いていった。母親が仕事から帰ってくる時間は決まっていた、その時にはさも勉強していたという素振りをしていたに過ぎない。

お昼の給食でもその魔法は同じことが言えた。大好きな焼きそばやカレーが出た時、いつも自分で配膳が出来るとは限らない。そんな些細なことでも上手く生きる糧が必要になる。そこで、名台詞だ。

「僕は天から見放されているからね。こんなの見るのは久しぶりだよ」

そういうと大抵の心優しいクラスメートは焼きそばを大盛りにくれる。いや、平和

だった。まさか、焼きそばを食べられないほど家が貧乏ではない。

親戚は少なくとも、堅

実な夫婦はある程度の蓄えを施し、父親が死ぬ少し前には小さいながらも念願のマイホー

ムを手に入れたほどだ。僕はどうしたら自分が得をするか計算しただけだ。もちろん家に

帰ってからも、おやつや夕飯をたらふく食べていたのは言うまでもない。思い出すだけで

自己嫌悪に陥りそうだが、ある意味ではそのセリフは僕を支えていた。冗談で立ち回りの

糧にしていたのは事実だが、実際父親が死んだときは自分の心も一緒に死にかけた。孤独

感と不安感で押しつぶされそうになり、しかし夜中に一人で算盤をはじく母親の後ろ姿を

見ると自分を奮い立たせるしかなかった。母親の前ではいつも笑顔

でいようとしたし、そ

のために小さな悪戯もした。その陰で僕がどれだけ暗い顔をしているかを誰も覗きこもう

とはしなかった。同情されたかった訳ではない。それでも、自分の暗い気持ちに折り合い

をつけるために、それくらい許されるのではないかと思ったし、誰かに心配されたかった

のかもしれない。小さな子供なりの救難信号だったのだ。だが、同級生はそれに対して心

配するどころか一線を引くこともあつたし、その魔法は教師には使えるはずがなかった。

結局自分を慰めるための処方箋にしかならなかったのだ。しかし、唯一その言葉があつた

おかげで僕は開き直れたのだと思う。どうせ僕は天に見放されているんだからね、と。

てつもなく可愛くないガキだったことだろう。だが、その台詞にも幕を閉じる日は必然と

やってきた。母親が学校に呼び出されたのだ。僕はそんなこともつゆ知らず、その日も掃

除をさぼって家に帰ると、真っ先に手に入れたばかりのゲームソフトに飛びついた。辺り

が真っ暗になっても部屋の明かりも付けずにゲームをしている僕に、帰宅した母親はすぐ

さま近寄った。おかえり、お母ちゃん。そう言おうと思って見上げた顔の右頬をいきなり

叩かれた。そして、母親は初めて聞くような大声で怒鳴った。

「あんたが天に見放されているわけない。どんだけあんたを頑張ってる守っていると思っ

てるの。お父ちゃんがいなのがそんなに惨めか……」

最後は消え入るように小さくなるその怒りに、咄嗟に口から言い訳

が飛び出しそうにな

った。お母ちゃん、違う。俺はただ得がしたかったんだ。しかし、すぐにそれを言うこと

への恥ずかしさの方が勝り、口を閉ざしてうつむいた。叩かれた痛みはしばらく時間が経

つまでほとんど感じなかった。自分がしたこと的情けなさで心が痛むと同時に、それがど

れほど母親を傷つけたのかが衝撃だったのだ。その日は、僕が覚えている限り初めて夕飯

の食卓に何も並ばなかった。母親は自分の部屋から出てくることもなく、僕も声をかけら

れなかった。僕は自らの罰として冷蔵庫から何かを漁って食べることもなく、ただベッド

の中で空腹に耐えて眠れぬ夜を過ごした。

翌朝、母親はいつの間にか眠ってしまった僕を普通に起こしに来て、朝食もパンが焼い

てあった。謝るタイミングを逃した僕は、未だにそのことを謝ってはいない。先生にも怒られることはなかったが、僕はしばらく人が嫌がるトイレ掃除を引き受け、給食のおかわりを自重することで自分なりに収拾をつけた。そしてもう一つ、僕にはそれからの小学校時代、かわいそうな子、というイメージがつきまとった。

二度目に裏切られたと思ったのは大学受験だった。そこまで金に困らないとはいえ学費というのとは一番家計の負担になる。それでも、母親は僕を大学に行かせようとしてくれた。成績は子供の頃から常にトップとは言えないものの、それなりの上位の位置を走ってきたので目指すは国公立の低額費、そして有名大学だった。夢やなりた職業なんてものは特別なかったが、出来れば楽しくていい給料を貰えるところならば何でも良かった。そのためにも、まずは世間に認められる大学に入ることが第一歩だった。……のに、国公立を片っ端から落ちた僕は、結局二次募集でそこそこの私立に入った。高校

生活は、受験のために部活もせずに自宅で勉強し、その頃は完璧にこなせるようになっていた家事をして母親を支えた。塾にはお金がかかるから行かないと言った自分を一瞬悔やんだのは、情けないので一生の秘密だ。結局何をやってもうまくいかない。受験勉強は幾晩も眠らずやったのに、却ってそれが足を引っ張ることになった。不規則な生活がたたったのかプレッシャーに弱かったのか、僕はセーター試験の日に高熱を出したのだ。結果はわかっていたが、かなり落ち込んで心臓が動くのをやめてしまおうかと思ったほどだ。母親はそんなときも責めることなく、頑張ったね、とただ褒めてくれた。そんな母親は誰にも言えないが僕の自慢であり、唯一本当の理解者だった。自分が成長するにつれて白髪が増えていくその頭を見ては自分を奮い立たせた。僕が支えるんだ、いつも笑顔でいてもらえるように頑張るんだ。いつかお嫁さんをもらって、嫁と姑問題に板挟みにされながらも、それさえも楽しめる。そんな家庭をいつか築くのだ。そう思っていた。……天から見放された。これは、母親に叩かれてから封印してきた言葉だったが、今解き放つてもいいだろう。僕は三度目、神様の裏切りを受けたのだから。

*

「先生……。もう一度言つて下さい」

真横に立っている白衣を着た天使と歌われる女性は、今の僕にとつては悪魔の使いにしか見えない。この部屋が綺麗すぎることも、可愛らしい人形が机のあちこちに飾られていることも癪に障った。しかし、それに文句を付ける気も起こらず、却ってこの部屋にいるせいで生気を吸い取られていく気がした。髭を中途半端に伸ばしてでっぴりと椅子に身体を預けている目の前の医者が、昔見たアニメのキャラクターにそっくりで不謹慎にも思わず吹き出しそうになる。それが現実逃避だとは自分で認めたくはない。頭の中を整理しようとしてもうまく脳みそが働いてくれない。自分で催促したくせに、医者の話が耳を突き抜けていくようだった。

「村上さん、大丈夫ですか？ 気分でも悪いですか？」

笑いを堪えるために口元を押さえていると、勘違いされたようだがここではそれは自然の流れなのだろう。まさか医者の姿を見ていて笑えてきたとは言えるわけがない。

「大丈夫です。続けて下さい」

僕は膝に置いてあるコートを腹の辺りまで持ち上げると、医者に向かって微笑んだ。外

は少しの肌を出すのも嫌なほど冬真っ盛りなのに、建物内はそんなことを微塵も感じさせない。少々暖房が効きすぎている気もしたが、今は何も考えたくなっている僕には最適の環境とも言えた。頭が、温かさのせいではうつとする。それとも、現実から目を逸らしたいせいだろうか。医者は明るい電気に写しだされた僕のレントゲン写真を指している手を下ろして言った。どうやら病状の説明は終わっていたらしい。真面目な顔つきで僕を見ると、唇をほとんど動かすことなく言った。後ろから誰かが声を出しているのではないかと想像して、また吹き出しそうになる。ここは病院。有り得ない、有り得ない。

「出来れば早めの手術をおすすめします。腫瘍が出来ているのは胃ですが、手術中に他の場所に転移しているのが発見されることもあります。特に胃は進行も早い。その、お仕事の方も……」

「はい」

返事は間髪置かずに口から出たが、いざ耳に入れると、なんとも残酷な言葉である。昨日まで普通に暮らしていたのに、それが無くなるなどと言われても実感は湧かない。何をふざけているのだと笑いたくなる反面、恐怖で膝から下が小刻みに震える。医師の顔が真顔であることを見ても、突っ込みを待っているわけではないはずだ。それなら、どうすればいい。彼に掴みかかって、肩を揺さぶれば嘘だと言ってくれるだろうか。それとも、隣で同情したような顔で立っている彼女に、包丁でも突き付ければ許してくれるだろうか。何を。いや誰が、だ。そう、誰に言えば冗談だと笑ってくれるのだろう。

う。今すぐここを飛び出して、思いきり笑いたい衝動に駆られる。叫んで、叫んで、笑う。そんな想像をする一方で、正気を保っている耳が僕を現実に取り戻す。

「村上さんはまだ若い。早ければ早いほうが良いです」

一瞬で額に皺が寄った。その怒りを堪えるように両手で拳を握る。自分だって同じような歳じゃないのか。思わずそう皮肉を言いたくなったが、余計に自分が惨めになりそうなのでぐっと堪える。握った拳の指先まで震えていることに気づき、コートの下に両手を埋める。胃。僕の腹の中に腫瘍があると告げた彼は、それでも話をやめようとはしない。

「ご家族の方にもですね。お忙しいということだったので、村上さんにお話しましたが、近い内に一度病院へお越し頂きたいと思います」

信じられない話を淡々と伝えるそれは、誰かに似ている。それは小学校の頃の担任のようだった。決して大人しい性格ではなかった僕は、家庭訪問の度に緊張していた。実際は、小心者なのだ。普段悪さをしているときは強気なのに、いざ親に話されたらどうしようと逃げたくなる。それでも、ほとんどの担任は必ずというほど些細なことでも褒める言葉を残して帰って行った。だが、小学校三年生の時の担任は違った。新しく赴任して来た女性の教師は、目の大きく背の高いモデルのような美人だった。誰もが輝かしい一年を想像したのも束の間、彼女はとてつもなく問題あり、だった。端から生徒を捕まえては、どんな問題でもおおごとにしようと尽力した。僕の運の悪さはそこにも確かに存在して、家庭訪問の当日、怒りのこ矛先は僕に向いた。給食の時間、僕の隣の席の女の子が、前日に僕にくれた消しゴムを返してほしいと言いだしたのだ。確かに、僕は彼女から小指の第一関節ほどの消しゴムを受け取っていた。だが、それは彼女が帰宅しようとした箱で靴を履いていた僕の手し、無理やり押し込んで来たのだ。その上、うさぎの形をしたそれに僕は興味もなく、どこへやったのかも覚えていなかった。そこで彼女の登

場だ。地獄耳を持ち、問題にはいち早く飛びつく担任が、給食の時間にも関わらず僕を立たせ、尋問した。なぜ貰ったのか、どうして行方を覚えていないのか。ほとんど食えることなく終えたその時間の最後には、なぜか僕はいじめっこに仕立てあげられていた。もちろん、女の子にはない。担任に、だ。隣の女の子は、驚いた顔で僕と担任を眺めていた。周りのクラスメイトも余計な地雷を踏むことを恐れたように何も言わなかった。その日、物凄い剣幕で現れた担任の気配を察知して、僕は二階へ逃げたことを覚えている。二階に逃げた僕を、担任が母親より先に連れおろし、一部始終を母親が口を挟む間もなく淡々と告げ、時間が来ると去って行った。翌日までに、消しゴムを探しておけ、と命令をして。あれは、家庭訪問ではなかった。いちゃもんか。いや、違う。殴りこみだ。ちょうどその時、母親は父親の看病をしていて、母親茫然と担任を見ているだけだった。僕を怒ることも、なじることもない。ただ悲しそうな顔で座っているだけだった。そんな気力もなかったのだろう。消しゴムは結局、前日に僕が履いていたズボンのポケットに入ってたままだった。翌日学校でそれを女の子に返そうとしたら、彼女は無言でそれを受け取った。担任は僕にその後を尋ねることはなかった。その日には、また彼女を引き付ける新しい些細な事件が起こったからだ。いや、担任が勝手に事件に仕ただけだが。とにかく、彼女の小さな自己満足のために利用されたようで理不尽だった。担任も、消しゴムを返せと言った女の子にも腹が立った。

今度は誰が悪いのだろう。この淡々と話す医者が悪くない。だが、自分が悪いともどうしても思えない。今、贅沢はしなくとも平和に暮らしている僕と母親には、それなりの悩みくらいしかない。それなのに、またか。母親は、また茫然と話を聞くのだろうか。今日こへ来ることは教えてあるが、出来れば心配させたくはなかった。だが、もうそんな悠長なことは言っていられないということか。目元に皺が刻まれるようになった母親の顔を脳裏に思い浮かべる。やはり、心の準備が必要だ。僕も、母親も。

「母親は仕事をしているので、なかなか来ることはできないと思います。僕からまずは話しますので」

医者は僕の答えに渋い顔をしながらも、出来るだけ早く、と急かすようにもう一度言った。一人暮らしや、田舎から出て来ていたならば時間も稼げるかも知れない。だが、同じ屋根の下に住んで毎日顔を合わせているのに、ごまかすことは出来るだろうか。いや、ごまかしている場合ではない。右へも左へも進めないのだ。迷う暇はない時こそ、余計なことが気にかかる。口の中がカラカラに干上がっていた。唾が全くというほど出てこない。

「先生のその名前。何て読むんですか？」

医者は患者の名前を知っていて、さらに患者は命を預けるのに、どうして彼らは一番に自分から名乗らないのだろう、と疑問が浮かぶ。また得意の現実逃避だ。医者は一旦何を問いかけられたのか分からないという顔をした後、すぐに頷いた。

「ああ、これですか？ 難しいでしょう。これで善如寺ぜんにようじって読むんですよ」

そう自分のネームプレートを傾けながら、恥ずかしそうに言った。耳が赤くなっている

のは気のせいだろうか。

「ご実家はお寺とか何か？」

「いえ、全くのサラリーマン家系でしたよ。僕が医者になるのも、最初は無理だからやめると笑われたんです」

「そうですか。僕は、父親がいないので……。あ、早くに亡くしているんです。何になり
たいとかはなかったなあ」

そう言ってから、これから目指すことも出来ないのだということに
気づき自然と口が塞

がる。善如寺も僕の視線が泳いだことで考えを読んだのか、わかり
きったことを並べた。

「大丈夫、まだダメって決まった訳じゃないんだから。一緒に頑張らしましょう」

僕がこの診察室に案内されて、身体の（医者に言わせると）ちょっと悪いところの説明を受けてから、何度この頑張ろうという言葉が掛けられたか分からない。しかし、実際に僕は何を頑張ればいいのか。はつきりと苦痛に耐えろ、と言ってくれたほうがやる気が出るだろうに。いや、どうだろう。

「はい。ありがとうございます」

適当に上辺の言葉をかけ、自覚のない病人なりの笑顔で診察室を後にした。どうしてこんなことになったのだろう。何がいけなかったのだろう。浮かぶ疑問はそれしかない。そして一番に、怖い、という感情が浮かぶが、それはいまいちリアルさに欠けていた。まさか、自分が病気だなんて。診察室を出ると、脇に立っていた通称天使も揃って付いてきた。そして、僕に声を掛けることもなく、廊下のソファで待っている男の名前を呼んだ。男の腹は今や流行のメタボリックで、冬だというのに額には大量の汗をかいている。彼の病名を考え、あの人にも余命が宣告されますようにと、心の中で願ってしまう自分に嫌悪感を抱く。なんて小さい男なんだ。

僕がここに来ることになったのは一か月前に行われた会社での健康診断が元凶だった。

元凶といっても、これで発見できなければ……と思うと、やはり受けてよかったのだろう。

毎年秋の終わりに健康診断が行われる僕の会社は、業界で三本の指にはいるほど有名な会社だけれども、特に健康に対して何かしてくれるわけでもない。それが当たり前だ。ただ日程表を配られて、自分の名前が書いてある日に指定の病院に行くだけである。業界的にも不況は続き上司からの利益に対する圧迫感が増すばかりで、年に何人かが精神を病んで退職するのは周知の事実だが、誰もそれについて追求することはない。入社三年目の僕は、上司にお前は大丈夫だと太鼓判を押されていた。僕自身、人より苦勞して大きくなった

自負もあり精神的に気丈な自信があった。営業職にも臆することなく、悩み事で胃が痛いと感じたことなど皆無だ。それがなぜか、返却された健康診断の結果に記載されていたのは、太く書かれた再検査という三文字だったのだ。しかし、そのときもまだ僕は大き袈裟にはしなかった。検査当日にバリウムを飲むことは分かっていたが、我慢できず前夜に食べたクッキーのせいで引つかかったのだろくらいに思った。病院に来て医者に笑いながら弁解するのが落ちだったはずだ。必ずこういう患者もいるに違いないと決めてかかっていたのだ。

しかし、再検査で通された部屋は真っ白で無機質で、周りにいる人間の視線がどこか哀れんでいるようにも見えた。今思えばあそこに通される人はある程度限られているのかもしれない。たわいもない冗談など言えないほどによそよそしく、まるで実験動物でもみるように観察されている気がした。感情を隠しているような看護士の態度に余計に身体が竦んだ。

そして、その結果が出たのが今日だ。会社の人間にはほとんど冗談で話していた僕は、この土産をどうやって持ち帰ればいいのか判断出来ない。医者に貰った白い封筒を片手に持ち、病院の中心部に備えられたエスカレーターに乗った。中心部は吹き抜けであるこの建物は、都内でも一、二を争うのではないかと思うほど近代的で外見と中身に違和感が漂う。一般的オフィスでも充分申し分ない。スーツを着た男がわらわら歩いていてもおかしくないここは、実際には老いているか点滴をつけながら歩いている人間しかいない。結界があるかのように足を踏み入れることなどなかったのに、数ヶ月、いや数週間後には僕もこの仲間だ。そう思うと、今ここから見下ろせる一階まで飛び降りたら……と考えてから、我に振り返みとどまる。かぶりを振りながらエスカレーターの手摺りにつかまると、反対側を小学生くらいの男の子が母親と手を繋いで上ってきた。

「ママあー。すっごいね、ここ。凄く綺麗だね」

子供はまるで遠足にでも行くかのように楽しそうに母親を見上げ、

身体を捻り辺りを見

回す。甘えているのだろうか。母親の腰まで伸びた身長はいたって普通で、見た目はどこ

が悪いのかさえ分からない。反対に母親の顔色は悪く、子供には笑顔を見せているつもり

かもしれないが、それは凍っていた。母親の体調が悪いのだろうか。自分が奈落の底に突

き落とされると、急にここにいる人たちに仲間意識が沸く。

「ばいばーいっ！」

すれ違ってから聞こえる可愛らしい声に振り返ると、その男の子が僕を見下ろして笑顔

で手を振っていた。母親も脇で会釈しながら僕を見ている。僕は声を出さずに手を振り返

すと、きゅつと悲鳴を上げる心臓から目を逸らすようにすぐさま前に向き直った。そのあ

とも何度かその子供が叫んでいる声が聞こえたが、別の人に言っているのだろつと自分に

言い聞かせた。振り返れば、何か大きな真つ黒な塊にでも吸い込まれてしまいそうだ。高

級オフィス並のガラス張りで出来た病院を出ると、ビル街にあるからかコートとマフラー

でも防げない突風が顔に突き刺さる。針で刺されているようなその微妙な痛みは、やがて

むず痒さに変わる。鼻の頭が見なくても赤くなっているのが分かる。耳にきんと痛みが走

る。足下を濡らすみずたまりを避けながら、足早に通地下鉄のホームへ向かう階段を下つ

た。

今朝雨が降ったせいで階段はそここが濡れていて、うっかりすると滑りそうだ。そこ

まで来てやつと、診察室に傘を忘れてきたことに気づいて足を止め
たが、早々戻る気にも
なれず、ビニール傘代の五百円はドブに捨てたことと諦めた。地下
に潜ると、地上の寒さ

がまるで嘘のように空気が暖かく心地がいい。薬の臭いがしない分、
病院の暖房より快適

だ。首に巻いていたマフラーを取って鞆の取っ手の間に置くと、背
広の胸元のポケットか

ら定期入れを取り出した。

そして、その中にいじらしく挟んである女の子の写真を見て一人に
やつき、そしてまた

かぶりを振る。僕は自信がある、きっと世界で一番女々しい男に違
いないのだ。改札口を

一瞬で通り抜けると、再び定期入れを開く。一度ポケットに戻して
から、ホームへのエス

カレーターを下りながら、もう一度。ホームについて、もう一度見
る。写真の女の子は、

笑っている。この写真を撮っている男、そう、僕に向かって。栗色
の髪の毛は地毛という

通り、いくら染めなくても根本が黒くなることはない。その髪質も
とても柔らかかったの

は、今も指先に思い出せる。それなりに整った優しそうな目が丸顔
によく合っている。真

っ白な肌は実は努力の賜物で、海やプールに行くときは大量の日焼
け止めを塗っているし、

毎晩寝る前には美白クリームを愛用しているのを僕は知っていた。
でも、これは知らない

振りをしていた。こうやって写真を見ながら歩いていると、彼女が
自分の隣を歩いている

ような錯覚にとらわれるときがある。僕よりほんのちょっと小さな

身長の彼女が、精一杯

の広さの歩幅で付いてくる。僕は彼女の歩幅が驚くほど狭いことを知っていて、わざとい

つも通りのペースで歩く。僕を追いかけて小股で走ってくる彼女が実はお気に入りだった。

僕の腕をちよつとつまんで恨めしそうに顔を見上げ、怒ったような顔で言う。

「もつとゆっくり歩いて」

僕はそれが見たくて同じことを繰り返したけど、彼女が怒っていないことなど承知だっ

た。それは、一年経つても、二年経つても変わらなかった。彼女の顔を思い浮かべている

と、いきなり鳴り響いた電車の警告音で僕は白線の外側に出てしまっていることに気づき、

慌てて身体を引っ込めた。その瞬間、目の前を猛スピードで長い編成の電車が駆け抜ける。ホームに止まれるのかと思うほどのスピードだった電車も数秒後にはびたりと停車位置

におさまった。午前も終わりがけのこの時間帯には乗客も少なく、狙い通り一番隅の席に

滑り込んで座った。定期入れをポケットにしまうと、僕は電車内の中吊り広告へと目を走

らせた。目に飛び込んできたのは政治界の汚職事件、芸能人の恋愛スクープ。めばしい記

事も見あたらず新刊の書籍案内を見ながら何駅か過ぎると、いつの間にか降車駅になっ

て飛び降りる。ホームはどこにこんなに人が乗っていたのかというほど、昼間なのに人

でこった返している。ほとんどが学校生活を楽しむ大学生らしき男女が、デパートに向か

うだろう主婦の集団。それか僕のような仲間、つまりサラリーマン

だ。会社には病院へ行
くことを伝えてあるので特に急ぐ必要もないのだが、自然と早足に
なる。人混みをうまく
進むと、地上にはどんよりとした雲が覆っていて暗かった。それは
まるで僕の今の心を映
し出しているようで、なぜだかむっとする。病は気から、とはよく
言ったものだ。医者に
話を聞いてから、無性に胃が痛みだした気がして仕方ない。鞆を抱
え腹を隠してこっそり
摩ると、シコリがあるような気さえしてくるから堪らない。僕は左
右にすばやく目を走ら
せて確認すると、道路を駆け足で横断した。会社が入っているビル
の地下一階には、カフ
エも入っているので寄ろうか逡巡したが、結局は正面からビルの中
へと入った。商業施設
として成り立つここは、三階までがブティックなどの店、四階から
八階のフロアが各会社
になっていて、僕の勤める旅行会社は五階だ。運よくエレベーター
で誰と顔を合わせるこ
ともなく乗り込む。気持ちが沈んでいると、いつもは何も感じない
空間でも狭苦しく感じ
て息がし辛くなる。祈るような想いで目を瞑ると、数秒で五階に着
いた。腕時計にふと目
をやると、どうりで人に会わないはずだ。ちょうど昼休みの半ば頃
だ。青い絨毯が引かれ
る長い廊下にも人影はない。もちろんオフィスには電話番が待機し
ているが、それも数え
るほどだ。このフロア、全国に数十個はある法人支店の一つで、こ
こだけでも百人以上の
従業員がいる。

毎年十人ほどの新入社員が来るが、一年で半分程度に減ってしまうのが、この業界の成

せる業だ。僕の同期も一年で三人が辞め、翌年また三人消えた。理由は様々である。営業に課されるノルマの重圧に耐え切れなかったり、添乗で侮辱ともいえる嫌な事をされたり、上司が合わなかったり。ある時ふと、糸が切れたように力がなくなるといふ。同期が辞める度に引き止めた僕も、今年で……いや、それを待たずしてここを去ると思うと、考えるだけで発狂しそうだ。

「あ！ 村上くん。おかえりい。大丈夫だった？」

そんな想いを抱えて支店の入り口に佇んでいると、中から現れた黒田に話し掛けられた。

短大卒の同期で、支店の中では物凄いモテる。だが、黒田の弱点はなんでも知りたがるこ

とだ。それが上司だろうと顧客だろうと関係ない。残っている同期は黒田の他に二人いる

が、きつと病院の結果は向こうから聞いてこないはずだ。そう、黒田以外は。

「ああ。まあね。黒田メシは？ 遅番？ 支店長いる？」

黒田はいつでも濡れているツヤツヤの唇に人差し指をあてながら、不思議そうに僕を見

上げた。先週よりも髪の色が明るくなっていて、もはやそれは金に近い。爪楊枝が乗りそ

うなほどに長い睫毛を何度か瞬いた。

「どうしたの？ いるけど……。さっき電話していたよ。村上くんもご飯まだなら、一緒に行く？」

「そう。俺は食ったからいいよ。悪いな」

実際は朝から何も食べてないが、この胃の不快感では戻してしまいそうだ。しつこくま

とわりつく黒田を適当に、しかし不自然にならない程度に追い払う

と、人気のない支店に

足を踏み入れた。廊下には聞こえていなかった電話の受信音が部屋中に鳴り響いている。お昼休みで人手が足りないのだろう。田んぼが二つは入りそうなほど広い部屋の中、そ

の一番奥に一際大きな机にいる支店長目指して歩いていると、いきなり腕を引っ張られた。

反射的に手を振り払うと、姉御肌の先輩が受話器を取りながら僕を睨み付けている。うわ、

こわ。僕が軽く会釈すると、先輩は視線をそのまま鳴り続ける二つ目の電話へと動かしだした。

取れってことね。ここの脇を通ったことを後悔しながら受話器に手を伸ばした瞬間、それ

はぷつりと音が止んだ。僕にはラッキーだったが、先輩は憎しみを込めた目で僕を睨んだ。

背筋に悪寒が走る。彼女は舌打ちを漏らしそうな顔で受話器に返事をしたが、その声がま

た可愛らしいことに鳥肌が立つ。女って、怖い。しかし、そんなことを気にしていたらこ

こでは生きていけないので、ひとまず関わらなかったことにする。再度支店長に目をやる

と、彼は電話を終えていた。支店長とは、ここに新入社員で配属されてから、ゆっくり二

人で話したことなど数えるほどしかない。その何度かだって、研修で行ったヨーロッパの

感想を求められたり、ノルマの達成が出来なかったときの反省会、面談など私的なことは

一度だってない。支店の飲み会だって離れて座る。というよりも、支店長の酒豪ぶりにつ

いていけないのだ。黒田は支店長に誘われて二人で昼食にもよく行くようだが、それは男

と女の違いだろう。ゆつくりと近づいていくと、書類に目を落としていた支店長が顔を上げ、一瞬驚いてから顔をしかめた。

「おう、村上。検査だったんだよな。どうだった？ 今日午後に営業行くのか？ ストレスなら話を聞くぞ」

支店長はいつもこうだ。矢継ぎ早に話す癖があり、それが滅法速い。ここが少々苦手な

部分でもある。大阪出身の支店長は向こうでは有能な人材で、本社のある東京へ引っ張ら

れたという話だ。がたいもいしい、背も高い。

「はあ。そのことでちよつとお話が。今日は、営業の約束もありません」

社内に人は少ないが、できれば個室で話したかった。支店長は無言で椅子から立ち上が

ると、机上にあつた手帳を持ち応接室に行くように顎で示した。何人かの視線を背中に感じるが、僕は軽く頷くと鞆を持ったまま入り口付近の応接室に行った。ドアに十五分後には来客の予定を示す紙が貼り付けてあるが、ひとまずドアを開けて中に入った。腰を下ろした時、支店長がコーヒーを持ってきて入ってきた。迷わず向かいのソファに腰を下ろすと、手帳を開いてコーヒーを啜った。その動作がまた、異常に速い。

「で？ なんだ」

こうしてすぐに結論を求めることも三年前から変わらない。彼が求めているのは、いつも課程ではなく結論だ。

「あの、退職させてください」

僕は支店長が差し出したコーヒーに無理矢理口を付けながら言ったが、予想通り喉を通

らなかった。反対に、支店長は開いた手帳に飲み込みかけた液体を吹き出すと、慌てて棚

の上のティッシュに手を伸ばして拭いた。しかし、そのシミは紙の上のインクを虐めるよ

うに弄んだ。文字は逃げるように滲み、そのページはきつと使い物にならないだろう。支

店長も諦めたのか手を止め、顔を上げるとじつと僕の顔を見つめた。

「お前、医者に何か言われたのか？ いきなり辞めるって。予算だつてまだ下期の途中だぞ」

ああ、予算の心配ね。一瞬力の入った拳を膝の上でぐつと堪えると、困ったような笑顔を作り言った。確かにそれについては申し訳ない。

「腫瘍が……。胃に腫瘍があるらしいんです。僕は入院、治療に専念します」

支店長は白髪頭をかき回すと、もう一口がぶりとコーヒを飲み込んだ。今度は吐き出さずに。

「それは、胃癌ってことか？」

余命半年までは言えず、ただ首を縦に振った。その瞬間、一気に僕はもうこの世界の住

人とは違うところに足を踏み込んだのを認めた気がして目の前が真っ黒になった。顔を上

げたとき、支店長の姿がぼんやりとしていることで、自分の目に涙の膜が覆っていること

に気づき両手で顔を隠した。まさか会社で泣く時がくとは思わなかった。支店長の声が、さつきよりも優しいものになる。

「お前、若いのに。何かの間違いってことはないのか？ もし本当でも手術すればよくなくなるのだろう？ 大丈夫だ。辞めなくても戻ってくればいい。半年なら休職扱いがきくから」

支店長は立ち上がり、僕の隣に腰掛ける。顔を覆っていても、気配とその重みでソファ

が沈む。肩に腕を回され一瞬払いのけなくなったが、少しだけその温もりが落ち着く。

「いえ、長引くと困りますから。それに退院してもきつとすぐには元通りに動けないと思うので」

きつと支店長は僕の涙に混じったぐちゃぐちゃの言葉を聞き取るのに必死のことだろう。

それでも聞き返してくるようなことはなかった。

「このことを誰かに？ 同期の奴らには」

「言っていないません。ただでさえ頭が真っ白で」

もう溢れる涙を拭こうとは思わなかった。濡れた頬をそのままにして支店長を見返した。

彼の声音やスピードからはもう動揺が消され、元に戻っている。

「よし。じゃあ、すぐに体制を整えよう。まずは、お前の抱えている案件を引き継ぐんだ。

同期でいいだろう。それから入院はいつからだ？ 支店のやつらにも事情を話さなけりや

いかん。それにお客にも」

「はい……。でも、できれば同期以外には黙っていてほしいんです。みんな大変な時だし、

余計な迷惑掛けたくなくて。僕の一身上の都合ってことは無理でしょうか」

支店長はシャツの裾をまくって、返答に時間を稼いでいるようだった。この個室は来客

用に使われていて、壁には一面に全国至る所の名所を移したポスターが貼られている。支

店長の背中側に貼られた函館雪祭りのそれを見ながら、僕は空虚な気分で座っていた。

「まあ。一身上の都合には変わらない。でも、お前の中の付き合いがあるだろう。仮にも、

ほぼ三年間机を並べてきた奴らだぞ」

それに対しての返事は決まっていた。

「いいんです。そうしたいんです」

これからの半年、どうやつれていくのか自分でも想像がつかない。それならこれくらい

の付き合いならいい方がマシだ。

「わかった。じゃあ、今日中がいいか？ 同期に話そう。俺も同席するから」

僕が精一杯の感謝と謝罪を込めて深々と頭を下げると、支店長は肩を数回叩いて勢いよく部屋を出ていった。

夕方まで、僕はテレアポルームに入り浸った。その部屋は、仕事をとりたい営業マンが、

周りを気にせず電話ができるようにとオフィスとは別に湯沸かし室の隣の一角につくられている。そこで獲得したお客との関係を、今度は切る電話をするとなると虚しさで泣けてきた。人に聞かれる心配もないので、電話を切っては泣き、話しながらは、泣くのを堪えた。そんなことを数回繰り返した時だった。

「こんなとこにいたのか」

今の僕には不釣り合いなほど明るい声に振り向くと、そこには同期の広瀬がドアに寄り掛かって笑っていた。咄嗟に視線を合わせないように元に戻る。目は恐らく隠せないほど赤い。声が掠れないように、何回も唾を飲み込む。肩が凝ったかのように首を回した。

「村上。お前、聞いたか？」

「聞いたって何を？」

「いや、なんか支店長からメールが来ていて、四時に会議室集まるって話だったからさ。でも、お前見あたらないし探していたんだよ」
そつと背後の様子を窺うと、広瀬は首に締めたネクタイを左右に

動かして緩めながら、僕の背中を見ていた。

「なあ、お前。話ってなんだと思う？ 支店長さあ、こないだ添乗行っただろう。久しぶりに大物のさ。俺、自慢話な気がするんだよ。もう五十近いからさ、家じゃきつと家族に構ってもらえないんだよ。それでいて俺たちは聞いてやるだろ。そりゃ上司だから仕方ないよな。はあーっと」

広瀬は僕の隣にどっかりと座ると、口元に溜まった唾の泡を手で拭いた。いつもなら同じように調子に乗って話の内容を予想する。それはもう妄想の域に入ることが多く、だがそれが僕らにとってはストレス解消でもあった。それでも、今日は違う。

「違うと思うぜ、それ」

僕は広瀬の肩に手を置くと、立ち上がって伸びをした。広瀬と僕は、大学の同期でもあり、当時から見た目も中身もよく似ていると言われていた。身長も他の男よりはちよつと低めの百六十五センチ。出会った頃はお互いにこれがコンプレックスなことを知り、笑い合った。悩みは所詮同じ立場でないと分かり合えない。ブランドは好きではないが、オシャレにはちよつとうるさい。人間は嫌いだが、おしゃべりは大好き。だからこそ未だに営業が続いている。……ちなみに広瀬は女も大好きだ。でも、浮気は反対派だし、性欲を満たす為だけに行くような場所も嫌いだ。運命や永遠なんてものにちよつぱり憧れ続けるロマンチスト。男は多少なりともどれかに当てはまったりするが、この広瀬とは全てがかみ合った。だからこそ上手くやってきた。そしてこれからもそのはずだったのだ。僕より人を惹き付ける力のある可愛らしい丸い目が、焦りを表す。

「あ、おい。待てよ！ 俺も行くって。それよりお前どうしてこのルームにいるんだよ。客取りか？ もう十分じゃねえのか」

広瀬は先に歩き出した僕の肩を羽交い締めにすると、耳元で囁いた。

「いや、すぐにわかるって」

いつもならば僕もお返しにヘッドロックくらいかますのだけど、

今日はそんな気分になれるわけがない。静かに広瀬の腕をはずすと、肩を竦めた。もう話すことさえ今は面倒くさかった。そう、元気を出すにも元気が必要なのだ。そんな力などない。

「なんだよ、村上。疲れてんのか？ ノリ悪いなあ」

そう言うのと、広瀬は最後に俺の腰をくすぐって笑った。まだやるか。二人で会議室に入るとすでに他のメンバーが揃っていた。支店長は相変わらず全員の分のカップを並べコーヒーを注いでいる。彼は来客を除き社員で何かをするときは、常にこういう行動をとる。彼曰くサービスピース精神を培うのはモットーで、まずは身内から、らしい。

「村上くん。おつかれ」

長机の一番手前に座っていた藤沢がすぐに声をかけてきた。営業で歩き疲れたのかストッキングの上から貼った絆創膏を貼り替えているところだ。椅子に片足を上げて、スカートの裾が捲れている。

彼女だったらいくら美人でも幻滅するところだが、同期であれば関係なくなるもので、僕は片手をあげて彼女の二つ隣の椅子に腰掛けた。続いて入ってきた広瀬は無言で僕の隣に腰掛けた。藤沢も広瀬には無言で応戦だ。何かあったのか気になるが、大概二人は意味もなく喧嘩していたりする。放っておこうと、僕はまだ微かに痛む胃をさりげなく撫でてやり過ごした。黒田は愛想がいいのは持ち前で支店長がコーヒーを運ぶのを手伝い終わると藤沢の隣に座った。支店長はごま塩頭を搔くと、僕に視線を一度合わせてから、やっと僕たちの真正面の席に着いた。

「みんな、仕事は順調か？ 新しいのが見つければ、じゃんじゃんもってこいよ」

彼は座るなり、両手を机の上で組み合わせてそう言った。会議の始まりはいつもそうだ。藤沢は未だに踵をさすっているし、広瀬はコーヒーを啜っている。黒田だけが話をきちんと聞いている……と思われたが、僕からは彼女が机の下で専用のコスメで爪を磨いているのが見えた。思わず溜め息が漏れる。

「今日集まって貰ったのは秘密事項だ。そしてお前達にとって大事なことだ。広瀬？ 俺の自慢話しじゃないから安心しろよ」

僕の隣にいた広瀬が、その言葉に咽せた。何度か咳き込んだあと、ひつと小さく悲鳴のような声を漏らす。小鳥の潰れたような声に、黒田が吹き出した。だが、僕はそれさえも笑えない。

「じゃあ本題だ。村上」

僕の真正面に座っていた支店長は、持っていたボールペンの先を僕の方へ向ける。おかげで同期全員の視線が僕に向いた。広瀬が、喉に痰がからまったような声を上げた。

「お前、なんだよ！」

僕は敢えてそれに答えることなく立ち上がった。

「みんなごめん。今日は報告とお願いがあって集まって貰いました。僕は退職します」

その場にいた支店長を除く三人の、悲鳴に近い声が響いた。その後、口々に理由を求め

る言葉が飛び交う。退職の希望は新入社員では三年が目処になっているとよく聞く。そこ

を乗り越えられれば、一応はマスターして落ち着くのだという。女子社員ならば結婚でそ

れに限られないが、男は大抵そうだという。支店長が両手を叩いてそれを鎮めた。みんな

の視線が僕に戻る。

「今日、黒田とか知っているとと思うけど病院へ行きました。なんともないと思っていたんだけど……けど」

その後の言葉に迷い、何度か「けど」と繰り返す。

「けど？」

先を促すように黒田が恐る恐ると問い掛けた。ここまで来れば、いい話でないことくら

い分かるだろう。やはり黒田だ。だが、今はそんな彼女の促しが有

り難い。自分でさえ認められない事実を、人に話すことは思ったより難しかった。

「けど、胃に腫瘍がありました。これから入院して闘病になります。みんなには出来れば今の僕のお客を引き継いでもらいたくて」

こんな願いはしたくない。涙を流さないようにと必死になればなるほど声は詰まる。なんで、なんで僕なんだ。同期の中で一番やる気もあつて態度もよかったはずなのに。

「お前、嘘だろ？　おい、村上！」

広瀬が立ち上がった瞬間、足元に置かれていた屑箱が倒れ中に入っていた丸まったティッシュが床に散らばった。僕は顔を隠したくて咄嗟に床のゴミを目で追う。だが、広瀬はそんな僕の左腕を掴んで離さない。

「おい、でも帰ってくればいいじゃねえか。何もやめなくなつて」

「無理なんだ。多分手術したらそんなに早く元には戻らない。きつと、うん。ここで、句切をつけたいんだ」

そのあとは、何度か口を開け閉めして言葉を出そうとしたが、何もなかった。支店長が小さく咳払いをして立ち上がる。代わりに、僕は力無く椅子に身体を落とした。

「まあ、そういうことだ。お前たちも大変だろうけど、村上のことを考えたら早いほうがいい」

「嫌だ！　俺は納得できませんよ。こいつは病気になんてなるやつじゃない。一緒にやってきた俺は分かるんですよ」

支店長の気を使ってくれた言葉も、広瀬の感情で台なしになった。でも、僕にはそれが嬉しかった。広瀬は僕の肩に手を置き覗き込んできると、まともに視線を合わせることが出来なかった。そんな自分が余計に虚しくて、僕はお客の資料が詰まったファイルを、机の上に大きな音を出して置いた。広瀬は最大限に目を大きく開いて僕を見ると、うなだれたように椅子に倒れ込み、そして机に突っ伏して顔を隠した。黒田と藤沢は、泣きそうな顔で何も言わずに僕を凝視していた。彼女たちのあんな顔を見るのは久しぶりだ。

入社一年目の春、すぐに社員旅行に連れて行かれた僕たちは、接待役に回され、台湾の観光旅行もほとんどできずに上司の酒飲み相手にされた。しかも移動のバスの車内では、乗っている五十人以上の上司がほぼ酔っぱらい、嘔吐した。僕たちはその状況に肝を冷やしたが、上司達は臆することなく飲み吐き続け、車が移動するたびに吐瀉物が通路を行ったり来たりした。その清掃役に回されたのがもちろん僕たちで、黒田も藤沢もこんな顔だった。真っ青で、対処に困っている顔だ。そのときは、他の支店のバスを羨んだものの、どうやらどこも同じだったことが目的地で分かった。他のバスの人間の靴もげるまみれだったのだ。今回もそうだ。他人を羨む気持ちもあるが、冷静に考えれば、遅かれ早かれみな同じだ。その二つが葛藤してやまない。

「そういうことだ。このことは村上の希望もあつて、知っているのは私と君達だけだ。あとは村上のチームの課長には言う。だが、それ以外は知らせない。これは私の一存だ。了解してほしい」

支店長は濁った空気を換気するように流れを変えた。

「結論だ。君の力はうちにまだ必要だ。区切りをつけたといっていうなら、それでもいい。辞表は預かる」

「支店長、あの。それは」

僕が咳を切ったように続きを止めようとしたが、支店長の片手によつて遮られた。

「いいんだよ。いいんだ。もし、体調が優れなかったら、半年後に辞表を私が代理で提出する。それまでは、こいつらに仕事を任せろ。そうすれば、休職手当も会社から出るんだ」

僕は迷惑をかけないようにすることばかりを考えていたが、実際お金に関しては何も計画していなかった。言われてみて初めて、その言葉の有り難さがわかった僕は、素直に頷くことにした。考えてみれば、もともと貯金だつてそんなにあるほうじゃない。手術代に入院費。全部でいくらかかるのかと思うと目眩がしそうだった。黒田と藤沢も、今や真剣に何度も頷いてくれている。

「わかりました。ご迷惑おかけしますが、よろしくお願いします」
体を九十度に曲げ、机に額をつけんばかりに押し付けた。

「よし、じゃあ決まりだ。一週間以内に引継を済ませて、必要な書類を提出しろ！ 身体がキツイ時は無理しないで休め。連絡は俺の携帯にすること」

支店長は右手を真っ直ぐに突き出し、項目一つひとつ述べることに、親指から一本ずつ折っていく。

「あと黒田と藤沢。例の顧客の社員旅行の打ち合わせで話があるから、このあと来てくれ」「はい。ねえ、村上くん。今日大丈夫ならみんなでご飯行かない？」

黒田はそそくさと支店長の後をついて行ったが、藤沢は靴を履きながら僕の脇を通るときに耳打ちをした。

「うん、わかった」

彼女の好意は無駄にできないと思ったし、今度いつこんな機会がくるかはわからなかった。三人が出ていった後、会議室に残された僕と広瀬は、しばらく無言のまま空気を吸っていた。胸焼けがしそうな妙な緊張感のなか、広瀬は子供が拗ねたように伏せていた顔を上げると、僕を睨む。

「お前さ、死なないよな。胃ガンで俺もつと親父世代になるものだと思っていた。なあ、大丈夫だよな」

広瀬が顔をふせていた理由は、彼を見たらすぐに分かった。彼も、僕の病気を自分のことのように真摯に受け止めてくれたのだ。目に浮かぶ光の粒は、藤沢には悪いけれど、ご飯に誘われるよりの貴重で、絆に思えた。

「ばーか。気持ち悪いだろ。お前何様だよ」

彼は少しでも微笑むと、瞬時に顔色を真剣なものに変えて言った。「さつき、それ聞いて思い出したんだ。一瞬だけだよ。お前、言わなくていいのよ。その、香奈ちゃんに」

僕は、広瀬の質問に大根が一本入りそうなほど口を開けると、彼は慌てた。

「いや、深い意味はなくて。でもさ、お前達なんか約束していたんだろ。生きていたって、具合が悪ければ行けないときもある。一応言っておけば」

僕はそれを遮るようにより大きな声で言った。それは診察室を出るとき、一番に頭をかすめた問題だったが、答えが簡単に出ることではなかったのだ。

「わからない！ でも、言わない」

「言わないって。香奈ちゃん誤解するかもしれないだろう？ お前達が別れたのは、仕事がお互い忙しくて、だろう。違う問題のせいで終わりにしてどうするんだよ」

広瀬のロマンチスト病が発症した。香奈は僕の彼女だ。いや、正確には元彼女、今は連絡もとっていない。でも頭の中ではくつきりとその顔を思い出せる厩気楼のような女の子……いや、女性だ。実際思い浮かべられるのは、毎日定期入れの写真を見ているのだからだけど、きっとそれがなくても思い出せる。毎晩夢に出てくるのだから。僕はあの日をずっと後悔して生きてきた。

「もしそれで終わりなら、俺たちはそれまでだよ。それに、もうとつくに終わっていたのかもしれないし」

僕はロマンチスト病にすっかり感化されないように、視線を逸らしながら答えた。

「おまえ、馬鹿だろう？ それはお前の言い分だろう。むしろ勝手な。事情を知らない香奈ちゃんは、お前に裏切られたと思って苦しむかもしれない。分かんないのかよ、おい！」

視線をはずそうとすればするほど、広瀬は僕の顔の前に移動してくる辺りが、しつこくて仕方ない。

「じゃあ、お前には分かるのかよ。香奈のことより今の俺の気持ち。お前は元気だからわかんねーよ！」

雷に直撃されたような歪んだ顔をしながら、広瀬は僕を睨んだ。

「分からないね。分かりたくもない。俺は、確かに今は健康だし、お前の気持ちはわからないかもしれない。不安とか、恐怖はな。で

も、あくまで想像で俺がお前の立場になったら、彼女には伝える。その後、彼女がどう出るかは彼女が決めればいい。それに、今はお前より彼女の立場にいる側から言わせて貰うと、言ってもらえないほど辛いことはないと思う」

頭では理解できる。でも、まだそれを感情で受け止めて行動に移すことは出来そうにない。

「そうかもな。分かるよ。言ってくれていることは。でも、無理だよ」

「村上、この際だから言っておくよ。お前はなんだかんだ言っただけにいるんだよ。いきなり言われてびびるのは当たり前だよ。人間として。死ぬのは俺も怖い。でも、お前が香奈ちゃんに言おうとしないのは、ただのプライドじゃないのかよ。言っただけ、反対に逃げられるのが嫌なんじゃないのかよ。自分が傷つきたくないんだろ」

「うるさい」

「は？」

僕の呟きに、怒りのこもった広瀬の返事が聞こえる。

「うるさいって言っているんだよ。俺と香奈のことはお前に関係ない。ほっといてくれ」

「そうかい、そうかいそうかい」

一気にボルテージが上がった僕に反して、広瀬は逆にクールダウンを見せて冷静に言った。

「まあいいや。お前が、香奈ちゃんの気持ちがもう自分になんて知るのが恐くて連絡で

きない姿を、俺は分かっているけど、もう何も言わないよ。お前が香奈ちゃんの写真を持

ち歩いていることも、どうでもいいしな」

誰も知らないと思っていた秘密をすっかり暴かれて、泡を吹きそうな勢いの僕に、広瀬

は笑顔で手を振りながら言った。

「まあ、またゆっくり話そうぜ。夜は黒田とかいるしさ。書類大変だったら手伝うから言えよ」

と、言い合いなど存在しなかったように、広瀬は部屋を出ていった。ポケットから定期

入れを取り出し開くと、僕は少しも変化しない笑顔を見つめた。香奈。色白の丸顔が、僕に笑いかける。この写真を撮ったのがどこだったか思い出せない。しかし、いつも彼女はこの顔で笑っていた。思わず写真の頬に手を伸ばして目をつぶる。瞼の奥では、その頬に触れる。手にはその感触がまざまざと蘇って、心の中が暖かくなる。これだけで、再び立ち上がる元気がもらえるのだから、香奈はやはり偉大だ。すぐに心が落ち着いたのを確認して目を開けると、広瀬がガラス越しにこつちをニヤニヤしながら見ているのが目に入った。「ひろせっ！」

思わず立ち上がりかけると、彼は手をヒラヒラ振って今度こそ駆け足でオフィスの方へと立ち去った。

*

その夜仕事が終わってから、広瀬達と四人で普段と同じような物を食べ、同じような話

をして帰宅した。誰も僕の病気については言わなかったし、僕も敢えて出さなかった。それでよかった。同期にとって僕はただの同期で、やめようが続けようがそれなりの対処で治まるのだ。きつこの夕食会を開いてくれたのも、一種の送別会であろう。彼女たちは本当に僕が半年後に復帰するとも考えていないのだろうし、彼女たち自身半年後は仕事をやめているかもしれない。会社なんてそんなものだと思つて。一期一会というけれど、それは違う。本当に人間とは一人なのだ。

帰宅時間は零時を回っていて、玄関の鍵をそつと回すと、小さく開く音がする。玄関の外の明かりは点いているのに、廊下は真っ暗で母親の靴を踏んでしまった。母親曰く、外は泥棒よけらしく、廊下

の電気は無駄遣いに当たるらしい。足音を忍ばせて台所へ行こうとすると、リビングの隣の和室から母親の鼾が聞こえてきた。素通りして台所で食器棚からコップを取り、水を注ぎ一気に喉へ流し込んだ。家を見回して、今まで気づかなかった食器の量の多さが目に入る。今も食器棚に整然と並べられた父の茶碗を、母親が丁寧に磨いているのを僕は知っている。きつと僕が死んでも母親は同じことをするだろう。母親は、一人でこの家に住み続け、死ぬまで食器を守るのだろうか。申し訳ない気持ちで風船のように膨れ上がって喉から飛び出しそうになる。……違う。

台所を飛び出すと、廊下の左側のドアを開けて飛びこんだ。目の前にある蓋をあけて顔を突き出すと、さっき食べたものが全部口から飛び出してきた。何度もせりあがってくる胃液を吐き出しながら僕は初めて自分の身に起こっていることを思い知らされた気がした。くぐもった声を漏らしながら、身体を痙攣させるようにひくつかせていると、閉めたはずのドアが開けられる気配がした。そのはずだ、寝ていた母親を起こしてしまったようで背中に温かいぬくもりが伝い、撫でられているのがわかった。

「なあに、俊幸。飲み過ぎたの？　こんなになるまで飲んだらだめじゃない。明日、二日酔いになるわよ」

僕は、その声を聞きながら吐いた液体に血が混じっているのを見られないようにと何度も水を流し続けた。落ちついてから後ろを振り向くと、母親はいつのまにかタオルと水を持って立っていた。

「ねえ、仕事きついのか？　最近いつも帰りが遅いじゃない。それに健康診断あったんでしょ。ストレス、溜まっているって結果が出なかった？」

僕はタオルを無言で手に取ると、口元をぬぐった。

「いや、ちよつと疲れているのかも。明日も早いから寝るよ」

「そう、気を付けなさいよ」

後ろを振り向かずに階段を上りかけると、母親のため息がひとつ聞こえてくる。いつ話そう。今度の課題はそれだった。香奈のことよ

りも、まずは母親に話すことが難関で、もつとも体力を使う気がした。考えるだけでまた吐き気がしてくるので、僕はとりあえず部屋に背広を脱ぎ捨てると、風呂に入る気にもなれずにベッドへダイブした。気が付いたときには、いつもと同じ笑顔が僕の目の前で笑っていた。香奈。それは現実とは違い、いつになく心地の良い眠りだった。

2 告白までの距離

胃に違和感を覚えるようになったのはそれからすぐのことだった。病院で隣の人が咳をしていると、腹痛で訪れたはずなのに帰宅すると意識的に咳が出るようになる僕にとって、宣告がいかに辛いものかがわかってきた。きっと気の持ちようだとは思っても、頭の中で想像する腫瘍はあまりに悍ましく凶器だった。食べようと物を飲み込んでも、それはすぐに駆け戻ってくるようになり、母親や他人との食事は極力避けた。支店長の言葉に従い引継や書類作成は三日で終え、辞表も提出した僕は今日、会社を去ることになった。

「村上！」

呼ばれた声に一階に下りようとエレベーター前にいた僕が後ろを振り返ると、そこには

同期の三人が笑って立っていた。一応一身上の都合と言うことで、特に全体での送別会を

されることのない僕を見送ってくれるつもりなのだろう。しかし、目を奪われたのは、広

瀬の手の中にある真っ赤なバラの花束だった。

「広瀬？ それ……。もしかして」

この場面で、この時にそれがあるというのは勿論。

「ほらよ。まあ二年と半年ちょいおつかれ」

「ああ。でも、それ。なんでバラ？ しかも真っ赤？」

僕は手を伸ばすもなかなか受け取る勇気がでず戸惑っていると、広瀬に無理矢理押しつ

けられた。

「ほらっ。早く受け取れよ。俺だってこれ持っているのは恥ずかし過ぎる」

「なんでそれを俺に持たせる」

手の中にある花に戸惑うも、廊下を歩いている社員からは笑いを含

んだ視線を投げられ

て思わず後ろに隠した。

「村上くん、今までおつかれさま。ちょっと早いけど、まずはゆっくり休んで身体治して

ね」

黒田と藤沢は、もう困ったような笑顔ではなく奇麗に笑ってくれた。

「ああ。でも、なんでバラ……」

僕は目をきよろきよろ動かして周りに花を入れるちょうどいい袋はないかと探しながら

問いかけた。

「お前は本当に馬鹿か。冗談だよ、冗談。そして、お前が恥ずかしそうにそれを持って歩いている姿を想像して……」

広瀬が僕の肩に腕をまわして鼻で笑いながら言い、エレベーターが来ると、一緒に歩いて中まで入ってきた。引きずられるように箱の中に入ると、藤沢も黒田も手を振っている。それに振りかえしていると、広瀬は耳元で囁いてきた。

「この間は悪かったな。この花はお詫びでもある。高かったんだからな。もし、よかったら香奈ちゃんに持っていてもいいぞ」

「ばか！ やるか！」

クスクスと笑った後、広瀬は自分で押していた開閉ボタンから手を話した。

「連絡しろよぉー」

出ていきながら言ったそれが最後まで聞こえる前に扉は閉まり、小さな箱は下降し始めた。と、思ったら次の階ですぐに止まり、数人の男女が乗り込んで来て、彼らの視線がバラに集中する。そうだろう、真っ赤なバラのブーケほどの花束を持った男が、オフィス階から下りてきているのだ。彼らは何か誤解したのか納得したように頷いている。一人の男なんてまるで応援でもするように片手でガッツポーズをしてみせたほどだ。僕が彼女のところへ持つていくと思われたのだろうか、これは広瀬の作戦勝ちだ。冗談とはいっていても

の、これは彼なりの小さな仕返しと、激励なのだろうと感じ、なんだか少し恥ずかしさも消し飛んだ。夜中に酔っぱらったせいにし
て嘔吐して三日、朝は早く、帰りは遅くを心がけていた僕は、今日
久しぶりに母親と顔を合わすのだ。地下鉄に潜って電車に揺られて
いる間、僕は頭の中でひたすら病気のことを説明するシナリオを描
いていた。

シーン１ 台所で夕飯の支度をしている母親の背中に。

「母さん、ただいま」

「あら。どうしたの。早いじゃない」

「そうなんだ。ちょっと話があつて」

「あら、なに改まって」

「まあ座つてよ。僕、胃癌らしいんだ。ちなみに余命半年。今日会
社も辞めてきちゃった」

想像の中の僕は笑顔。まるで、今日のお昼には二千元払って特大の
カツカレー食べたん
だよ、という風に。母親はどんな顔をするだろうか。僕を悲しそう
な目で見えるかもしれな
い。

シーン２ こんなのはどうだろう。

「母さん、ただいま」

同じく台所にいる母親の背中を優しく抱きしめながら耳元で囁く。

「うわ、びっくりしたわよ。なに、いきなり」

「母さん、こつちを向かずに聞いて欲しい。僕、癌になったんだ。
会社の検診でわかった」

「えっ？ 俊幸、あんた」

「大丈夫。僕は死なないから。心配しないで」
んー。いまいち大丈夫そうじゃない。

シーン３ いっその花に活躍してもらおう。

「母さん！ 誕生日おめでとう。バラの花だよ。いつもありがとう」
母さんは包丁を奇麗なリズムで動かしながら何かを刻んでいるんだ。

驚いて振り返っ

て、受け取って……。なんで？ って顔をして僕を見る。

「僕ね、検査の結果癌だってわかったんだ。だから、来年の夏の母さんの誕生日と一緒に

祝えないんだ。だから、一足早いけど、これ。大丈夫、僕の心配はいらないから、これだけ大切に飾ってよ」

母さんはゆっくりと僕を見て、言うんだ。

「母さん、母さんが代わってあげたい」

って、きつと言う。そうしたら僕はこう返す。

「無理だよ。でも、ありがとう。これが僕の運命なんだよ」

よし、これにしよう。なんだか、格好いいんじゃないか。僕がそこまで考え、ふと我に

返ると、いきなり頬に冷たい風が突き刺さった。真冬に片足を突っ込むこの時期になると、

電車の扉が開いたときに吹き込む風がいやらしくてたまらない。駅の看板を確かめると、

そこには僕の地元の駅名が書かれていた。鞆と花を掴んだまま一直線にドアへと駆けだし

た。間一髪、ドアは僕のコートを少し挟むだけで許してくれたようだったが、コートの裾

を思い切り引っ張ったことで少し黒い汚れが付いてしまった。ドアの内側に立っている大

学生くらいの女の子が、僕のちぐはぐな格好を見て目を丸くしている。電車は発車ベルを

鳴らし終えると、徐々にホームから遠ざかっていく。過ぎ去っていくどの車両の中の人た

ちからも見られている気がして足早にホームを立ち去った。バラをコートの中に隠して。本当ならば家までの道のりはおよそ歩いて五分ほどだ。しかし、今日の僕は公園に寄っ

たり、出身小学校を覗いたり、はたまた駄菓子屋の前にあるガチャガチャに手を伸ばしさ

えした。思う存分回って家に着くと、駅を出てから一時間が経過していた。鞆から鍵を取

り出してドアを開けると、廊下にすでに電気がつけられている。手探りせずに廊下を進む

のは久しぶりだと苦笑いしながら、僕は台所へと続くドアを開けた。「母さん、ただいま」

予定通り台所の中へ声を掛けるも、そこに母の姿はない。

「母さあーん？」

家中に聞こえるような声で叫ぶと、返事は思いの外近かった。

「なによ？」

真後ろで聞こえた声に身体をびくつかせて振り返ると、母親は洗濯物を抱えて僕を見上げていた。

「なに、あんた早いじゃない。それに、何よその花？」

違う。予定とは違うぞ。できるだけ話しやすいように背中に向かって言うつもりが、これじゃあ正面も良いところだ。

「……はい」

対応に困って花だけ渡すと、不審そうな顔をしながらも、母親はそれを受け取って鼻まで持っていった。

「んー。バラなんて久しぶり。ちよっと、これ片づけちゃうからリビングに持っていつてくれない？」

もう一度僕の手にはそれは戻ってきて、母は二階への階段を上がっていった。

どうするか。でも、いずれは言わなければいけないのだ。リビングでコートを脱ぎマフラーを取る。セットした髪の毛をぐしゃぐしゃつかき回しながら歩き、僕はテーブルの上に花を置いた。水が足りないのか、心なし花の元気がなくなってきた。まるで自分を映す鏡のようで少し気が滅入った。幼少時代に、バラの花が散るまでに恋をしろ、という野獣の映画を見た覚えがあるが、あれは最後

ハッピーエンドだっただろうか。僕は、おそらくこの花よりは長く生きられるだろうが、そんな些細な時間に何の意味があるのだろうか。

「あーらあらあら。あんた、そんなテーブルに置かないでよ」

すぐに下りてきた母親が、無造作に置かれた花に目をやり一蹴してきた。

「だって母さんがテーブルに置いていったんだろ」

「違うわよ。リビングに持っていったと言ったの。そうしたら置かないで持っているのが、

花の為に」

「あー。うるさい、うるさい。分かったって。はい。これでいいでしょ」

ずっと握って温かくなっていたところを、母親に向けて突き出した。もうこれで計画な

どめちやくちゃだ。僕の気分も悪くなってきた。また後で話すこと

にするか。そう思い、

部屋を出ようとした時だった。

「いつ入院するの？」

踏み出したはずの一步はあと少しのところまでフリーズ、床に届かぬまま、僕は母親の方

へ目をやり、体勢を崩しかけた。

「え？」

母親は、渡した花束を大事そうにセロハンの包装から取り出している。なんだなんだ、

なんだ。今入院って言ったか。

「母さん、今」

「これさあ、あんたの部屋に飾らないで玄関でもいいかしら？」

僕の言葉を遮るように母親が言った。

「母さん。入院ってなんだよ」

床に座った母の膝にすがりつくように転がると、僕は下から母親の顔を見上げた。母さんの顎の下にある黒子が久しぶりに目に入っ

た。母は花から目を離すと、僕の方を見て言った。

「なんだよって。あんたが入院するんでしょう？　悪いけど、お母さんを馬鹿にしないで頂戴」

なんで知っているんだ。啞然としたまま言葉も出ない僕に、母は笑った。

「昨日ね、病院の先生が電話くれたの。お母さんパート終わって帰ってきていたし、聞いちゃったわよ。検診の結果出たんじゃない。それくらいじゃ、お母さんもう驚かないわよ」

「いや、だって！　僕まだ二十五歳だし。もっと……こう悲観したり、それにがっかり……とか。……されると思っ」

だんだん下がっていく視線を戒めるように、母は僕の顎に手を当てそれを押し上げた。

「がっかりなんてしないわよ。悲観？　それは、あなたのすることでも、長くはダメ。明日を見るの。そうすればきっと良いことがあるから。長い苦労の先には、きっと、きっと驚くような幸せも、ひょっこり待っているのよ」

母は持ち上げた僕の顔の両頬をつかみ、真ん中に肉をよせた。これは、母が昔から叱る時にやる仕草だ。僕は、今何か怒られているのだろうか。

「わかった。でも僕、父さんも癌だったし、きっと死ぬんだ。だから、母さんのことが心配で」

予定は大幅に狂った。母には軽く冗談ぽく報告して、僕が抱きしめて慰めるつもりが、結局母に半ば怒られ励まされてしまっている。子供の頃からなんにも変わっていない。

「いいんだよ。あんたは、あたしの子どもなんだから。親は子供に心配させられるもの」

でも、親より先に死んだら親不孝なんだろう？　言いかけた言葉は口から飛び出すと同時に嗚咽となって、きっと母には聞こえなかったことだろう。しかし、それでよかった。きっと母には分かっていたただらうから。いつの間にかあふれ出した涙を拭おうともしな

った僕の顔は、母の膝の上に優しく乗せられ、ただただ僕は泣きじやくった。大人になってから泣くこともなかったのだから、十五年分ほどの貯蔵していたダムが決壊したようだった。

ひとしきり母の膝の上で泣いた後、僕は泣きすぎ特有の頭痛と、瞼に重みを感じながら、自室のドアを開けた。母親は夕飯の支度に取りかかっているようだが、妙に鼻歌が聞こえてくるのが痛々しい。きつと自分を奮い立たせ、落ち込まないようにしているのが手に取るように見える。それでも、きつと泣いている。申し訳ないが僕には自分の感情を抑えることしかできない無力さがわかった。でかい器がほしい。小さい頃、夢見た今くらいの大人の自分は、文句言わず大きな姿だった。好きな仕事をして、結婚をしているとさえ考えていたくらいだ。だが本物はちつぽけで何も出来ない。結婚どころか、彼女との生活も上手くいかなかった男が向かうのはどこなのだろう。僕はベッド脇に置かれた丸いテーブルの前に座って顔を伏せた。さつき乾いたはずの涙が、台風のようにまた両目を襲う。きつと明日は目が開かないかもしれないが、仕事を辞めた今そんなことはどうでもいい。声を出さないように堪えた代わりに、感情の発散を子供のように手足をとこる構わず振り動かすことで精算する。両足を最大限の力と長さを持って、瞬時に思い切り伸ばした時だった。右足に激痛が走り、思わず痛みに涙が引つ込みフラストレーションのような高まりは一気に冷えた。右足の安否を確かめた僕は、原因がパソコンを蹴ったことだとわかった。痛みを感じることになぜか嬉しさもわき上がり、それでも痛みは痛みで、足を折って手で当たった部位の親指の先を撫でながら、僕は床に置かれたままのノートパソコンを手を取った。ずるずると引きずる様にしてたぐり寄せると、しばらく電源を入れていなかったその上には、うつすらと埃が乗っていた。それを軽く袖で払いのけると、数ヶ月ぶりに蓋を開け、稼働させてみようと思いついた。なぜかは分からない。今までずっと避けてきたことだったから。

仕事は会社のパソコンで済ませられるし、大抵のことは今は携帯

をインターネットで繋ぐことで消化できる。僕がこれに触れようと
しなかったのは、きつとこいつが僕の心臓だったからだ。動くこと
さえ確かめれば、後は気にならないほどの存在。でも、すっかり心
臓の傷に気づいてしまうと、立ち上がれないほどの衝撃を起こすも
のだったのだ。そして、僕はその心臓に傷を持っていた。それは触
ると僕を一気に麻痺させるほどの威力を持つ。幸せな律動を刻んで
いるときは、なんともその心音が心地良い。しかし、一旦乱れた時
死を表す。そして、僕はこいつの……いや、こいつを通して出会っ
た女の子との関係で、一度麻痺した。電源は思いの外同じように点
いたが、心なしかそのスピード力は弱まった気がした。そしてやつ
と立ち上がったその画面に、僕は思わず身震いした。デスクトップ
に現れたのは紛れもなく僕で、その隣で笑っているのは香奈だった。
毎日写真で見ているとはいえ、この拡大された画面に映る香奈には
少々圧巻だった。心臓の傷がここでチクリと痛むのが、僕が女々し
くも彼女の姿を追い求めている証だった。その画像を変えるのでは
なく、見えなくするためにすぐさまネットの画面を繋いだ。メール
は会社ですつと使用の方もチェックしていたので、特に変わったこ
ともない。一通りトップページに現れる有名なサイトのニュースを
確認した後、僕は迷った。そして散々迷った末、検索入力した。
胃癌、この三文字を。数秒後に出たのは、一千万を超える数のヒッ
ト。上から順番にマウスをスクロールさせていくと、ほとんどが病
院案内や、療法の仕方だ。その中には、僕と同じくらいの年代の人
もいて、彼らはブログという媒体を使って自分たちの存在を表して
いた。何人かのサイトを移動するうちに、彼らの生き様に感銘を受
けると共に、僕は自分の数ヶ月後の姿を想像して怯えた。自分の腹
部を押さえて考える。こうなったとき、自分は彼らのように強くい
られるだろうか。否、きつと無理だろう。当たり散らすかもしれない
いし、男なのに場所もわきまえず喚き散らすかもしれない。それが
タイマーのように時間を計って迫ってきているのかと思うと、発狂
しそうな自分が恐くて両手で口を押さえた。

会社の後輩の女の子が、廊下でうずくまっているときがあった。声を掛けると、顔を上げる余裕もないほどに真つ白な顔をした彼女は、荒い息をして口に手を当てていた。具合が悪いのは分かったが、何をすればいいのかわからずにオロオロしているところに、あれは確か一番支店でお局力を発揮している先輩女性が現れた。あのときは、その女性が女神に見えた。動揺しすぎて助けを求める言葉も出せずにすがりついた僕を放り投げるように腕を払い無視すると、彼女は支店の中へと走っていった。

数秒後に紙袋を持った先輩が現れ、有無を言わず後輩の口に当てると背中をさすっていた。結局僕はその場で何も出来ずに、後でその後輩にお礼を言われても何も言えなかった。何もしてないのだから。却って先輩女性にお礼を言いに行くと、頭を軽くどつかれた後、あの症状が過呼吸であることと、対処の仕方を教わった。そして、原因は心的な物によるということも。その次の月、彼女は会社を辞めた。

彼女のストレスは会社にあったようで、僕は彼女の異変に気づきながらも、フォローさえも出来なかった。しかし、そんな彼女は僕を責めることなく、笑顔で挨拶して言ったのが、なんとも歯痒かったのは確かだ。そのこと思い出し、僕はゴミ箱の中から先週本屋で買って突っ込んだままの雑誌の包装袋を取り出して口元に当てた。この際多少汚くても仕方ないだろう。息苦しさを感じて大きく息を吸っても余計に苦しかった呼吸が、何回か息をするうちに嘘のようにだんだん吸いやすくなり、そして気持ちも落ち着いていた。頭の中で、先輩女性を再び崇めながら礼を言う。あの偉そうな口振りも、普通の女の子の二倍も横幅のある、彼女曰くチャームポイントのお尻も、全てが有り難い存在の一部に思えた。袋をはずすと、多少の違和感はあるものの、呼吸は正常になっていた。安心すると同時に、人間とは思えないもので、この際自分の限界に挑戦してみたくなった。今までずっと開くことを躊躇っていた、あるソーシャルネットワークワーキングサービス、通称SNSに繋いでみた。ちょうどパソコン

も開いていることだし、と自分に理由を付ける。SNSとは、無料で誰でも自分の日記を公開できるサイトで、数年前から流行り始めた物だ。そう、僕が大学生だった頃だっただろうか。もしかしたら流行に敏感な人はそれよりも前から始めていたかもしれないが、とにかく僕が手つけたのはその時だった。自分が登録している友達の数はあるべく目に入れないようにする。

僕がこのSNSを開かなかった理由は一つ、友達の数が一つ減っていることが怖かったのだ。実際、今も怖くて見ることが出来ない。半年開かなければ少しは減っていても当然だと思う。話すこともないから削除する人もいるだろう。友達自身がサイトの登録を削除した場合もある。しかし、僕が別に恐れたのはそんなものではなく、ただ一人、香奈の名前が消えているのが怖かったのだ。たった一人、彼女だけが。香奈の名前を探すことなく、目を通していない友達の書いた日記を、順番にスクロールして読んでいく。すると、中学の同級生が結婚したことや、高校の同級生が海外に留学していることなどを告げる日記があることに、驚いてはため息が漏れた。

そして、その日記の束の中に、香奈の名前は一つもなかった。そんなことに多少うなだれながらも、僕は半年間分の友達の日記にコメントを残していく。きつと彼らは見ないかもしれない。見ても返事を書かないかもしれない。それでもよかった。僕は、何かを取り戻したいのかもしれない。香奈とは出会った一番のきっかけは、ここだ。それはきつと何かに導かれていたのだと、今でも僕は思う。この世界に出会う人は決まっているという、その中に紛れもなく香奈は入っていた。彼女は颯爽と現れ、そして幻影だけ残して、また飛び去った。

「俊幸！ 外見てごらんさあい」

階段下から叫ぶ母の声のまま、カーテンをあけて外を見ると暗くなった闇の中に、ちらほらと白い綿が風で舞っているのが見えた。

「雪だよ。母さん、雪だ」

思わず胸が躍り下に叫び返すと、その返事も早かった。

「だから、言っているでしょ」

ああ、こんな夜は本当に香奈を思い出す。思えば彼女と出会ったのも（厳密には最初にも）

メールをしたのも）こんな寒さに震える冬の始まりだった。

*

世の中はバブルを思い出させるほどの好景気で、就職活動は売り手市場だった。大学三年生の秋になりそろそろ活動しようとしていた僕は、それでも直接声をかけてくれる大手の都市銀行もあることで、ある程度余裕のある気持ちで過ごしていた。周りの友達もほとんどが金融・保険業界を目指しており、それは学部特有の空気であり、特典もそれなりにあった。僕は毎日家でパソコンを使って企業の研究をしながら、合間を見ては登録したばかりのSNSサイトで遊んでいた。一緒にいなくても会話が出来て、それでいて情報収集もできる、遊びと勉強を一緒にこなせる唯一の道具でもあったのだ。その中でも特に活用していた、就職活動中の人間が集まるコミュニティサイトと呼ばれる一つの集まりの掲示板に、僕はクリックして入った。そこでは、かなりの人間が悩みや問題を抱えてコメントを残していた。その中のトピックで目を引いたのは、現在の進捗状況報告。

僕は今現在企業に提出し通過したエントリーシート（履歴書のよななもの）が三つ、そして一次面接をしたのが二つあった。最終的に六十社は受けると言われる就職戦争で、まだまだ始まりに過ぎない。ありのままを書いて掲載ボタンを押すと、数秒で僕のコメントが画面上に表れた。ほとんどの人間が五十歩百歩で、この時期に内定がもらえていることはほとんどない。まだまだこれからだし、焦る気持ちはなかった。

ただ、志望業界も書いたことで、同じ企業を受けている人と出会えるかもしれないと思っただし、情報交換もしたかった。そして、その願いは叶えられた。企業研究よりも色んな趣味のサイトを渡り歩き、再び同じSNSに戻ったときだった。自分のトップページに戻

ると、画面上にメールを知らせる絵文字が点滅していたのだ。吸い込まれるようにアイコンをクリックすると、一件のメッセージが届いていた。

【差出人】 香奈

【件名】 初めまして

【内容】

こんにちは。いきなりのメールすみません。私、桜田女子大学の古田香奈と申します。就職活動の掲示板で、とさんの活動履歴を見て飛んできました。私は焦って活動は始めたものの、エントリーシートも通過せずに落ち込んでいます。あ、暗くてごめんなさい。よかったら、書き方のコツなど教えていただきたいので、お時間があるときに返信貰えたら嬉しいです。お待ちしています。

僕は一度簡単にメールを流し読みすると、次に香奈と名乗る女のページへ飛んだ。プロフィールや日記を確認することで、彼女の言っていることが本当であろうということが窺え、むしろ僕の胸は一気に高鳴った。桜田女子大学といえば、有数の名門女子大でなかなかお目にかかることが出来ない。他大とは合同サークル、つまりインカレを行うこともできるが、名門の女子大に手を伸ばせる大学は、ある程度決まっっていて外部の侵入はしにくい。滅多にないこの貴重な出会いを無駄にしたまるかと、僕はメール画面に戻ると、返信のアイコンをクリックした。彼女のメールは文面も清楚で可憐さが窺え、余計に最初の一文にとまどった。

【差出人】 とし

【件名】 初めまして

【内容】

メールありがとうございます。就活大変だし、気が重くなっちゃいますよね。掲示板では書きましたが、実際まだほとんど行動してなくて、業界にも悩んでいます。コツと言えるかわからないけど、履歴書なら箇条書や線引きして目立たせる、面接なら言うことをまとめてからにしています。まだまだ分からないことだらけだから、

企業研究したり、OB訪問に力を入れようと思っています。またなんかついたら何でも言っておきたいね。頑張ろう。

文面はさりげなく、しかし出来れば次回に繋げられるような言葉で締め、僕は何度も読み直しておかしくないかを確かめると、目をつぶって送信ボタンをクリックした。

相手もパソコンの前で待機していたのか、返信はすぐにやってきた。前の彼女と別れてから二年。僕は生活に物足りなさを感じてしまったというほどではないが、確かに潤いを求めている。構内やバイトで女子との関わりは多く友達もたくさんいるが、久しぶりの高揚感が胸を締め付ける。

【差出人】 香奈

【件名】 返信ありがとうございます。

【内容】

返信ありがとうございます。まさかこんなに早くいただけると思っていたなかったので、ちょっと驚き半分感激しています。そうですね、まだまだですよ。でも、私は人見知りするところがあつて履歴書よりも面接が心配で。緊張して会話が続きません。きつと覚えたなら覚えたで棒読み。今から直らないし……ってネガティブばかりでごめんなさい。ぜひ情報交換お願いします。としさんは掲示板に書いてあった業界を受けているんですよ。

彼女は本当に感激してくれたのか定かでは無かったが、それでも返事を返してくれるということは、楽しく話せるかもしれない。とりあえず僕は逸る胸を押さえて再び返信ボタンをクリックした。そして、パソコンを机上に置き姿勢を正した。すると、身体はこたつから這い出たことで部屋の寒さに順応できず、ぶるっとした震えが襲う。リモコンを手に取ると、僕は暖房のスイッチを入れた上で、ベッドの上に放り出したニットのセーター（いじらしくも高校のときの彼女が編んでくれたもの）を被って防寒した。

【差出人】 とし

【件名】 こちらこそ

【内容】

ありがとう。人見知りかあ。俺はあんまりそれはないけど、反対にしゃべりすぎるのが心配だな。でも受ける業種によるし、女の子で総合職は少ないだろうし、そのままを出せばいいと思う。それで合格したところが本場に縁のある会社だと思うし。僕の業界はサービス業と金融・不動産で選んでいる。安定を取るか、楽しくても薄給を取るかで悩んでる。

香奈さん？　でいいかな。どう考えていますか。

送ってから見直してみると、いかに誰でも言えそうな口上を述べているか自分が情けなくもなった。時計を見ると、いつの間にか最初のメールを受け取ってから一時間が経っていた。一階からは夕飯のいい匂いがドアの隙間から彷徨い入ってきて、つられるようにパソコンを一度閉じると、僕は台所へ向かった。

それから、僕と香奈の三日に一回のペースでメールの交換が始まった。話すことはほとんどが就職活動においてだったが、その中の一割で僕は思いつく限りの質問をした。それは学校のことからバイトの話、今まで行った海外旅行などに及んだ。彼女も僕の家と同じように父親がおらず、しかし母親だけではなく祖父母と同居しているようだった。文面からも分かるように真面目に育てられたのだろう彼女は、仕事と割り切って働け、それでいて安定している信用金庫が第一志望のようだった。反対に僕はどうしても仕事に楽しさを求めたくて、希望に合う職種を探すために走り回る日々を送った。それでも彼女とのメールが途切れることはなく、近況の報告は続くもそれ以上の関係になることはなかった。こうして僕たちは、お互いのことを少しずつ知っていった。

彼女が冬に生まれたと言え、僕は春に生まれたと教えた。彼女にお兄ちゃんがいれば、僕は一人っ子だと答えた。彼女が行ったと報告する面接会場に僕も訪れていて、どこかですれ違ったのかとメールしては笑い合った（もちろん文面でだ）。お互いがA型で細かい性格だと話してはたとえ話をして冗談を言った。顔は知らなかつ

たけれど僕たちは確かにメールという細い線で繋がっている気がした。そして、春が来て、僕が面接を何十回と終えて桜が散り始めた頃、メールの数は倍以上に増えていた。彼女と現実に出会うという話になったのは、夏に入った頃だった。これだけでも半年ほどメールだけしていたことになる。

僕は自分でも淡泊だと思いつし、執着心もない。来る者拒まず、去る者追わずというほど鬼畜ではないが、それでも大学の男友達のなかでは付き合った女の数はそれなりの部類に入っていた。わりかし積極的に攻める僕がメールだけというのは貴重なことで、仲間の誰にも香奈の存在は話さなかった。人見知りだと言っていた通り、彼女に何回か誘いをかけても、断らないものの、はつきりと応じてくれるには二ヶ月を要した。世の中、犯罪方法も多様化していて僕なりの誠意は尽くしてきたつもりだったが、彼女の警戒心もひとしおだった。なるべくしつこくならないように気を付けながら何度か誘った結果、五回目のチャレンジにGOサインを出してくれた。

それは僕の地元の横浜で行われる盛大な花火大会で、他の花火大会とは違った味があることや、横浜をこよなく愛する僕としては、ぜひ一緒に見たかったのだ。それまでの経緯で彼女が千葉県の方方に住んでいることは知っていたし、電車で二時間かかるらしい旅は負担させるかとおもったが、それでも見たかったのだ。今思えばあの時から僕は我が儘を言いつばなしかったのだろう。日にちが決まっただけで、僕は親友にうち明けた。

「広瀬。ここだよ」

将来同僚となる広瀬とは、大学時代からの友達だった。香奈と初めてのデートを一週間後に控えた日、僕は広瀬を呼びだした。四年になるとほとんどの単位は取り終えて残すは卒業論文のゼミだけだ。それもきちんと出席しなくても、論文を提出すればいいところを選んだので、僕はひたすら遊びほうける日々だった。広瀬は、多くの面では同じ考えだったが、彼につきまとう真面目さが学校へと押しやり、ゼミだけでなく不必要な単位までを取りまくっていて、僕は

いつもそれを笑ってからかっていた。

「村上。お前、掲示板みてないのか？ 教授に呼び出し食らっているぞ」

ファーストフードのチェーン店で先にメロンソーダとポテトを貪り喰っていた僕に、広

瀬が言った。彼は無駄に本を読み漁ることを趣味としているらしく、ソファの横に今日も

分厚い紙袋が置かれている。

「まじかよ。なんで？」

思わず鼻からポテトが出そうになって、僕は慌てて鼻の穴を押さえた。のど元と鼻の奥

を異物が行ったり来たりしている感覚が痛くて、思わず指を突っ込みたくなってやめた。

鼻をすすると口に返ってきて、どうしようか迷った末に飲み込んだ。

「なんでって……。お前がゼミをさぼっているからだろう。俺は出ているからな」

置いた紙袋を軽く口を開くと、何冊もの古びた本が詰め込まれている。広瀬は「一応伝

えたからな」とだけいうと、すぐに一冊の本を取りだしページを捲る。

「まじかよ、卒業出来るかなあ。やべえ。浮かれすぎていたか」

僕がひとりぶつぶつ言っている間に、広瀬はトレーに乗った全てを食べ終えて、鞆から

さらに小さなはがきサイズの紙を出して広げた。

「広瀬、それ。まさか」

「あ？ 成績表。お前何？ これも取りに行っていないのかよ。単位の計算ちゃんとしたのか」

広瀬はポロシャツの襟を片手で直しながら僕の顔を睨んだ。名目上心配そう、しかし正

確には呆れたように。

「やべえ行かなきゃ。教授のどこにも行きたくねえな」

前期の試験は何も受けておらず、成績表がいつ配布されるかなど確認もしていなかった。

しかし、ここでもし単位が足りなかった場合、後期の授業登録を逃すと留年決定だ。呻

きながら顔を机に伏せると、隣のテーブルにいた二人組の女の子がクスクス笑うのが聞こえた。今すぐにも広瀬を残して大学にでも直行しそうな両足の太股を両手で押さえ、いかにも平静を装って僕は言った。今日の本題はこれだ。

「それよりさ、広瀬。出会っちゃったよ」

両肘をテーブルについて顎を寄せ、上目遣いで広瀬を見ると、広瀬も成績表から視線をはずした。

「なに」

「なに。じゃなくて、誰？ だろうよ、普通」

僕がニヤニヤしながら広瀬を見続けると、彼は仕方なさそうに言った。

「はいはい。誰？」

いかにも興味なさそうな広瀬だが、女好きのこいつには絶対に分かってはいるはずだった。「桜田女子大の子。ずっとメールしているんだよ。今度会うんだ。しかも、花火だぜ？ 夜だぜ」

「……」

「それが可愛いんだよ。もう、清楚っていうの？ お嬢様って感じ。まあ、あの桜田女子だしなあ」

僕は香奈の顔をこの時知らなかったが、真面目で大学では勝てない広瀬にいい顔をしたかったので、思う存分ぶちまけた。香奈のことは話すだけで幸せな気分になった。恋とはなんと無情なのだとなら思う。相手の言動を素直に受け止めようと、相手の気持ちになつて考えようとなんであんなにできるのだろう。そして、時間はなんと酷なのだろう。その幸せさえも麻痺させてしまう。

*

気が付くと、母が僕の肩を物凄く勢いで揺すっていた。うつすら目を開けると、鼻と鼻

がくっつきそうなほどの近くに真つ青な母の顔があった。しかし、僕の目が覚めた途端、はっとしたように目をそむけ、母が目元を拭ったのを僕は見逃さなかった。

「あんた、パソコンやりながら眠っちゃ風邪引くよ。早くご飯に下りておいで」

子供がするように手を丸めて眠い目に当てると目やにが溜まっていた。香奈との出会いを思い出しながら、コタツでうたた寝をしてしまったようだ。時計を確かめると二時間が過ぎていた。部屋の窓は、外との温度差で曇っている。水滴があちこちに滴り、カーテンの裾が湿っているのが手伸ばして分かった。曇った窓にじゃがいもほどの大きさの円を書くと、いつのまにか隣の家の屋根にうつすら雪が積もっているのが見えた。濡れた手を服の裾で拭きながら後ろの母に声をかけようと思って振り向いたら、すでに部屋からその姿は消えていた。その瞬間、屋根に降り積もっていく雪のように、僕の心にも醜いわだかまりが溜まっていく。母が僕を起こしたとき、きっと何か異変があったのではと思ったに違いない。そして、無事だとわかったから涙が出たのだ。それが子供として幸せで、人間として恵まれているのだと分かっている。心配してもらえるのが、どれだけ有り難いことなのか。それでも、自分が不幸を舞い込ませ、辛い思いをさせると分かっている何も出来ず、頑張ろうとしている家族が必死で涙を堪えていると、いつそ全部自分にぶつけてくれないかと思う。怒りも、悲しさも、そして理不尽さも全部。少しの悔しさと悲しさを胸の奥底に押し込めて蓋をする。カーテンを力任せに引っ張って閉じた。パソコンの電源を消そうと屈むと、そこには小さな水が幾重にも落ちていた。しかし、それが自分のか母のかは僕には分からなかった。

3 フルマラソン

腹部に痛みを感じて、目を瞑ったまま右手で胃の辺りを撫でる。服の感触が異なる気がしたが、それでも目を開けるのが億劫だった。もし、声が聞こえなかったら目を開けなかっただろう。

「村上さん、村上さん？」

数分前から起きていた僕は、その声で迷うことなくパツチリ目を開けたが、覗き込むように僕を見ていた男は驚いて目を見開いた。僕はそこでやっと自分の着ている服が自前でないことを悟った。天井と重なって、見たことのある男がいる。

「善如寺先生？」

眼鏡をかけた、逆三角形の顔が聴診器を首から垂らしながら頷いてくる。

「俊幸」

母は泣きそうな声をあげ、エプロンを付けたまま僕に飛びかかるうとした。可愛いクマの柄が無機質な病院の部屋の中で妙に浮いていた。それを驚いた看護師が引き留める。

「気分はどうですか？」

「はい、大丈夫です」

聞かれるがまま答えると、喉に何かがふさがっているようで声がかすれた。

「母さん？　なんでここに」

母は無理して笑うのを止めたが、恥ずかしいほど取り乱している。母さん、みんな見ているよ。恥ずかしいよ。そう思った言葉は、しかし声には出せない。

「君はご飯を食べている途中に吐血してね。救急車で運ばれたんだ。おせっかいで悪いとは思っていたけど、僕がお母さんに連絡をとっていたから、ここの病院に運ばれてきたんだよ」

先生の口調は穏やかなもので、心なしか微笑んでいるように見え

た。

「僕は……」

「ちよっとお腹が痛むでしょう。できればこれから治療に入りたいから、このまま入院してもらえるかな。お母さんには話してあるから」

視線を母に移すと、まだ泣きそうな顔で頻りに頷いていた。返事をしようと頷きながら、僕は一階に下りたところまでをぼんやりと頭の中で思い出していた。そういえばテーブルにつくと目の前に出された肉料理に見ただけで胃が痛んだ気がする。それでもせっかくだから食べようと、箸をつけたところまでしか覚えていない。最近ほとんど食事をとらず、胃に負担をかけないようにしようとしていたのだから、当たり前と言えば当たり前だった。

しかし、母の料理はそこの定食屋には負けないほど旨いのだ。食べると言われるとえづいてしまいそうだが、口の中で味を思い出すとすると、不思議にも腹が鳴りそうになる。

「母さん、ごめん」

母は、僕の言葉にハッとした顔で首を振ると、先生に背中を押されるようにして、病室を後にした。僕は母の姿がドアから消える寸前まで子供のように目で追いかけ、思わず手を伸ばしそうになった。胸中に広がる不安を、ぎゅっと目を瞑ることで押さえ、鼻の奥がつーんとしてくるのに気づかない振りをした。カチャカチャと器具が重なり合う音に目を遣ると、さっきまで母の背中を押さえていた看護師が僕の腕についた点滴装置をいじっている。

「あの一」

絞り出した声が、今度は思ったより大きな声で部屋に響いた。看護師は僕が眠ったと思っていたのか、咄嗟に小さく息を飲んだのが分かった。

「気分でも悪いですか？」

看護師は丁寧な僕に言う。診断を受けた時は悪魔の使いに見えたそれが、今はやはり天

使に見える。うん、世の中の意見はあながち間違っていない。

「病院って携帯電話はダメですよね？」

僕はベッド脇の小さなソファに、母のバックが置いてあるのを見ながら言った。

「そうですねえ。あ、でも、もしお持ちでしたらここの病棟ならパソコンが使えますよ」

そう言いながら、彼女は手元に置いてあったバインダーに挟んだ記録用紙らしきものに何かを書き込んでいる。

「そうですね。じゃあ、持って来てもらおうかな」

「そうですね、みなさん結構お持ちになっています。それと今は携帯電話でも、病院で使

える微弱の奴なら大丈夫ですよ。一応公衆電話もあるけど、そういう電子機器を持ってもいいと思います」

僕は彼女に合わせて曖昧に微笑んだが、第一印象は苦手だな、の一言に尽きた。はきは

きと話す声は、優しさはあるが元氣過ぎる。

「これはね、睡眠薬も含まれているから今晚は簡単に眠れると思うわよ」

彼女の言葉尻に幾分腹立ちながら、僕は不覚にもまた思い出してしまった。パソコンな

んかして、過去を振り返ってしまったからだろうか。僕はどうやって母に定期入れを持っ

てきて貰おうか考えてしまった。そのあといつのまにか眠ってしまったようだった。

カーテンの隙間から入り込む朝日で目を覚ますと、ソファの上には母親の蛇のような字

のメモ書きが残されていた。上半身を出来る限り伸ばしてその紙をつまむと、看護師が話

したのだろう、母はパソコンを持ってくると、僕が今日から四人部屋に移動すること
が書かれていた。僕がその紙を放り投げると、それはまるで楽しそうにダンスするように
ヒラヒラと落ちていく。そしてベッドの下に隠れてしまったが、拾う気にはならなかった
四人部屋か。具合の悪い他人同士と肩身を寄せ合うのかと思うと、僕は少し気分が暗くな
っていった。

*

「兄ちゃん。おい、兄ちゃん」

僕が再び目を開けると、太陽は真上に移動したようだった。部屋には日の光が差し込んでいるようで、とても明るい。だが、僕の真上には、ひげ面の年配男性が臭い息を吐きかけてきている。

「おお、みんな。起きたぞ」

男性はクルツと振り向き、ベッドを囲うカーテンを両手で持つと、その間から外に顔を出して叫んだ。

「本当かい。とんでもねえな」

そんな声が幾重にも重なって聞こえてきたかと思うと、今度はカーテンの隙間から人が湧いたように顔を出した。まるでどこかのお化け屋敷のように、浮き出した顔だけが一つ、二つ、三つ。そのどれもが僕を見て笑っている。

「驚かしたな。悪い悪い」

僕を起こした男性が、顎の下にフサフサに生えそろうた髭を撫でながら言った。

「俺は田中だ。ちなみに癌」

僕は田中と名乗る体格の良い男に言われるがまま頷き、背中をベッドにすりつけるようにしながら起きあがった。

「おい、お前らもちやんと身体だせよ」

田中が腹に力を入れた声で、顔だけの三人に言うと、彼らも僕の敷

地であろうカーテン

の中に踏み込んできた。その中は決して広いとは言えず、ベッドの僕は除いても、大人の

男三人が入ってくると色んな意味で息苦しさを覚える。そんなことはおかましなしに、三

人は僕のベッドにまで侵略してきた。

「綺麗な肌だなあー。ねえ、化粧水とか使っているの？ 今時この都会でこの肌はすごい

ねえ。髭のそり残しもない。この子、寝ていたのよね」

「森ちゃん、離れて」

ちよっぴり小太りで頭の髪がほとんどない男が、僕の両頬を嫌らしくなで回す。垂れ目

で細い目はまるで蛇のようで、普通に話せば優しい印象なのだろうが、今の僕にとっては

妖艶過ぎて恐怖さえ感じる。それを止めてくれたのが、僕よりちよっと年齢が上くらいの、

まだ青年といえるほどの男性だった。

「あんつ。だって、久しぶりにこんなに可愛い男の子みたんだもの。今日の夜はここで寝ようかしら」

青年に腕を引かれながらも、森ちゃんはまだ僕の頬に触ろうと粘っていた。僕が出来る

限りベッドの背の壁に身体を押しつけるように逃げたのは、直感ゆえだった。

「ああ、ああ。逃げているじゃない。森ちゃん、怯えさせてどうするの」

青年は森ちゃんを最終的に僕の足の方へ追いやった。

「ごめんね、これ、森ちゃん。で、俺はゆげ。弓に削るで弓削ね。変わった名前だから覚えやすいでしょ」

弓削と言う青年がこの中では一番まともに見えた。そして健康そうにも。

「この部屋はみんな癌なんだ。それぞれ場所は違うけど、治療していることには変わり

ない。色々あるけど俺たち仲良くやっているんだ。よろしくな」

「あ、はい。僕は村上です。一応まだ宣告されてから時間があまり過ぎていなくて戸惑っ

ているんですが、お世話になります」

座ったままだったが、なるべく丁寧に腰まで深く頭を下げた。布団に額が付くかと思っ

た。放って置いて欲しい、と思うが、仕事で身につけた営業力はこんなところにも働いた。

「そうかい、若いのにな。どこだ」

田中に言われて、僕は一瞬何のことだか迷い、数秒経ってから癌のことだとわかった。

「胃です」

「大将と同じじゃないですか」

弓削の言葉で僕も田中を見ると、彼は苦虫をかみつぶしたような表情をしていた。

「そうか。これから大変かもしれないけど、一緒に頑張ろうな」

田中の大将が差し出した手を、あまり力が入らない手で握った。

急に聞こえたパタパタという駆け足の音とともに近づいてきて、三人がいきなり慌てた

したかと思うと、逃げ出すまもなく昨日僕の腕に針を刺していた看護師がカーテンから顔を出した。

「もお！ 村上さんは安静だと言ってあったじゃないですか。はい、戻る！」

看護師はガラスを爪でひっかいた時に鳴る音と同じくらい不快な高い声で一氣にまくし

立てると、大将と弓削、そして森ちゃんの順にお尻を叩いてカーテンの外へ追い出した。

森ちゃんの、いゃん、という声は聞かなかったことにする。

「村上さん。気分はどうですか。ご飯は食べられそうですかね」

看護師は、三人を追い出すと、作ったような笑顔で僕の乱れていた布団を直しながら言った。

「すみません。一度朝にきちんと起きたんですけど、またいつの間にか眠ってしまったみたいで」

「いいんですよ。昨日結構強い薬入れましたからね。鎮痛剤ですけど。まだお腹痛みますか？」

布団を僕のお腹の辺りまでかけ直してくれたとき、僕はメモの存在を思い出していった。

「あの、昨日は母に伝言をしてくれたんですか。パソコンのこととか。ありがとうございます」

年齢は分からないが、一応敬語でお礼を言っておくのが礼儀とした。彼女は待っている

したとばかりに頷くと、完璧の笑顔を僕に向けた。首を横に振って答えた。

「それじゃあ、何かあったら私に言って下さいね」

彼女は僕の腕にまだついている点滴器具の装置のバルブを少しだけ緩めるように動かし

た後、立ち去っていった。部屋をでるときに、

「田中さん、森さん、弓削さん。村上さんは安静ですからね」

と、釘を差して。

「お邪魔しまあーす」

再びカーテンの前で声がしたかと思うと顔を出してきたのは、青年

弓削だった。

「平気？ 眠い？」

気遣わしいげに僕の顔色を凝視し、僕が首を振ると微笑みながら体を滑らして、中に入ってきた。

「あの看護士さん、怖いでしょ。小野さんっていうんだよ」

弓削は何食わぬ顔でベッドの中腹に座り、少しだけ軋む音がする。

その音を消すかのよ

うに、大將か森ちゃんのどちらかがテレビのスイッチを入れたのか、有名な司会者の声と

笑い声が聞こえ、すぐにその音量は下げられ、呟きほどに変わった。

「いえ、今日は眠れそうもないっすよ。なんか頭が重い気がするんですけど。昨日もあの

看護士さんに点滴して貰ったんですよ」

弓削は着ているパジャマの足の裾を整えると、履いている靴下を思い切り膝まで伸ばし

て上げた。その素足は顔色ほど健康的ではなく、しばらく日に当たっていないであろう袋

はぎは異様な白さを放っていた。僕の視線に気づいたのか、弓削が自分の足を撫でるよう

に触って言った。

「真っ白でしょ。もうずっと入院しているからね。きつとそこら辺の女の子より色白だと思

思うよ。でも難点は筋肉も落ちたことかな」

僕は弓削の足から目を離せずに見つめたまま、どうしてもまだ他人事だった。いくら最

近の不調があるとはいえ、僕の足や腕には筋肉がそれなりについているし、今年の夏に海に行ったこともありまだ黒さは抜けていない。そして腹には年齢があがったなりにすでに肉が付き始めていた。

「それよりさ、昨日も小野さんに点滴されたって、昨日からずっと

寝ていたの？」

弓削はズボンの裾を足下まで下ろし再びスリッパをきちんと履くと、僕の方を見て真顔で言った。

「そうですけど」

「一日近く眠っていたんでしょう？　もしかしたらそれ、小野さんのせいかもね」

顔を近づけ、声をひそめていうその言葉は、テレビの音に負けずとつぶやきほどのものだった。

「え？　どういうことですか、それ」

小野という看護師は、昨日の僕に対する態度や、先ほどの三人への行動は、少なくとも

フレンドリーと呼べるものではない。しかし、それ以上を表す嫌悪さが、弓削の顔と声音

から感じ取れた。

「あの人ね、俺たちにすごく怖いから気を付けた方がいいよ」

弓削は視線を逸らして言った。

「怖い？　さつきみたいに注意するってことですか？」

「いや」

視線が僕の点滴をつけた腕にいく。つられて僕も見ってしまう。

「あの人あちこちの病院をたらい回しにされているんだって。それの理由が」

「理由が？」

聞いてはいけない気がしたが、聞かないともっと後悔すると思い、唾を飲み込んで次の言葉を待った。

「小野さんに針つけられるとき、痛くなかった？　あの人何回も差すんだよ。つまり下手

なの。注射もさ。過去に何回も医療ミスして、あちこちの病院を渡り歩いているっていう

噂」

思った通りの結果に、僕は叫びそうなほど驚いたとともに、確かに何度か針を刺したよ

うで青くなっている腕の数力所をじつと見つめた。僕は一定量以上の鎮痛剤を打たれたり

したのだろうか。

「でも、医療ミスって免許剥奪とかになりませんか？　きっと噂ですよ。うわさ」

言葉とは裏腹に額にじつとりと汗が滲む。

「それが、小野さんの親父さんは都内のどこかのでつかい病院の院長らしい。それで、コネであちこちいけるんだと。でも、それがどこかはわからないんだけど。でも、あながち嘘じゃないのは、あの女が担当した患者は、間違いなく死んでいるんだ」

昼間の部屋には、個別カーテンを閉めていても楽々本が読めるほどの明るさだ。怪談話に近い都市伝説のような類を話すには似合わない時間だ。それでも、しっかりとそれは僕の背筋を凍えさせた。

震える指先を、弓削に向けると、僕の人差し指を彼はしっかりと握り、僕の方へ向けた。

「そう、君だよ。僕じゃない」

僕は自分で自分を指さしている。

「え、俺。でも弓削さんたちもあの看護師さんの患者さんじゃないんですか。部屋が同じだし、それにさっき仲良さそうにケツ叩かれていたじゃないですか！」

どうにかして噂を間違いだと否定してもらいたい、それが無理なら一人でも同じ立場の人間を増やしたかった。

「いや、俺と森ちゃんは、小野さんの後輩の女の子が見てくれているんだ。しかもかわいいんだよ」

「いや、それはどうでもよくて」

「まあさ、何を言われてもあんまり気にするなよ。でも、何をされたかはよくみた方がいいよ」

「そんな。弓削さん」

弓削は今までどっかり腰掛けていた体を、意外にもスツキリ上げると、片手をあげて茶目っ気たっぷりの目をした。

「困ったことは何でも言いな。ちなみに俺が隣、君の前に大将、奥に森ちゃんがいるから。テレビは持ち込み制。きつと金もないんだよ、この病院。いやだねえ、こんなガラス張りのビルみたいな建てるから採算合わないんだよ。っと、まあ、暮らしていけば段々分かるよ」

弓削は僕の返事を待たずに、緑色のカーテンを横に引いた。すると、その背中が驚いたように一歩後ずさり、彼の足がベッドにぶつかった。

「あの、すみません、このなかにいるのは村上でしょうか？」

聞き慣れた声がカーテンの外から聞こえた。姿は弓削に隠れて見えないものの、その声

は昨日取り乱していたのとは打って変わってしっかりしている。

「母です。息子がお世話になっています」

「いえいえ！　こちらこそ！」

二人の掛け合いは病院だというのを忘れそうなほど一般的で、かつ日常的なものだった。

弓削は数回頭を下げると、僕を振り返ることなく隣のベッドに移っていた。すぐにカーテンが勢いよく引かれるレールの音がし、それと同時に現れたのが、母だった。

「母さん」

昨日の言動を見た今、どんな態度を取るべきか一瞬迷ったが、それを拭い去ったのは、

またしても母の方だった。

「としぼう！　寝過ぎよ。あなた部屋移動するときに寝ちゃっていたんだって？　迷惑な

子ねえー」

僕はあまりの衝撃に目を見開いた。思わず病室から飛び出したくな

る。聞こえていたは

ずのテレビはいつの間にか消され、隣からは意味ありげな咳払いが聞こえてきた。

「母さん」

ベッドの右脇に歩いてきた母に体を寄せ、その口を両手で塞ごうとした。堪えかねたよ

うな吹き出した笑いが、明らかに僕たちに聞こえるように響いた。母の口を押さえたとき

に思い切り身体を動かしたため、左側の点滴が揺らぎ、僕の手を反射的に引つ張った。肉

を切られるような痛みが一瞬だけ走り、思わず母の口から手を放してしまった。

「なによ。あんた」

母はもつと視野が広いと思っていた。

「ここでは、ちょっとその呼び方やめてよ。なんだよ、いきなり」

「なによ、今更。あんたは昔頃からとし坊でしょうよ」

「だから、なんで今、ここで！ それを言うんだよ。ガキの頃の話だろう」

恥ずかしさ故に怒鳴ってしまいそうになるが、まだ残る少しの腹に沸く鈍痛と、少しの

理性で囁くように怒りをぶつけたが、母は素知らぬ顔だ。

「あ、これね、パソコン。部屋に置いてあったのをそのまま持って来たからね。それと、

これが着替え。ここに入れておくね。それと、これ、一応家族写真ね。寂しいでしょ」

今時古くさい忍者のような唐草模様の風呂敷をベッドの上に広げ、母は次々とそれらを

取り出しては、僕に手渡す。持ってきた荷物に夢中になり、一向に病状の話をしない母は、

風呂敷とは別に持っていた上等そうな紙袋から、今度は包装された

箱を取り出した。そし

て、隣のカーテンに向け声をかけている。驚いて僕も上半身だけ伸ばしてベッドから乗り

出すと、母はすでに弓削の陣地に乗り込んでしまっていた。足下に目を走らせるが、靴が

置いていないので、仕方なく裸足のまま隣に乗り込んだ。

「母さん」

母はすでに弓削の枕元にいて、包装紙は破り中身を自慢げに弓削に見せている。赤や黄

色、カラフルな袋に包まれた柔らかそうなクッキーやパウンドケーキが布団の上で整列している。

「どうぞ。これ、チョコ。おいしいです。これ、バナナ味。ちょっと微妙」

「かぁーさんっ!」

困った顔で一つのクッキーの袋をつまんでいる弓削の前に、僕は真っ赤になりながら母

の腕を引っ張った。

「なによ。あんたの分もあるから。子供みたいなことしないの。ねえ?」

曖昧に頷く弓削に満面の笑みで答えると、母はその場に僕を残してカーテンの外へと再び

出ていった。行った先は、想像通り。森ちゃんのところへ行き、しゃべり、大将のとこ

ろでクッキーをばらまいた。僕のところへ帰還したのはそれから十分ほどしてからで、母

の手からすでに半分以上が消えていた。

その間、僕は母が持ってきてくれたパソコンをさっそく起動させた。病院と言っても、

今はネット環境にも対応していて苦勞することなく接続することが

出来た。昨日なんとなく書き込んだ友達のブログに、返事が書き込まれているのを見つけたときに母親の素行のことなど頭から吹き飛んだ。一個一個確かめるようにチェックすると、ほとんどの友達がコメントを返し、食事に誘ってくれていることに、涙が出そうになる。

しかし、入院していることを伝えるには気が引けて、僕はその返事に再び書き込むのはやめた。時間は取り返すことが出来ない。確かに友達と離れていた時間は存在していて、それを埋める時間は持っていない。それにそのサイトにいると、どうしても香奈の名前を探してしまう自分に嫌気が差し、僕はそこをログアウトした。検索画面に戻り、ニュースを流し読みする。母は僕の脇に一つだけ備えてある椅子に腰掛けると、自分も箱の中から大きめのパウンドケーキを一つ封から切って取り出した。半分に割ると、その片方を無言で僕の方へ差し出す。母は昔からそうだ。半分か大好きで、なんでも自分のものをわけ、そしてその分僕のも半分ほしがるのだ。最近ではほとんど行くこともなくなった外食の時も同じことをするから、いつも僕は嫌がった。でも、こうなって改めて幸せなことだと思える。分け合える人がいるんだから。それに父はもういない。僕が半分もらってあげなくてどうするんだ。

この三年近く、社会に出てからほとんど一緒に過ごすことはなかった。いや、もっと前からそうだった気がする。会社社会、仕事、遊び。それでも母は何も言わず、僕健康ばかりを気にしてくれていた。僕は仕事が嫌いじゃなかったし、人とのつき合いも大事にしたかった。でも、周りばかりをみて、一番大事な者を見落としていたのだろう。尽くしたはずの会社は、僕の体調が悪くなったらあっさり切り捨てたではないか。会社が悪いわけではない、それが当たり前だ。でも、なぜか捨てられたような気になるのはなぜだろう。裏切られた、何のためにやってきたのだ、と誰かに掴みかかりたくなってしまうのだ。大事なものは、すぐそばにあったのに。間に合うだろうか、まだ。

「聞いて、とし坊」

「俊幸」

そう呼ばれるのがいやで、すぐさま訂正を発するが、母は無頓着だ。誰もテレビを付けていない部屋には、僕たちの声が妙に大声に聞こえる。たまに廊下を歩く看護士や患者の足音がするが、ほとんど期待するに値しない。あとでからかわれることを覚悟して、僕はその呼びかけに応じることにした。

「なに」

母を見ると、片方の頬を膨らませリスのように口を動かしている。膝の上には小さな欠片がいくつか転がっている。

「あのね、前のベッドの田中さん。職人さんなんだって。もう聞いていた？」

パソコンに真剣で聞いていなかった僕は、ただ首を横に振った。

「陶芸をなさっているそうよ。それでね、仕事はできないんだけど、趣味の範囲で病院の

スペースをお借りして子供達に教えていられるんだって」

母はスカート上に落ちていくくずを拾いながら言った。

「まだ聞いてなかったよ。じゃあ、僕は病院内で添乗でもしようかな」

言ってから、それが小さな皮肉に聞こえることに気が付いて母を見るが、彼女はこっちを見ていなかった。廊下をあるくスリッパの音が聞こえる。

「ちよっとお花に水入れてくるわね」

そういうと、紙袋の中にまだ入っていた花瓶と小さな花々を手にとって、母はカーテン

の外へと消えていった。その瞬間、自分のろくでなし度の高さにため息が出る。喉にひゅ

ーっと息が通ると、暖房で乾燥しているこの部屋のせいかいがらっぽさが残り何度か咳き込んだ。

「おい」

おそらく大将の声であろうそれが、カーテンの外で聞こえた。きつとベッドの上にいるのだろう。

「おい。新入り」

新入り、という単語で僕は自分が呼ばれていることにやっと気が付いた。

「はい？」

ほとんど反射的に返事をする、隣からまた殺したような忍び笑いがした。しかし、今はそれどころではない。ここは会社か。あいつは上司か。なんとなく上下関係を示唆されていることに疑問を抱きながら、しかし、心なし怯えて返事をする。

「お前な。母ちゃんはお前を心配しているのがわからねえのか。俺たちにまで気を遣っているじゃねえか」

大将の声は地下のどこまでも続きそうなほど深く、腹に響いた。わかっていてことを他人に言われることほど煩わしいことはないが、不思議とこの部屋の空間はそれを感じさせなかった。コーヒーを入れて回る支店長の顔が浮かぶ。いい当てられたことに、素直に反省していると、大将の言葉はまだ追いかけてきた。

「お前も何かを見つけてみればいいだろう」

カーテンに顔を隠されて見えないのに、僕には目覚めたときの髭を撫でる大将の顔がまざまざと思い浮かんだ。

「え？」

何を言われたのか分からなかった。てつきりもつと親を大事にしろとか言われると思う

ていた僕は、とても間抜けな顔になったことだろう。

「だから、お前も俺みたいに何かここでやればいい。あんまり寝てばっかりだと腐るぞ。

身体が元気なうちは自分のやりたいことをやれ」

「やりたいことか」

「お前、添乗って何やっていたんだよ」

「あ、旅行会社にいたんですよ」

「あー。そっちな」

他に何かあるんだろう。

「営業やって忙しくしていたし、これといって特技もなくて」

僕は休日になれば、ただカラオケに行ったり買い物に行ったり、とくに趣味と呼べるものもなかった。音楽鑑賞や映画鑑賞、読書も好んだが、ここで改めてやりたいかと聞かれ

たら疑問しか残らない。しばらくしても大将の言葉は返ってこない。じれったくなった僕

が、ベッドから起きあがり素足のまま床に足を下ろす。さっきは感じなかった、床の冷た

さがつま先からかかとまでを支配して思わず悲鳴を上げそうになった。ぐつと堪えて大将

のベッドの脇を囲うカーテンを少しだけめくるようにして覗いた。

なんと大将は本を顔の

上に乗せたまま、見事に熟睡しているようだ。掛けられた布団の胸の辺りが上下に動いて

いる。度肝を抜かれながら、起こさないようにカーテンを閉じて自分のベッドに戻ると、

弓削の周りが顔を出した。

「大将、寝ていた？」

確信めいた問いかけだった。

「はい。びっくりしました」

「よくあるんだよね。俺たちにも話しかけている途中に寝るの。気にしないであげて」

すぐにカーテンをしめた弓削にならい、僕もベッドに戻った。横になると、大将に言わ

れた言葉が何回も頭のなかを回り続ける。僕にできること。ここで、

今できることは何か

を考えた。何かあるのだろうか。

「弓削さん」

自分のカーテンを開けて、僕が呼びかけると、返事は早かった。

「なに」

「弓削さんって、何かやっていますか？　いつも、ここで」

弓削はカーテンを開けなかったし、僕も人の勝手に開けるつもりはなかった。開けられただけ。

「俺は……。秘密。でも、しばらくすれば分かる」

「そうっすか」

釈然としなかったが、彼もまたここでの生き甲斐があるに違いない。たとえ病気でも、

何かが支えているから僕にもみんな話しかけてくれたのだろう。優しいんだ。

「あら、あんたちゃんと寝てなさいよ」

花瓶を持った母が、ようやく病室に戻ってきた。怒られた子供のようになんかそそくさと布団

に潜りこむのが懐かしい。今日は昨日のように目が赤くなるようなこともなかった。

「母さん」

「なあに？　お腹すいた？」

病人扱い、というよりも子供扱いに、幾分恥ずかしかったが、それよりも聞こうと思っ

た。母の背中を見ながら。

「あのさ、なんかほしいものとかない？　それかしてほしいこととか」

僕の言葉に驚いて母は花瓶を落としそうになり、慌てて柵の上に乗せた。

「なによ、突然。どうしたの、なんかあった？」

心配顔で寄ってくるその顔は、昔とちつとも変わっていない。確かにシミも増えたし、

肌にたるみも出来た気がする。でも、母はこんな顔だったなあと、心の底から思った。

「うつん、なんでもないんだけど」

変に誤解をされないように、僕は何気なく微笑んだ。何か出来るとすれば、母親のため

になることをしたい。少しでも欲しい物があるなら何でも与えてあげたかった。だが、母

親は考えることもなく真顔で即答した。

「ダイヤモンド」

いきなりの直球に目ん玉が飛び出しそうになる。そんな僕を母は思いきり声を上げて笑った。

「ちよつと、田中さん寝ているんだからね」

小声で慌てて注意すると、母は笑い止んだ。そして再び真顔になって、冷たく言った。

「嘘よ。ない。何にもないわよ」

怒ったようにそう言つと、母は僕の方を見向きもせず、また出ていってしまう。

「はあ？」

訳が分からずに僕が叫んでも、その姿は戻ってきてはくれなかった。「なんなんだよ」

枕に右手をグーにしてパンチをすると、力を入れたせいか腹が痛くなる。隣のベッドか

ら忍び笑いは聞こえなかった。空気は読めるらしい。脇に置いて置いたパソコンを再び伸

ばした膝の上に乗せた。サイトに戻り、新しく書いてある日記を読んだり、掲示板を探索

する。僕がこうして寝ている間にも、世の中は何事もないように動

きみんなが笑っている

のだと思うと、自分が無駄に生きている気がしてくる。しかし、一方で自分がきちんと生

きていると言うことを認めたくなる。僕はここにいる。ここで、生きている。ふと、ある

スレッドが目に入った。そのサイトのなかで参加できるグループ、悩み相談所の項目だっ

た。リンクしてそこに入ると、昨日付けで女の子が悩みをうち明けていた。

【件名】友情？ それとも恋？

【名前】さち

初めまして。みなさんの意見を聞かせてください。私は今年で二十三歳になります。数

人と付き合いましたがいつも告白されて、最後は振られます。いつも好きなのか自分でも

わからないでいましたが、やっと最近好きかなと思う人がいます。でも、それがただのあ

こがれな気もして踏み込めません。どうすればいいのでしょうか。アドバイスをお願いしま

す。

随分抽象的な説明だな、と思いながらも、僕はその悩める女の子に返事を書いてみた。

一件もコメントがないのが可哀相になったのだ。

【件名】 無題

【名前】 とし

恋愛の数が多いのは悪いことではないし、いい経験。でも、できれば大好きな相手と付

き合いたいですよね。今のあなたの好きなひとがどういう人か分かりません。男性の視点で行くと、やはり好きな女性とは色んな意味のコミュニケーションをしますが、（ごめんなさい。あれ、

何を謝っているんだ）女性はそうでない方もいると思います。ただ共通するのは、やはり一緒にいたいと思えたり、その人のことをよく考えたり、胸が温かくなることが好き、だと思います。力になりたいとか相手にしてあげたいと思う気持ちです。上手くいくといいですね。

コメントを確認して決定ボタンを押すと、僕のコメントがすぐに画面に表示された。

二十三歳の彼女は、僕よりも二歳下なただけだ。これからいくらでも恋ができると思うと、羨ましくもあるが、不思議と幸せになっほしいと思った。赤の他人でさえ。僕はとりあえずそこでパソコンの電源を落とすと、画面の明かりが消えるのを待つて静かに棚の上に移動させた。母は戻ってこない。怒っているのだろうか、泣いているのだろうか。どうやってたら、周りの人を幸せに出来るのだろうか。

この、限られた時間の中で僕はそればかりを考えた。母が戻ってきたのはそれからしばらくしてからで、怒った様子は消えていたがパートに行くからとすぐにいなくなってしまった。寂しかったけれど、なんとなく気まずい雰囲気にいるよりはマシだと思ったし、もしかしたら母もそう思ったのかもしれないと邪推する。大将や他の二人とも話すことなくどんどん日は傾き、顔を見たのは夕食が運ばれてきたときである。それも、運ばれてきたものを中に入れるのに一斉にカーテンを開けられるときで、すぐに閉めてしまった大将と森ちゃんを気遣って、閉めなかった僕と弓削も気を遣って会話はしないでおいた。

それは夜に看護師さんが消灯にくるまで変わらなかった。そして夜中。僕は一つの声に起こされた。彼は呻くような声を上げているのだ。体調が急変して苦しんでいるのかと心配した僕は、枕元に垂れ下がるナースコールを押そうと思って、一瞬戸惑った。なぜか、それはうめき声に何か通じるものを感じたと言えるだろう。母が用意してくれていたスリッパがベッド下の足下に用意されているのに気づき、それを履くとカーテンを静かに開いた。ラックを動かさな

いように、音が鳴らないように気を付けながら。カーテンに注意をするあまり、スリッパが床とこすれる音がしてしまい、体中の動きを止めた。気配を察知されたのか、うめき声も一瞬にして止まってしまった。やはり、彼は泣いているのだ。今までならそのまま引き下がってしまったかもしれない。でも、僕は今何かをしたかった。迷惑かもしれない、でも、誰かの側にいてあげたいとも思ったし、それは思い出したときに心の中でお礼を言ってもらえればいいと思えた。そして、意を決しカーテンを開けて呼びかけた。

「大将」

大きな体はすでに布団によって隠されていたが、その中からは確実に起きている気配と、殺している泣き声が聞こえてきた。

「大将、ねえ。大丈夫ですか？」

もう一度呼びかけたが、声は届かない。僕は布団をめくると、声をかけることなく猫のようにその中へ潜り込んだ。予想外だったのか、何が起こったのかわからなかったのか、大将はとりあえずでない図体に似合わない可愛らしい悲鳴をあげた。女の子でも今時言わないような、驚いた声。そして身体をくるっと僕の方に反転させると、思い切り身体を端の方まで移動させて逃げた。その速さと言ったら、動物の本能だった。

「お前っ！」

低い声は朝聞いたのと同じくらいだったが、唯一違うのは泣いているせいで噎れていた。

初めて会った、しかも男に対してこんなことができると思わなかったが、僕は、ためらいもなく大将を抱きしめた。いや、抱きしめたと言うより、僕の決して長いとは言えない腕を巻き付けたというのが正しいだろう。振りほどかれないうちに、がっしりと。

「大丈夫ですか」

改めて言うと、大将は僕の頬に唾を飛ばしながら答えた。

「大丈夫だよ。離れろっ！ 何しやる」

そして、予想通り僕から逃れようと、身体をもがき始めた。明らかに体格が違う大将を

つなぎ止めるには相当僕も力が必要だったが、抱きしめてみて彼の身体が病魔に冒されて

いることが確認できた。骨格は元の通りにがっしりしているように見えても、体中の肉が

落ちてしまっている。

「苦しいんですか」

大将が動くのをやめた時を見計らって、出せるだけの心をこめた声で言った。

「いや、そうじゃない」

返ってきた答えはそっけなかったが、それでもベッドにいることを忘れて飛び上がりそ

うなほど嬉しかった。と、ちょうど廊下から一筋の明かりが部屋の中に差し込んだ。懷中

電灯、見回りの看護士だろう。修学旅行みたいに心臓をドキドキさせ時間がたつのを待つ

ていると、彼女はすぐに立ち去ってくれた。安堵のため息を漏らすと、今度は大将から話

しかけてきた。

「お前、胃だったよな。俺と同じだ。頑張る必要はねえんだぞ」

「大将？」

急な言葉に驚きながら、間近にある大将の顔を見詰める。暗いとはいえ、外からの明か

りが入っている病室は、人の顔が認知できるほどには明るい。大将の頬には小さな傷がい

くつもあった。そして顎に生えたヒゲは自由に伸び、しかし整えられている。厳ついよう

に見える目も、涙が混じって心が映えている。

「これはな、マラソンみてえなもんだよ」

そう言うと、一度顔を持ち上げて大将は近くに置いてある洗面器に痰を吐き、続ける。

「フルマラソンを走り切らなきゃいけないんだよ、苦しくてもな。いつか人は死ぬ。誰で

も最後はマラソンだ。いや、ずっとマラソンなのかもしれない」

「棄権したいっすね」

あの長い道をただひたすら走る行為が、僕は好きではない。

「すればいい。棄権するのは簡単だ。誰も止めない。でも、後悔するのはお前だ」

「大将は諦めないんですか？ だから、辛くて泣いていたんじゃないんですか」

「だから！ 泣いてねえよ」

一瞬真面目に怒られるかと思っただが、反対に大将はじゃれるように僕の腰をくすぐった。

大将の手を布団の中で手探りで掴み押さえると、今度は僕が大将の腰をくすぐった。そうやってしばらく、どこかのカップルがじゃれつくように絡み合つと、自分たちの考えた異常に僕は荒い息をしていたことに気づく。

「俺は、ここをもうすぐ出るんだ」

それほど大きくはないベッドの上にぎゅうぎゅうに横になりながら、僕は自分の耳を疑った。

「え、退院するんですか！」

「声がでえよ。退院といえそうだな。でも、ちょっと違う。ホスピスっていうのに行くんだ。聞いたことくらいあんだろ」

「ホスピス？」

「ああ。病院とは違う入院施設だ。嫁が探してきたんだ。海の近くでな。気持ちがいんだよ」

「そこで治療するんですか？」

「いや、しない」

「え？　なんで」

「治療はやめた。俺は棄権かもしれないなあ」

大將は顔を隠すように身体を僕とは反対側に向けた。しかし、その背中が震えることはもうなかった。

「お前。小野の担当だろう？」

小野の担当というと、僕が先生みたいだな、と思いながらも何も言わずにいと、大將は続けた。

「あの看護師は色んな噂があるけど、いい奴だと思うぞ。あんまり虐めるなよ」

「はあ。でも怖いですよ。なんかミスされたら」

救急車のサイレンがどこからともなく近づいてきて、あつという間に大きくなったかと思うと、次の瞬間止まった。ここに来て初めて救急車の音を聞いた。これは当たり前とも言える病院の日常の風景なのだろう。きっとこれから僕の生活の一部の音になる。でも、この音が聞こえる回数があまりにも少ないのは、今問題視されている患者の搬送拒否がここでも行われているのではないかと、なぜか漠然と不安になった。先生の数が足りないことを、表しているのだから。

「ミスね」

大將の言葉で、ハッと我に返った。

「お前、あの看護師が本当にミスしていると思うか？」
怒りを少しだけ孕んだ声。

「いや、それは分かりませんけど」

いきなり僕の方を向いた大將の顔は、野生の肉食動物の様に目に鋭い光が差す。

「なら、信じるな。あの看護師は、確かに何かをミスしたことはあるらしい。でも、それ

は医療に関することじゃなかったっていう噂だ。これも一部の噂だけだな」

「じゃあ、次々に担当患者が死ぬって言うのは」

「お前な、ここをどこだと思っているんだよ。病院だぞ。人なんて毎日死んでいるんだ。」

それにあの看護師は、主に重病の患者の担当だ。お前もだぞ。そういう嫌な役目をやらさ

れているんだよ。もしかしたら、自らやっているのかもしれない」

「なんで。そんな」

「さあな。それはわからん。でも、まあお前も出来るだけ楽しくやるんだな。あいつらは

良い奴らだ」

大將は隣と、斜め前にあるカーテンの方を交互に指さした。そして、予告もなしに僕の

身体を自分の陣地から追い出した。そう、力任せに。

「たいっ！　うわ！」

寸での所で体勢を立て直してベッド脇に立つと、すぐに布団の中から、聞こえよがし

な鼻息が聞こえてきた。狸寝入り。

「田中さん。幸せですか」

布団が静かに上下に動く。返事は期待してはいなかったのかもしれない。むしろ、聞

きたくなかったのかもしれない。幸せは何を基準に決めるのだろうか。ここに横たわり、死に向かつていこうとする男に聞きたかった。でも返事はない。自分で確かめることは怖い。もしも、最期の瞬間幸せだと思えなかったらどうすればいいのだ。泣くのか。笑うのか。それを決めるのは、一体誰なのだろう。大將の陣地のカーテンに手をかけると、後ろからは本物らしき鼾が聞こえる。僕は、静かにベッドに帰った。

翌朝起きたときは、大將は不機嫌ながらもカーテンを開けて食事をしてくれた。それが昨夜の行動の賜物かは分からなかったけれど、僕はいつも喉を通らないお米を、今日はお茶碗一杯きちんと食べることが出来た。朝食の後は、母が病室にやってきた。パートの前

だという。そして、僕が今日から少しずつ治療を開始すること、家に広瀬から電話があったことを告げた。

今日は母親も幾分スッキリした顔で、本人曰くよく寝られたそう。仕事に行く母親の背中もすがすがしく、送り出し甲斐があった。ただ多少の申し訳なさと共に。朝食の片づけを終えると、何気なくパソコンを開いた。もう躊躇わずに見られるようになったブログをクリックすると、なぜだかメールのアイコンが点滅している。もう誰からも返事はくるはずじゃないかと不審に思っただけをクリックすると、知らない名前の女の子からのメールだった。思わずそれを開いた。名前だけだと分からなかったが、内容を見て、それは僕が何気なく昨日書き込んだ掲示板への返事のメールだというのが分かって驚いた。

【名前】さち

【件名】ありがとう。

コメントありがとうございました。そうですね。私は今、彼のことを大事だと思うし、側にいたいと素直に思えます。好きってこういう気持ちなんだな、と気づくことが出来ました。彼とは歳もかなり離れていて、なかなか周りの友達にも相談できなくて……。上手に行くかはわかりませんが、気持ちがスッキリしました。出来るだけのことを後悔しないように頑張ります。ありがとうございました。

一度読み終わってから、もう一度確認した。言っただけだと目についた質問に、当たり障りなくコメントしただけだったのだ。それなのにこのサチと名乗る女の子は、わざわざメールで返事をくれた。頭のなかに、一筋の光りが差した。ただの思いつきであるのは分かっている。

しかし、残された時間、限られた空間の中で、僕は最後まで社会と繋がっていたかった。

そして自分に価値を見出だしたいのだ。夢中で画面をトップページに移動させると、僕は今登録してあるメールアドレスとは異なるも

ので、新たにSNSに登録をした。どれだけのことが出来るか分からない。でも、何より誰かの力になってみたいと思った。これまでこんなにもそれを願ったことはなかった。きっと人間誰でもその瞬間まで気づかないことなのかもしれない。別の登録をしたのは、同じく登録して僕の存在を知っている友達に、知られたい欲がなかったからだ。変なことをやり始めた、何かあったのではと思われたい欲があった。そして、香奈に気づかれた欲がなかったのだ。それが、一番の本音だろう。トップページで新しくサークルを作ることにした僕は、二つ目の名前を『神』とした。そして、紹介文にはこう書いたのだ。

『恋愛診療所』

女性のみなさま。悩んでいませんか？

人生楽しんでいますか。一度きりの人生楽しんだもの勝ち。

でも、たまには悩み落ち込む時もある。誰かに話を聞いてほしい。

でも、誰に？ そんなとき、書き込んでください。メールを下さい。

アドバイスをします。導きます！

信じなくても良いんです、吐き出しなさい。未来を描くのは、自分なんです。

書いていて文章がおかしい恥ずかしいなどの疑問は起こらなかった。この『神』の存在

は僕であり、僕ではない。何か馬鹿にされるようなことがあっても、落ち込むことはないのだ。もし、誰かが頼ってきてくれたら、それだけで僕は温かい返事を全力で考えよう。そのサークルを立ててから、僕はその日何度もそのページへ行ってしまふようになった。しかし、コメントがされることもなく、メールがくることもなかった。

「おい」

かなり大きな呼び声に目を上げると、ベッドの前に大将が立っていた。今日は誰もカーテンを引いていない。その大将の顔を見て、僕は彼が何度か呼びかけていたことを察知した。

「お前透明のイヤホンでもしているんじゃないのか？」

大将の冗談とも怒りとも分らないつつこみに曖昧に笑い返すと、僕はパソコンの蓋を閉めた。

「森ちゃんも、弓削も」

二人もその声で顔を上げた。

「俺、昨日こいつには言っただけだ。ここを退院するんだわ。今までありがとうな」

「あなた」

ドアの方を見ると、大将と同じくらいの年配の女性が立っていた。「おお、来たか」

そのやりとりで、ドアの側の女性が大将の奥さんであることが分かった。大将とは不釣り合いなほどに小柄で、多少老けてはいるものの、街で歩いていた

ら一瞬目を引かれそうなほどの美人だった。

「え、大将っ！ 退院でということなのっ？」

森ちゃんが、着替えていた上半身のパジャマを首にぶら下げたまま大将の方へと歩み寄

った。奥さんは、黙って大将の荷物をまとめ始める。僕は隣のベッドの弓削を見たが、彼は予想外にも何の反応もせずただ二人のやりとりを眺めている。

「俺はな、退院して後はのんびり暮らすんだよ」

「そんな。一緒に治療を頑張ろうって言ったのは大将でしょ？ ねえ」

大将は困ったように笑いながら、森ちゃんの頭を撫で、最後には軽く叩いた。

「しつかりしろよ。新しくとし坊も来たじゃないか。まあ、来ていいところじゃないけど

よ。それでも仲良くやれよな」

「大将」

奥さんは、大将のやせ細ってしまった身体をまるまる隠せるほどのモコモコのダウン

ジャケットを背中からかけた。掛けられたそれに素直に袖を通すのが、大将が家でどう過

ごしていたかを写しだすようだった。

「大将、これ」

「おう、なんだよ」

弓削がみんなの視界になる、部屋の一番奥に置いてある段ボールの箱から取り出したの

は、物凄い数の、丁寧に折られた千羽鶴だった。

「俺、これ入院患者の仲間達に作ってあげているんすよ。これ、大将の分。持っていってください」

弓削が大将に手渡すと、それは床に付きそうなほど長かった。

「なんだお前。いつもカーテンの中でコソコソやっていると聞いたのかよ。お、重いな」

手に取った鶴の束を首に回してにつこり笑う大将は、まるで全快で退院する男のようだった。

「結構大変だったんだから、大事にして下さいよ」

「お前、なんでこれ」

奥さんが荷物を鞆に詰め終わったようで、今度はベッドの整理を始めた。特に汚れてはいないようだ、乱れた布団を直している。

「俺、大将が陶器を作っているの羨ましかったですよ。俺も何かしたかったけど、特技

となくて。だから、鶴を折っているんです。みんなに。みんなのはまだまだですけど、

大将の分はちょっと早めに」

「弓削」

「大将、お元気で。っていうのもおかしいですかね」

弓削は恥ずかしそうに後頭部を大げさにボリボリ掻いている。

「いいじゃねえか。お前も、元気でな」

大将は右手を差しだし、それをがっしりと弓削が握りしめた。両方の手が白く細くなっ

ているのに、普段の生活では見落としがちな、小さな逞しさがあった。

「大将、お元気でねえ」

森ちゃんも点滴の器具を引きずりながら、右手を差し出した。僕も一瞬迷ったけれど、

大将に出会えたことに感謝し、右手を差し出して握手した。

「主人がお世話になりました」

奥さんが僕たちに頭を下げると、てっぺんの根本が真っ白だった。

日本人形のように細

身できめ細やかな肌をしているこの奥さんも、日々苦勞しているのだと再確認させられた

気分だった。きっと染めなければ、真っ白なのだろうと思えるほどで、しかし綺麗にする

ために美容院にいく時間の余裕がないことも窺えた。何度もなんども振り返りながら頭を

下げていく奥さんに、僕たちもつられて振り子のようにお辞儀を繰り返した。きつと二度

と会うことのないだろう、彼らに。僕は出会ってまだ本当に間もない大将の別れに胸が痛

んだ。それは、きつとこの空間のなせる技なのだろう。僕はこの部屋の仲間を、同志と思

っていたのだから。

「とし坊」

ふいに呼ばれたその名に、僕は我に返って頬が赤くなるのが分かつ

た。

「弓削さん、それはマジでやめてくださいよ。母親にも言っているんですから」

弓削はベッドの上に胡座を掻きながら僕の方を見ていた。

「いいじゃん。可愛くて。昨日さ、大将のどこ行っただしょ？」

真つ直ぐに見てくる瞳はごまかせそうにない。森ちゃんは、大将を見送ると行つて部屋

を出て行つた。ここには二人きり。言つてもいいだろう。

「ええ。実は夜中目が覚めて。それは」

「大将泣いていただろ？」

「えー？ 弓削さん知っていたんですか？ なんで」

弓削は少しも揺らがぬ視線で、僕を見つめ、そして言つた。

「あれは昨日に始まつたことじゃないんだ。かなり頻繁に大将は夜になると泣いていた」

「え、そうだったんですか。最初は苦しんでいるのかと思って。でも、泣いているのを見たら放っておけなくて」

「お前さ、長男？ 妹とかいる？」

「いえ。一人です。でも、父親が小学生の時に死んだんで、しつかりしているとは言われますけどね。……なにか？」

怪訝そうに答えると、弓削は納得したように頷き、そして言う。

「やっぱりね。俺は毎晩知っていたけど何もしなかった。そして、森ちゃん、彼は何も知らない。大将の泣き声の側で大きないびきを掻いている」

大将に頭を叩かれ、弓削の後ろに隠れるように回る、大人なのにちよっぴり子供な面をみせる森ちゃんが、鼾を掻いて寝る。あまりの想像の容易さに、僕は場違いにも吹き出しそうになってしまった。

弓削もそれがわかつたのか、口元を緩ませた。

「想像できるでしょ。多分大将は誰かに気づいてほしかった訳じゃないよ。あの通り外見はがっしりして強そうだし、それをちゃんと普段は通していたしね。でも、誰でも弱くなるときはあるってこと

だよ」

なぜだか、何かが僕の中で引っかかる。

「でも、同じ病気を持った者同志、悩みも同じだと思いますよ。聞いてあげれば楽になるかと」

「それで？ カウンセラーにでもなるの？」

「え？」

突拍子もない弓削の発言に、僕は開いた口がふさがらない。右手で顎を押さえて意識的に閉じようとした

「ここはみんなが悩んでいるんだよ。お前だって病人だろう。ホイホイ人の悩み聞いていい気になるなよ」

あまりの戦闘態勢ぶりに、僕までつられてイライラしてきた。なんでここまで言われなきゃいけないんだ。僕はただ話を聞いてあげようとしただけじゃないか。窓の外にはどんよりと厚い雲が覆っている。そういうえば、外に出てないからどれだけ今寒いのかも忘れちゃったな、と思っていると、弓削はため息をついた。

「悪い、言い過ぎた。でも、あんまり周りに首つつこむなよ」

勝手に一言だけ投げつけると、まるで引きこもるように弓削はカーテンを閉め始めた。

「ちよつと！ え！？ 弓削さん！？」

訳が分からなかった。僕は何かしてしまったのだろうか。空気が読めない男なのだろうか。僕も森ちゃんが帰ってくる前に、そつとカーテンを閉めてベッドに寝そべった。

4 消えた恋

始め数日は、僕の掲示板には特に書き込みがされることはなかった。思いつきで始めた

ものだし、多少残念ではあるけれども、弓削の言葉も妙に心にひつかかっており、書かれ

ないならそれはそれでいいと思っていた。出会い系目的と勘違いされたか、顔も知らない

奴に恋愛相談をする気になる女の子がいないのかは分からなかったが、粘り強く待つて五

日、パソコンを開けるとそれは記載されていた。それを見たときに悲鳴をあげてしまいそ

うなほど驚いたのは言うまでもない。まるで恋人からの手紙が届いたようだった。

『恋愛診療所』

【名前】きょうこ

【内容】元恋人が……

現在付き合つて半年になる彼氏がいます。私、二十歳 彼氏、二十歳の同級生。相談

は、元恋人の存在です。高校生の時に彼がつき合い、別れてからも友達関係が続いている

そうです。連絡をとるくらいなら許せますが、彼は三ヶ月に一回、今は美容師をしている

元力ノのところへ行き、髪を切つて貰っているのです。それを私に隠そうともしません。

一度嫌だと言いましたが、止めるつもりはないそうです。どうしたらいいでしょう。

読み終わって考える。昔の彼女の存在か。僕は一発目の質問にきちんと答えたい気持ちと、やはり男なので相談者の彼氏の気持ちがあ

からないでもない気持ちに惑わされた。もし、香奈と別れてから次に彼女が出来ていたとする。そうしたら僕はどのような行動をとっただろうか。香奈から連絡が来たら、会わないでいる自信があるだろうか。でも、それを彼女に知られたら。僕は何ていうだろうか。友達だと、いうのだろうか。僕には気持ちがあるのに？ いや、それならば彼女なんて作らないだろう。堂々巡りだ。しばらく考えた後、キーボードの上に手を構える。

【名前】 神

【内容】 元恋人に対しての悩み

拝見しました。内容的には、かなりの方も経験があることもかもしれません。それでは男の（主に僕）の意見を述べます。おそらく友達、という形ででも側に置きたい女の子なんだと思います。だからこそ好きになって、別れる形が嫌いになったのではないからかもしれないですね。あなたの場合、嫌だと言ったにも関わらず彼氏さんは行くのをやめようとしません。対処できる行動は二つあります。一つは、あなたも美容院に付いていく（しかし、これはかなりの確率で重い女になりかねますので、終わる頃迎えに行くとかがいいでしょう。）二つ目は、別れを覚悟で止める（きつと二人が繋がっている限りあなたは苦しい思いをします。それならば、遅かれ早かれけじめをつけましょう。時間がたてばたつほど辛くなります。）ただ、彼氏さんがあなたと付き合っているからには、やましい気持ちは無いと思います。よって、出来れば喧嘩口調ではなく、優しく甘えるように素直な感情を述べれば、きつと彼氏さんも答えてくれると思います。きつい言葉となりましたら、お詫びします。幸あれ。

コメントを書き込むと、すぐに彼女は返事をくれた。この狭い病室の中で、僕も出来ることを見つけられた気がした。重い曇り空さえも、自分の価値を少しだけでも見いだせたときには愛しくなる。思わず鼻歌でも零れてしまいそうだ。どんどん食事がとれなくなっていくのも、大將がいなくなってから明らかに弓削と森ちゃんに元気がなくなっているのも気にならないと思えるほどだった。誰にも秘

密。僕はやりがいを見つけた。

それから、最初の数日が嘘のように毎日毎日相談が寄せられるようになった。今のところ薬の治療の僕は、ほとんどの時間をこの相談につき込んだ。母が来てくれる数十分を除いて。

【名前】 ななみ

【内容】 幸せって？

付き合っていて、カップルならマンネリって当たり前前に訪れますよね。その時の対処法

を教えてください。私は彼の態度に最近ついていけません。遊びに行っても、文句を言うだけ

です。買い物も面倒くさい、カラオケは下手だから嫌だ、ボーリングは重い。そんな感

じでいつも結局漫画喫茶でダラダラします。ネガティブなところもあり、あんまりきつく

言くと喧嘩になるよりかえってへこんでしまいます。でもこれ以上彼に合わせるのも疲れ

たし、幸せだな、と感ずることができません。アドバイスをお願いします。

【名前】 神

【内容】 返信

ありきたりだけど、一番は相手の幸せが自分の幸せと思えることです。でも、愛情の押し売りは違ってきます（決してななみさんがそうだというわけではありません）あなたはどうしてほしいのでしょうか。それで自ずと答えは出ます。尽くしてほしいのですか？楽しみたいんですよね。そどれくらいの頻度で会われているかは分かりませんが、もっと会いたい、遊びたい、と思うことが大切でしょう。自分はこれだけしているのに、と思ったときには愛は消えかけているのかもしれない。きっと彼も何か考えるところがある、でも話せない、男ってそういうものです。目線を合わせて、爆発する前に歩み寄ってみてください。本音で話すと距離も縮まるし、次

は思いっきり遊べるかもしれません。あ、くれぐれも暴力はなしです（冗談です、はは）幸あれ。

ななみからは返信が来なかった。それ以上コメントが付け足されることもなかったので、その後彼女がどうなったのかは分からない。僕のアドバイスが気に入らなかったのかもしれない。顔も分からないのはお互い様の話であって、礼儀があるかどうかも話してみないと分からないのだ。それを承知で作ったものの、なぜか行方が気になってしまっただけではないだろうか。自分が診た患者の風邪が治ったか気にするだろう。車の修理工場も同じだ。直した車がきちんと走ってくれることを願っている。同じように僕も、アドバイスした人たちの今を知りたかった。そして診察後を気になっている間に、新しい相談者は増えていた。

【名前】 まりえ

【内容】 どっちか選べません

こんにちは。私には付き合って一ヶ月の彼氏がいます。お互い専門学校生です。大好きだし、これといった不満ありません。でも先週高校生の時ずっと好きだった相手と再会し、ひょんなことからキスをしてしまいました。その後は彼氏への罪悪感で上手く話せません。でも最低なことにその男友達とはまた会いたいし、遊びたいと思ってしまいます。

彼氏のためにも会わない方がいいのでしょうか。

【名前】 神

【内容】 昔の恋

まりえさん、こんにちは。キスをしてしまった、とはどういうことでしょうか。遊びですか（それもダメですが。）もし、迷う気持ちがあるなら、フリーになることをお勧めします。一番傷つくのは今の彼氏さんです。男女の友達と遊ぶのは、二人でルールを決めたりすればいいと思います。しかし、それ以上はよくない。もし、あなたが彼氏さんに報告されたらどうでしょう。

「今日ねえ、昔好きだった子とキスしてきたんだ」と。

怒り狂いませんか？ あのご判断は、あなたが責任を持って決め、責任を持って行動して下さい。幸あれ。

コメントをしてから悩む時もあった。もう少し柔らかく言えばよかったと思うときもあったし、反対にもっとハッキリ伝えたかったと思うときもある。それでも、上手く行きましたと報告を貰ったときほど嬉しくなることはなかった。小野看護士も僕の顔色を見て、何やら楽しそうだと声を掛けてくれたし、母との気まずさも消えてきた。しかし、確実に僕の体力は無くなっていく。薬のせい、食欲はなくなり、睡眠欲ばかりが増し、性欲なんてものは聞いたことがないほど働かなくなった。生きるための要素を確実に奪われていき、僕は死を認めざるを得なくなってきた。最初は行おうとしていた手術も、開いてみたらあちこちに転移していたらしい。そう、信じられないが、僕は死ぬらしい。

【名前】 ちび

【内容】 言うか迷っています

初めまして。今迷っているの聞いてください。彼氏と別れて二ヶ月がたちました。結婚も考えていたので、振られたときはショックでしばらく鬱状態に陥りました。しかし、彼の最期に言った、再会した時にまた認められあえたら始めよう、という言葉があり頑張ろうと決心しました。その矢先に会いたいと言われ、ご飯を食べ、誘われるままに一線を越えました。好きなので拒否できません。そのあと同じようなことを三回ほどしました。でも、付き合うことは拒否されます。その上、メールでやりたくなったら声をかけて、だとか、俺がそのうち結婚したらどう？ などの暴言を投げかけてきます。共通の友達からの情報では、彼には新しい彼女が出来たというのです。これは間違いないようで、しかも時期が一週間ほど被っています。メールが来ると普通に返していますが、どうもモヤモヤしてしまって気分がよくありません。どうすればスッキリするでしょう。彼との再びくる未来を信じて頑張ってきたのに、全部を台無しにされたようで、食事もお腹いっぱい食べたいほどです。助けてくだ

さい。

パソコンを開けてこの文面を見た朝、思わず口に含んだおかゆをベッドの上に吹き出してしまった。濡れた米粒がパソコンやよれよれのパジャマのあちこちにくっついていて。それを慌てて布巾で拭き取りながら、僕はもう一度それを今度はじっくりと読んだ。手紙でもないただの機械的な丸文字からも、彼女の緊迫感が感じられた。それはあまりにも悲痛な、助けを求めた叫びだった。まさか自分でもこんなに真剣にアドバイスを求められるとは思っていなかった。

自分の意見を言うのが、初めて怖い、と思った瞬間だ。それでも始めたからには無視するわけにもいかず、僕はいつものようにまずは手を構えた。それを、反対側から森ちゃんが不思議そうに眺めている。しかし、書き込もうと何度か最初の文字を打ってはみたものの、納得がいかないことで消してしまった。久しぶりにほとんど食べないまま食器を片づけてもらった。きつと医師に報告されるだろうが、そんなことはどうでもいい。僕は力チャ力チャと廊下から聞こえてくる器具の音のイライラしながら頭を抱えた。どうするか。今更弓削の、安易に相談に乗るな、意見を押しつけるな、と言われたことが頭をよぎる。パソコンを開けたまま、僕はベッドに横になり目を閉じた。病室のドアが開く音がした。この時間だと大体検温か、誰かに点滴だ。黙っていても口に体温計を挟んでくれるし、腕に針も刺してくれる。僕は最近甘えているんだ。母がくればほしい物を意のままに告げるし、看護師には無言の甘え、医師には痛いのと気持ち悪くなる治療は止めてください、というほどだ。でも、今は甘えたい気分だ。だから僕は目を開けることもなく近づいて来る足音を聞いていた。誰かが僕の側にきて、顔を覗き込んでいるのが気配で分かる。目を開けようとしたその瞬間、額に激痛が走った。指で思い切りはじかれたような痛み。

「いつてええ」

押さえられずに宙に吐き出した叫び声を、目を開けた途端に飲み込んだ。

「広瀬」

「よお！ 元気そうじゃねえか」

久しぶりに見た広瀬は相変わらずだ。

「お前、今日、仕事は？」

彼はスーツではない。スーツでないのが災いして、ジャケットの間から見えた腹が目立っている。

「馬鹿だなあ、今日は日曜日だぜ。頭もっと回転させておけよ。仕事復帰したときについてこれねえぞ」

広瀬は外との温度差のせい、鼻の頭を真っ赤にしている。そうだが、もう世の中は十二月になる。ここにいると時間の感覚もなくなってしまふようだ。

「あ、ああ。でも大分惚けてきたから、今はパソコンやって暇をつぶしているよ。おかげ

で今度は目がやられそうだ」

僕の冗談に広瀬は高らかに声を上げて笑った。ああ、こんな久しぶりだ。

「お前は病気を直しに来ているんだろう。余計なものしよいこんでどうするんだ」

そういえば髭を数日剃ってなかったな、と顎に手をやると、広瀬は気にしないという風な顔を作り、右手を軽く振った。

「それより、これかあー。お前の母ちゃんが言っていた、夢中になっっているものって」

母さんが何をいったのか分からなかったが、パソコンの画面は僕の掲示板になっていた。

「恋愛診療所、だあ？ お前が？ アドバイスをしているのか？」

広瀬は口角をつり上げて、ニヤニヤしながらどんどん顔を近づけてきた。

「なんだよ。お前には関係ねえだろ、見るなよ」

ベッドの左側に椅子を持ってきて座っている広瀬から、画面を反対に向けた。

「まあまあいいじゃないか。見せてもらんしゃい」

半ば力づくで広瀬はパソコンを自分の方へ向けると、彼は最初から順番にスクロールさせているようだった。

「ふうーん、面白いな。でも、お前神って何だよ」

「しょうがないだろう。友達に知られたくなかったしさ。IDを新しく作った。それに」

「それに？ まさか、お前香奈ちゃんのこと心配している？」

広瀬の言葉に僕の顔は一瞬で真っ赤になった。それは、怒りではなく、図星による恥ず

かしさだ。そう、第三者から見たらどうでもいいことを、きっと僕は必死で考えているの
だろう。

「うるさいな！ 香奈のことなんて忘れた。あー、忘れた忘れた」

言いながら両手で両耳を塞いだ。どうしても香奈の名前を聞くと胸がまだ締め付けられる。僕の病気は胃だ、胸じゃない。

「おい、俊。村上さん」

広瀬が無理矢理耳から手を放させようとしたが、僕は力を込めさらに、あわわわと声を出して聞かない姿勢を取った。

「もういいわ。ぼけ」

広瀬は聞こえない僕の前で両肩をすくめるポーズを取ると、鼻水をかみ始めた。

「俺さ、やっぱり忘れてないよ、香奈のこと。一年前に、今年の俺の誕生日にまた会おう

って言ったんだ。俺は今だって会いたいと思うよ。でも、どうしようもないだろ？ 無理

なんだよ」

鼻水の音で掻き消されることを願ったが、生憎広瀬の耳にはハッキリ届いたらしい。

「お前、本当かよ。会えよ。そんなの関係ないだろ？ 人の恋愛相談乗っている場合じゃないだろうよ」

広瀬は勢いで鼻糞ほどまで小さく丸めたティッシュをくず箱に投げながら立ち上がった。

「馬鹿か。会えるわけねえよ。それより広瀬！ これ！ この質問になんてアドバイスしようかなあ。ちょっと真剣でさ」

「村上、お前まじで会えよ。香奈ちゃんがまだお前のこと好きだったらどうするんだ。ま

あ治ったら会うつていうのもいいと思うよ。でも、約束しているなら、絶対伝えた方がいい

いんだよ。わかるだろ？ 恋愛は気持ちだ。でもそれだけじゃない。色んな条件や曖昧な

理論が重なって出来上がるものなんだよ」

広瀬は僕の顔を痛いほどに見つめる。

「だから、いいんだって。あいつにはあいつの人生もあるんだよ。

お互い様だ、こっちに

も覚悟がある」

身体が急に妙になま暖かく感じる。じつとりとした冷や汗が額に滲む。

「覚悟？ お前、なんか隠している？ 覚悟ってなんだよ」

広瀬はどんどん、どんどん迫ってきて、仕舞いには僕たちはキスしそうな勢いだ。

「わかったよ。ちょっと出ようぜ」

この部屋で、同じく死を目の前にしている同志の側で、病気の話などしたくなかった。

僕は、いかに自分たちが毎日普通の人間と変わらずに生きているかを確かめるように生活している。病気の話は、医師から聞くくらいでいい。広瀬を連れて来たのは三階に設置されている娛樂ルームだ。自動販売機はもちろん、子供たちが遊べるスペースにはボールが置いてある。ここ三階には芝生付のミニ公園らしきものが娛樂ルームの外に作られている。病院の中だと分らないが、一步そこに出れば都会の喧騒にワープする。嫌いだっただけの排気ガスが懐かしくなったとき、僕はここに来て外を眺めている。「いいところだろ？」

僕はスリッパのまま芝生に踏み出すと、手摺りに身体を預けて言っていた広瀬も、ポケットの中から無造作に小銭を取り出して頷いた。窓の脇に設置された自動販売機にそれを入れると、缶が落ちる音が二回した。腰を屈めてから振り返った彼の手には、お茶とジュースが握られていた。迷うことなくお茶の缶を僕に放り投げると、広瀬は目だけで笑う。

「病人には健康なお茶を！」

冗談のつもりだろう。僕も笑って右手の中指を広瀬に突き上げ、缶を開けて口へ運ぶ。

気が利かないことに、この寒い時期に飲む冷たいお茶は予想外にも胃を刺激した。飲み込んだ液体が喉から食道を通過中に僕は自分のおろかさを呪ったが、遅かった。チクリとした痛みがジワジワ広がり、数秒で顔から血の気が引くのがわかる。腹部を押さえてしかめ

面している僕に、広瀬が気づいて慌て始めた。飲み途中の缶を床に置き、素早い身のこなしで肩を貸してくれた。有り難く甘え、脇にある木でできたベンチに腰掛けると、幾分腹

の痛みが治まるようだ。広瀬が医師を呼ぶというのを止めると、しばらく彼はただ背中をさすってくれた。

「大丈夫か？」

彼が声をかけるまで、僕は目をつぶり、じつと息をひそめていた。

「ああ。ごめん、いきなり冷たいのを飲んで、久しぶりで」

余りにも弱々しい答えに、広瀬が目を背けた。きつとどんな顔をすべきか分らないのだろう。

「俺さ。死ぬんだわ。近々」

なるべく、「ちよつとハワイに行つて来る」くらいの軽い調子を心がけたが、発した僕も、

聞いている広瀬にも空気が一瞬張りつめた。

「死ぬつて、誰が？」

聞こえてなかったように広瀬がとぼけた顔で僕を見る。僕はゆつくりと腕をあげ、自分の鼻頭に指先の焦点を合わせた。

「冗談、だろ？」

「いや、マジマジ。信じられる？ 無理無理。自分でも無理。驚いただろう。おい」

次の言葉は冗談ぼく言えた気がする。なんで病気になる人と人に心配させないように強がつてしまうのだろう。広瀬はお茶を飲んで倒れかけた僕よりも真

っ青な顔で、今や意識を失いそうなほどだった。

「これさ、支店長は知っているんだ。お前にもいつ言おうかと迷っていた。色々悩んだりもするけど、この通り、元気なもんだよ。広

瀬？ 大丈夫？」

力を失った病人のように僕にもたれかかってきた広瀬を支えると、彼は首を何度か左右に振った後、今度ははっきりとした目で訴えてきた。

「それなら尚更……なおさら、きちんと香奈ちゃんに話せよ」

「広瀬。またそれかよ。いいか？ 終わったんだよ。その話はやめてくれ」

再び耳を塞ごうとしかけたときだった。

「結局口だけなんだな」

いつものふざけた調子が全部とれた広瀬の声は、真っ黒で重苦しかった。

「は？ 何言ってるの？」

広瀬の身体を切り裂かんばかりに睨み付ける。

「だからさ、口だけは達者なんだなって言ったの。そうだよ。お前偉そうにサイトでは恋

愛の教えを説いていたじゃないかよ。相手の身になれ、なれ、なれって何回も。でも、自

分では出来ないんだろう？」

その時、一人の初老の男性がベランダに出てこようとしたが、僕たちの間に広がる空気を

を読みとった途端に身を翻した。

「考えたよ。考えたからこそ言わないって決めたんだ。何が悪い」

「何が悪い？ お前の悪いところを教えてやるよ。その自分が悪いっていうのを認めよう

としないうところだよ。何でもかんでも自分が正しいと思っているだろ」

「お前には分からないよ。むかつくな。香奈に言ったって向こうが苦しむだけだよ。きち

んと考えた上で言わないって言っているだろ」

「あー出た出た。でたよ、そのむかつくっていうの。香奈ちゃんそ

れ嫌がっていたんだぞ。

気づいてないだろう。それになんだ、相手のことを考えて？ ふざけんな。じゃあお前も、

香奈ちゃんが病気で死ぬかもしれないときに、黙っていてほしいんだな？」

「それは」

広瀬は勝ち誇ったように鼻の下をこすりながら僕を見る。

「お前はな、こうやって指摘されるまでいつも気づかないんだよ。だから言つてやるよ。」

お前が勝手に死んで、あとで知って後悔するのは香奈ちゃんだ。教えてもらえなかったとにもきつと傷つく」

「香奈は違う。あいつは頭がいいから、きつとなんで教えてもらえなかったかもわかるはずだ。あいつは、」

「やっぱり馬鹿だな。お前。それでもって自己中心的だ。人の相談乗る前に、ちゃんと決

着つけるよ。男らしくもない」

「とにかく！ そのことは忘れたいんだ。会えないとわかった今、治療だけをしたいんだ

よ。それでそのちよつとの安らぎに、人の為になにかをしたいんだよ！」

広瀬と親しくなつてから、こんなにも思つたことを言つたのは初めてかもしれない。僕

は広瀬の一流ある考えに腹立たしさを感じると同時に、どこか興奮した気持ちさえ覚えた。

兄弟もおらず、喧嘩に縁がなかった僕は、どこかこういつた言い争いに憧れていたのだ。

「笑わせんな。自分に身近な人間に対してまっとうなことを言えないのに。自分に酔っているだけだ。いい加減にしろよ。お前のおば

さん、最近お前が甘えてしょうがないって言っていたぞ。何めちやくちなことばかりやっているんだよ」

「お前、何しにきたんだよ。いちやもんつけにきたのか？ もう帰れよ」

目の前の男の顔が、プールの中で見たときのようにぐにやりと歪んで見えた。それを見たときに言っではいけない一言を発したことに気づいたが、今更訂正をするほどプライドを忘れてはいなかった。

「あつそ。じゃあね」

広瀬は一瞬で冷たい目になると、僕に再び声をかけることなくルームを後にしようとしている。追いかけては、追いかけて。こんな場面が前にも会った気がする。

そうだ、香奈と最後に喧嘩をしたときだ。あの時も僕は言い過ぎてしまった。自分が悪いと分かっているのに、すぐに謝ることができなかった。香奈。どんどん遠ざかる広瀬の背中が、今度こそ本当にぐにやりと歪んだ。いや、僕が倒れていくのだ。しかし、身体には力が入らなかった。

*

「香奈。早くしてよ」

僕は原宿の竹下通りの人混みにイライラしていた。

「待つてよお。さつきは、あたしがちゃんと買い物付き合っただから、今度は待つていてくれないじゃん」

香奈は下着専門店の店頭に並んでいるのをいちいち手に取りながら品定めをしている。こんなところで待つ男の身にもなってほしいものだ。

「ごめーん、お待たせ。怒った？」

安売りをしていたようで、香奈の持っている店名の入った袋は割と膨らんでいる。香奈

のつける下着は、彼氏の欲目はずしてもかわいらしく、その中身もとてもイケている。

しかし、袋を遠慮して隠すように持つその仕草も、氣遣うように上

目使いで僕を見上げる

その顔も、なんだか無性に腹立たしい。

「行こうぜ」

強引に香奈の右手を握りしめると、駅に向かって大股に歩く。一歩毎に左右に身体を動

かさないと歩けないほどの人、人、人。その一つ一つの頭が揺れるだけで、自分の目がク

ラクラしてくる。かといって、買い物をするにはここが一番品物も豊富だ。

「ね、大丈夫？　ちよつとどつかで休もうか？」

僕が普通の歩幅で歩いているから、人より歩幅の狭い香奈はしきりに足を素早く動かし
ている。それが分かっていながらも、どうしても相手に合わせてあげる気にはなれない。

むしろ休もうと声を掛ける香奈にまた苛立つ。

「じゃあ、ここにしようぜ」

立ち止まり、見上げた先はカラオケボックスだった。ここなら自由になんでも出来る。

「カラオケかあ。ゆつくりできるもんね。いいよ。入ろう」

香奈は同意をしたかと思うとすぐに店内へと入っていく。香奈が僕の提案に反対したこ

とは記憶に上る限りない。それに実に気の利く女の子だ。理想であり、これでこそ女の子、

という絵に描いたような人物だった。つきあい始めは、どうしてこの子が僕と付き合っ

てくれるのかと不思議で、どうやったら彼女が笑ってくれるかばかりを考えていた。ある日、

彼女のお笑好きが発覚したときには、周りの視線も省みずに僕はファミレスのど真ん中の

席で若手芸人の物真似をした。それに対して香奈は嬉しそうに何回

も何回も、同じ芸を笑

つてくれた。そんなことさえ、僕は忘れかけていた。

カラオケボックスの部屋に案内されると、すぐに僕はまずリモコンで一曲入れた。香奈

は雰囲気が出るようにと電気を消し、マイクを取って手渡してくれる。歌っている最中に、店員がジューズを持って部屋に入ってきた。その二つのグラスを受け取り、ストローまで差してくれる香奈は上出来だ。ただ、ストローをさす前に出来ればおしぼりで手を拭いてほしい。歌い終わると無造作に本を投げ、それなりに幅のあるソファに寝転がる。電気を消すと、気持ちのいい暗闇が眠気を誘う。カップルでくると、大抵奥の方の部屋に案内されることが多く、この時も一番突き当たりだった。

「香奈」

曲選びをしている香奈の細い腕を、寝ながらも強引に僕の方へ引き寄せる。困ったように微笑みながら、香奈は僕の上に乗っかる形で覆い被さる。そんな重さが心地よい。毎日降りかかる会社の重圧もこんな感じで気持ちがいければいいのに、と思ってしまう。

「ねえ、待つて」

控えめに香奈は拒むけど、実際嫌がっていないのが僕には分かる。香奈の首に腕を回して顔を引き寄せる。軽くついばむように口づけすると、結構積極的に舌で返してくる。腰を浮かしていた香奈が、僕の身体に座りこんできた。僕は自分のモノを外に解放すると、香奈の後頭部を手のひらで包み込み、下半身へ誘導する。何も言わずに彼女がそれを口に含むと、僕は漏れそうになる声を押さえた。寝そべったまま、視線だけ動かして部屋に監視カメラがないことを確認すると、鞆をたぐり寄せて目的の物を探り当てた。

「やばい、最高」

これを教え込んだのも僕だ。そして、一生僕のものだと思っていた。急激な高みに耐えられず、引きはがすように顔を放させると、鞆から出したモノを一枚取り出すと、すぐに中心部へ当てた。間一

髪それはティッシュの中へと放出された。

「ねえ、ちゃんと出来るところに行こうよ。夕ご飯まで時間有るでしょ？」

僕が自分の後始末をしていると、香奈は甘えたようにすりよってきた。上手く自分の胸を僕の腕に押しつけてくる。でも、出し切った後の僕にとっては、その提案はすでに魅力的ではなくなっていて、一遍に襲ってくる眠気と食欲に襲われていた。

「いや、明日も仕事だし早く帰りたいから、そろそろご飯食べに行こう。な？ また会えるし」

ジーパンのチャックを閉めると、僕は再びマイクを手にした。せつかく料金を払っているのだから、歌ってなんぼである。その時の僕は、香奈がどんな表情をしているかを気にすることはなく、きつと笑っているんだろうと決めつけていた。夕ご飯もダラダラと結局ファーストフード店で終えた。いつも少食な香奈が、その時もナゲツトしか頼まなかったことに何の違和感も覚えず、僕は好物のものを何種類か頼み、最後にアイスまで平らげた。

その上で、僕は店を出ると、その日までの不満をぶちまけたんだ。駅までのほんのちよつとの距離で。手を放すとはぐれてしまいそうなほど、大通りは週末の夜、祭りのように混雑している。その人混みにもイライラしながら、香奈に言った。

「お前さ、なんでクリスマスに買ってあげた白いコート着てこないの？」

クリスマスや誕生日にはお互いにほしい物を買って合っていた僕らは、前回は僕が真っ白のコート（四万もした！）を買って、靴を買って貰った。僕は買って貰った嬉しさですぐにそれを履いて帰ったのに、香奈はそのコートを二ヶ月経った今も遊ぶ時に着てこない。

「え？」

驚いたように目を丸くして問いかける香奈に、そのどうでもいい質問が余計僕を熱くさせる。周りに人がいようがどうでもよかった。久しぶりにまじまじと香奈の顔を見ると、こんなにも顔が細かった

かと思う。なんか痩せた。

「あれは大事に着たくて。ちゃんと取ってあるよ?」

僕を現実に引き戻したのは、あり得ないほどの香奈の言い分だった。
「取ってある? 俺は、お前の宝物を増やすために物を買ってあげているわけじゃないんだけど」

「そんな……そんなつもりじゃないよ」

「だってそうだろ? お前全然興味ないだろ。だから着ないんだろ。昔の彼女だって、母

親だって、買ってあげればすぐに身につけるよ。嬉しかったら付けるだろ。それをなんだ、二ヶ月も見せないで。売ったとか言わないよな?」

「なんで、そんな……というの?」

立ち止まった彼女を見向きもせず、ずんずんと歩いた。いつもならそんなくらいじゃ、

彼女は笑っていてくれる。でも、今度は違ったんだ。振り返ると、香奈は真っ青な顔をし

て立ち止まって僕を睨んでいる。大きなスクランブル交差点で向かい合う僕らははつきり

言って邪魔だった。通り過ぎる人間が睨んだり、舌打ちをしたりする。目の前のビルの大

電子掲示板のスクリーンからは、翌日発売の流行ユニットの新曲が大音量で流れている。

「ここ邪魔だから、向こう行こうよ」

手をつなぐ雰囲気ではないので、肘の辺りをつかんだ。即座に倍の力と早さでその手を

払いのけられて、思わずギョツとした。香奈が僕の手を払ったことなど初めてだ。ただな

らぬ空気に喉が詰まる。信号は渡りきらなければ。しかし触って払われるのは怖い。その

葛藤で自分でも挙動不振になっているのがわかる。急に吹いた北風が髪の毛をクシャクシ

ヤにしたが、直す余裕もない。

「もう嫌」

「えっ？」

本当は聞こえた。心臓が大きく跳ね上がるほどハッキリと。流れる曲で聞こえなかった

振りをすれば、考え直した香奈は違うことを言うかと思った。

「もう嫌なの。付き合っの疲れた！　いつも、いつもいつも文句ばかり！」

「なに。何でいきなりそんなこと」

と、車のクラクションが聞こえる。信号を見るとすでに歩行者のもののは赤だ。僕はともか

く香奈はまだ横断歩道の真ん中にいる。

「来いよっ！」

仕方なく睨みながら強い調子で叫ぶと、両目にいっぱい涙をためて、香奈は顔を横に

振った。綺麗に結ばれたポニーテールが後ろで揺れている。再びクラクション。さらに大

きく。諦めたように香奈は歩き始めると、僕を素通りして行ってしまう。

「はあ？　お前ちょっと何なんだ？　マジむかつくんだけど」

小走りで香奈を追いかけ、僕はその前に立ち塞がった。下を向いていた香奈は、ふっと

顔を上げた。真っ白でふっくらした肌に黒い粒がある。マスカラ。いつも映画みた後もこ

うなる彼女は、目元を隠してすぐトイレに向かう。でも今は教えてはいけない気がした。

トイレに行かせたら、戻ってきてくれないだろう。

「どうしていつもそうやって偉そうなの？　どうして私がしたいこ

とはいっても否定される

の？ どうしてムカツクって口癖みたいに言うの？」

「は？ なにそれ。否定なんてしてないじゃん。文句言われるようなこと、そっちがする

からいけないんじゃない？」

「ほら！ またそれ。みんなあたしのせい？ いーつつも我慢していた。でも限界」

「限界ってなに？ 変なこと言った？ コートだってお前が着てこないのが」

「だから、そうだね、それはごめん。でも、真っ白で可愛くて、勿体なくて、ずつとずつ

と着たいから、本当に回数着てないの。でも。売ったとかひどい」
駅前の交番の前に警官が一人立っている。耳をダンボにしているのが手に取るようにう

かがえた。

「それはごめん。でもこっちの気持ちも分かってくれないから。明日も仕事だし、今愚痴を聞ける気分じゃ」

僕の咄嗟のフォローも香奈にまた遮られた。

「愚痴？ 二人のことなの？ それも嫌だったの。俺のこと分かって。信じて。好きでいて。二言目には仕事。忘れているかもしれないけど、あたしだって働いているんだからね！ そっちが言うように、あたしのことだけ分かってくれているのよ！」

まるで喘息の発作でも起こしたように、香奈は数回苦しそうに息を吸っていた。言われてみれば、普段溜めたストレスを香奈にぶつけた気がする。でも、謝るのも癪だった。

「意味わからん。せっかく会っているのに、なんで泣くわけ？ それに普段から言えがいいじゃん」

今までは怒りで歪んでいた香奈の顔は、その瞬間に悲しみへと変化した。傷ついた小動物のように。小刻みに震える肩、そして寄せては返す波のように浮かぶ涙。

「だって。文句を言うと、とし坊怒るじゃん。すぐに機嫌悪くなるじゃん。それに怒ると見境なく言葉をぶつけるから怖かったんだもん」

怖かった？ 僕のことか？ いつから。

「ずつとよ。好きだったけど、怖かったの。もういい。別れたい。何も言わなくてもいいよ。もう無理」

*

「とし！ とし！」

「村上くん。聞こえるかな？」

うつすらと目を開けると、そこには母と善如寺医師の顔があった。ベッドの脇では小野看護師も器具をカチャカチャいじっている。

「母さん？」

母は泣いてしまうかと思ったが、ずつと息をすることを忘れていたのに気づいたかのように大きなため息をついた。

「どうして」

掠れた声に医師は反応した。

「今日娛樂ルームへ行ったよね。君はそこで具合が悪くなって倒れたんだ。幸いたくさん」

人がいたから、すぐに処置できたんだ。痛みや吐き気はあるかな？」

「あの、今。あれ？ 夢かな。原宿で遊んでいて」

香奈が怒っていて。僕はどうしたらいいのかわからなくて。まだきちんと答えを出せてないのに。

「ああ、村上くん。君はここでずつと寝ていたよ。薬を足したんだ。きつと夢を見たんだね。大丈夫、もうちよつと寝た方がいい」

夢、なんて違う。香奈はいたんだ。僕に別れを告げていた。

「あ、広瀬くん。もう大丈夫みたい。ごめんなさいね、せつかく来てくれたのに」

僕はいつもの自分の病室ではない一人部屋に寝かされていた。母が廊下に出たようで、

話しかけている相手は広瀬だ。広瀬の後ろ姿を見た途端に、僕は先ほどの出来事を一

気に思い出した。広瀬の去っていく背中を見て、僕は香奈の最後の去っていく姿を思い出

したに過ぎなかったのだ。

「苦しかったでしょう」

小野看護師が僕の頬を布で拭いていることで、初めて涙が出ていることに気づかされる。

「だい、じょぶです」

広瀬に謝らなければと思っても、母に見送られた広瀬は帰ろうとしていた。僕はいつも

そうなんだ。ここぞという時に、肝心な行動をとれないのだ。それでいつも人を傷つけて

しまう。香奈との別れがこんなにも鮮明に思い出せるほど、僕の中では終わっていないん

だ。でも、広瀬にも、香奈にも声が届かない。そう、届かないんだ。耳元で小野さんが何

かを囁いているが、僕の脳までは届いてこないように。再び泥のようない眠りが襲ってきた。

同じ夢をみることをただ恐れ、それでも僕はまた眠った。遠くで、

香奈の呼び声がこだま

する。しかしそれはある意味幸せだった。

5 給水ポイント

それからもとの病室に戻って来られたのは三日経ってからだった。新しく大将がいたベッドに新入りの年配の男性が入っていた。ところが彼は引つ込み思案なのか、ほとんど口を利くこともなく、話しかけても来ない。まだ現実を受け入れられてないのかもしれないが、僕にとってはどうでもよかった。もう関わるのは止めようと決めたのだから。いつものように朝ご飯を食べて、迷ったけれどもパソコンを開けた。最後の質問にまだ答えていないのが、心の中で引つかかっていたのだ。

【名前】 神

【内容】 まりえさんへの返信

辛いでしょう。あなたはきつと恋愛をしているときも頑張りすぎてしまう優しい方なんでしょうね。でも、前を見てください。周りをよく見てください。他にも男がたくさんいるよ、なんて慰めの言葉は言いません。きつと今のあなたにとっては、何を言われても彼しかないと思うてしまうでしょうから。それならとことん好きでいて下さい。でも、一つだけ言います。彼の言葉、行動をよく考えてください。あなたにとってひどいことを言っていますよね？ 冷静にそれを受け止めて、それでも好きならばもう一度アタックしてみたらどうでしょう。大丈夫、よく考えればそのうち答えの出ることでずから、きつと。

ただ、僕も同じような失敗をしたことがあります。神、だなんて名乗っているけど所詮僕もケツの青い若者なのです。僕も自分では優しく接しているつもりでした。でも彼女にとっては違ったようです。男と女の優しさって僕は違うと思います。もし、あなたが彼の優しかった部分をより思い出せるのであれば、彼はあなたに優しかったんでしょう。でも、それはあなたが決めることです。それまでは、そうですね、自分磨きをしてください。そんなことは言いません（

回りくどいですね。心を休めてください。今のあなたの心はスポンジみたいに色んな物を吸い込んで限界になっているんでしょ。だから食べられないし、眠れない。彼に文句を言うかどうかより、今は自分のしたいことをしてください。答えはいつでも出せるんです。再出発もいつでも出来ます。どうか、幸あれ。

僕の頭と感情を使って書ける最大の物を伝えたかった。まりえさんがどうという行動に出るかは分からない。でも、伝えたかったんだ。好きという魔物にとらわれて自分を見失ってしまうことを、止めてほしかったんだ。まりえさんが感情をぶつけることは、発散という意味では大切なことかもしれない。しかし、彼女はすでに傷ついている。彼に思いをぶちつけたところで、もっとひどい言葉が返ってくるかもしれないのだ。どうにかして僕は彼女を守りたかった。僕はこの【恋愛診療所】を閉鎖しようと考えていた。広瀬の言葉が正しかったのもある。自分の恋愛も上手くこなせなかったのに、人にアドバイスするなんておかしいのだ。そして、もう一つはもう向き合うことができない香奈のことを、ここに来ると思い出してしまうようになった。そう、僕は女々しくて弱虫だ。削除のボタンを押そうとすると、偶然にも一件の書き込みがされたのだ。思わず目をやると、そこには再び別の子からの悩みが書き込まれている。答えるつもりはない、しかし目を通そうと思った。

【名前】ペンギンの宝石

【内容】信じているんです

初めまして、ペンギンです。ご相談させてください。私には好きな人がいます。一年ほど前に別れてしまったのですが、今でも想い続けています。彼とは嫌いになったわけではなく、社会人になって日々の忙しさに忙殺され、お互いを思いやるのが難しくなったのです。傷つけ合うなら、むしろ離れよう。最後に彼が言った言葉は、私の言葉も代弁していました。そして一年後、落ち着いたら同じ季節にまた会おう、といって別れました。

そんなの男の常套句だ、とか、向こうは女作って遊んでいるよ、と

周りに言われますし、私も実際不安な気持ちの方が大きいです。これは、待つべきでしょうか。

読み終わった僕の頭は真っ白だった。飛行機が上空へと舞い上がる時の真空状態のように耳が詰まる。あり得ない状況に、僕は怖くなって無意識に電源のボタンを押してしまった。うゆゆん、と機械特有の音をたててパソコンは次の瞬間画面が真っ黒になった。

故障の原因にもなりやすいことをしてしまい、余計に慌てる。たパソコンをひとまず脇へどけ、僕は働かない脳みそをフル稼働させた。傷つけ合うなら、離れよう。それは僕が電話で香奈に言った最後の言葉だった。この間倒れたときに夢で見た香奈との喧嘩。あの後僕はもう会わなかった。香奈が拒否をしたのだが、実際僕にも余裕はなかった。会えば喧嘩になるのがわかっていたし、そこを話し合わない限り進めない。しかし、仕事・人間関係・予算・予算・予算。香奈にいたわりの言葉をかけることなんて、ガキの僕には出来なかったんだ。いつも一歩引いて、何を言っても許してくれる香奈もあの時は引き下らず、僕はもう終わりだと思った。香奈が引かなかったのは、あの一回だけだったのに。

自分から立ち去ったくせに、何度も電話をかけてくるのがまた面倒くさくて、僕は香奈にひどいことを言った。そして僕が出した答えがそれだった。一年後に会おう。

香奈だ、これは香奈に違いない。僕はそれさえも許さないつもりなのか。

やはりこの腫瘍の原因はストレスなのだろうか。どうしよう、と思うたびにきりきりと

痛んでしまう。ぐっと歯を食いしばって堪える。閉鎖しようと思った気持ちやしぼんでいく。どうやって香奈がこれを見つけたかなどどうでもいい。香奈と話せる。香奈と話したい。その想いだけが頭を締め付けていく。しかしなんと言えればいい。僕は会うことが出来ないし、まして期待しなさい、信じなさいなどとは言えない。いやいや、もしかしたらこの世の中に僕たちと同じ言葉で別れたカップ

ルは他にもいるかもしれない。確認することから始めた方がいいの
だろうか。まずは、香奈だというのをきちんと定めて、そこからま
た考えよう。

「とし坊」

久しぶりに聞いたそれにぼくの身体がベッドから跳ね上がる。

「な、なんすか？ 弓削さん」

隣の弓削と話するのは大将が退院してから初めてだった。もはや呼
び方に不満も言えない。

「あのさ、こないだ悪かったな。大将いなくなるって思ったらイラ
イラしちゃってさ」

弓削は話しながらカーテンを開けた。いつもより乱れたベッドの
様子が気になった。確か弓削の手術は近いはずだ。

「え？ 気にしてないスから。本当に。それより顔色悪くないです
か？」

人のことも言えないのだが。

「いや、大丈夫。これ、やるよ」

弓削が布団の下から取り出したのは、見事に折られた千羽鶴だっ
た。てっぺんには金色の一際大きいのが。そして海のようにグラデ
ーションが見事に決まっている。

「うわ！ くれるんですか？ すげえ」

本心だった。まるで職人が作ったかのように折り目に乱れ一つない
鶴は、すぐにでも飛

び立って行きそうだ。両手で抱えながら受け取ると、手から溢れる
ほどの量。

「治そうな」

久しぶりに見た弓削の笑顔だった。

「はい、弓削さん。俺、生きたい。生きたいんです本当に」

吸い取られるように、言うはずもなかった本心が零れてしまう。弓
削はマジマジと僕の

顔を眺めた後、ベッドに座った。

「俺もだよ」

間抜けにも泣きそうになりながら、僕は顔をあげた。

「何だよ、変な顔して。そんなの当たり前だろ。お前だけじゃない。俺だって、あの森ち

やんだって。新入りさんだってきつとそうだ」

森ちゃんは僕の方をみて軽く手を上げた。笑っている。

新入りさん、というところで弓削は声を抑えた。というのも、どうやら挨拶しようと森

と弓削が初日にいきなりカーテンを開けたら怒鳴られたそうだ。ほつといってくれ、と。

「お前がこないだ倒れただろう？　俺あの時後悔したんだ。お前に余計なこと偉そうに言わなければよかったって」

「余計なこと？」

「惚けるなよ。偉そうに人の話に首突っ込んでいい気になるなとか言っただろう？」

「ああ。いいんですよ。別に、当たっていますから」

僕は鶴が何羽あるかを数えにかかり、気を逸らそうと思った。なんだか気恥ずかしい。

「いや、でもな。偉そうなのは俺だったよ。お前はやっぱりいいと思うよ」

「えっ！」

答えは僕と森ちゃんの二重奏になった。森ちゃんが転がるように僕たちの方へやってく

る。今日も一段と走り方が女っぽい。

「弓削ちゃん！　そんなこといわないで！　この森という存在がありながら、こんな若造

に手を出すなんて！」

森ちゃんは泣き真似をしながら僕のベッドにダイブした。

「いつってええ」

足首の骨が折れるかと思うほどそれは強烈で、咄嗟に森ちゃんを突き飛ばした。弓削はそれを見て笑いながら、僕のベッドから立ち上がり、片手を振って病室を出ていってしまっ

った。

「あの、降りて貰っていいですか？」

それでも森ちゃんは一向に降りようとしない。

「あのー……」

「とし坊さ、弓削ちゃんがねえ、ああやって助言したのにも理由があるのよ。知っている？」

森ちゃんは僕のベッドの足下からはい上がるように近づいてくる。ある意味不気味だ。

微妙に目が潤んでいるのが、余計に逃げてしまいたくなる。しかし。

「なんですか？ それ」

「あなたが来る前のこのベッドの患者さん」

何のことが分からずにただ首を傾げる。

「ちょうど弓削ちゃんと同じくらいの年齢だったのよ。仲良くてね。

あ、病気は同じ。腫

瘍が出来てね。でもねえ、彼、ちよつと自分を上手く表現できないところがあつて、昔学

校で虐めにあつたらしくて。それで登校拒否のまま、大人になって、社会にも出られなかつたのよ」

「はあ。その人が何か？」

「弓削ちゃんは彼を応援したわ。そりゃもう、びっくりするくらいね。手術も成功して、

再発の可能性はあるけれど、無事退院したのよ」

「すごいじゃないですか」

「そこまではね。その後彼は頑張つて社会に出たのよ。でも、やっぱり上手いかわなくて

ね。亡くなったの」

「え？ 病気は治ったんじゃ」

「そうなんだけど、今度は心が壊れてしまつてね。自殺されたそうよ。弓削ちゃんが電話

したら、お母さんがそうおっしゃっていたらしいの」

正直驚いた。しかし、そうなれば彼の言動も不思議ではないのかも
しれない。

「それにね、弓削ちゃんて、ああ見えて教師だったのよ。だから、
余計、人を救うつてこ

とに責任を感じちゃったのよね。自分が説教をしたせいだと思つて
いるのよ」

「そんな、そんなのおかしいですよ。だって、」

言いかけて思い当たることに口をすばめた。僕だって、同じことを
しているじゃないか。

悩んでいる人間に近づいて、それなりに必死にアドバイスをしてい
る。それは、元気にな

つてほしいから、力になりたいから、それだけのこと。それに何よ
りお礼を返事をもらえ

たときは飛び上がりそうなほどに嬉しい。しかし、相談相手が頑張
ったせいで死んだらど

うだろう。おそらくもう誰に対しても意見を述べたりしなくなるの
ではないか。僕は少

でも本気で悩んでいる相談がきただけで、閉鎖しようと思つたんだ。
それは相手のため？

いや、自分が傷つくことから逃げているんだ。僕も、逃げているの
か？

「そうだ。そうだよ。ありがとうございます、教えてくれて。そう
だよな、そうなんだ」

地平線の彼方から、真っ直ぐな光りが差したように、僕の前の道は
開けた。森ちゃんは

もう何も言わず、ただ頷いてベッドへと帰っていった。おせんべいのように軽々とパソコ

ンを持つと、僕はさっきまでの曇った気持ちがうそのように電源を入れた。間違った終了

の仕方、画面には文句を訴える文面が表れたが、それさえもまどろっこしい。僕は、逃

げるのを止めた。掲示板に入ると、新しいコメントはされていない。しこれが香奈で間違

いないとしても、僕はきちんと受け止めよう。去年離れ、無責任に再会を約束した時点で、

僕は目をそらしていたんだ。今、向き合うためには過去から決着をつけねば。清算出来た

ら、お礼を言わなければならなかった。広瀬にも、弓削にも、森ちゃんにも。

【名前】 神

【内容】 信じるか、信じないか

ペンギンさん、おまたせしました。すみません。僕の答えで良ければお答えします。――

言で言つと、わかりません。僕だったら、その当時にきちんと好きな相手だからこそ、言

った言葉だと思います。もし、もし僕なら。きっとその言葉を忘れないでしょう。し

かし、その想いが続くとは限りません。環境や時間は人の心も変えてしまいます。あなた

はどう思っていますか？彼のことを信じているんですね？それならば答えは一つだと思

います。彼に確かめるしかないのです。ここでもし僕が、信じなさ

いっていても結局は疑うでしょうし、諦めなさいといったら従いますか？もし、そうならば、こんな他人に

惑わされるあなたの愛というのを疑います。報われるかどうかはともかく、行動をするの

はあなたなんです。

香奈がもし僕のことを信じてくれるなら、これで反応があるはずだ。会いたい、と言わ

れたら困ってしまう。いや、そのときはまた考えよう。

それに対しての返事が来たのは二日経ってからだった。病院にいる僕は、体調が悪くない限りすぐにでも返事が出来るが、彼女は働いているのだし待つのは仕方がない。しかし、どうにもその時間はじれったかった。

【名前】 ペンギンの宝石

【内容】 返信有り難うございます

まさかこんなに早くコメントいただけたと思うなかったのと、とても嬉しいです。正直心の隅で、私は彼に未練があるのかもしれない。でも、信じている、といえば嘘になります。すごい、やはり神なんです！ 冗談です。考えていたことと同じ事を言われてドキッとしました。彼も男だ、時間は流れる、世界は動くってずっと自分に言い聞かせていたので。実際私の環境も変わりました。そのことが余計に連絡するのが怖くなっている原因でもあります。アドバイス有り難うございました。また話を聞いてもらってもいいですか？

読み終わると、幾分サッパリとし印象を受けた。しかし、彼女が何を言っているのかはよくわからない。香奈であるかもハッキリしない。僕の携帯は自宅で充電し、連絡があつたときは母が教えてくれたり、持ってきてくれる。それを持って、屋上や娛樂ルームのベランダでメールの返信などしているのだ。もし連絡があれば、母が教えてくれるとして、とりあえずはパソコンに着てはいない。もう一度読み返して考える。彼女は 何を悩んでいるのだろうか。僕自身も、香奈が新しい相手を見付けたのではどこかで怯え、連絡を取るのには怖かった。それは信じる、信じないとは離れた位置にある。

自分を支えてくれる人間に側にいてほしいと思うのは当たり前で、それを分かっているからこそ、怖いのだ。どちらかが執念的に信じ続け、相手に突進していく強さがあれば。いや、それは強さなのだろうか。僕には自分を押し付けているとしか思えないのだ。これも弱虫の賜物だ。そして、彼女もまた何かに怯えている。相手が僕であるなら、大切とは思えないかもしれないことを心配して。大切には思えないもの。物、モノ。なんだ？

【名前】 神

【内容】 喜んで

ペンギンさん。お返事ありがとうございます。僕でよければ何でもお聞きします。むしろ、今度は僕の相談も乗ってもらいたいくらいです、なんて。しかし、その昔の恋人とは仲が良かったのでしょうか。羨ましいです。僕は昔の彼女に悲しい顔ばかりさせていた気がします。でも、なぜかいつも思い出すのは笑顔とは不思議な物ですね。それはきっと彼女が僕にくれた最高の物だったからだと思います。何か悩みがあるのでしたらいつでも相談に乗ります。それから掲示板の書き込みは続いた。

彼女とのやりとりから、僕は相手が香奈であることを確認できた。それは二人の出会いの話から、僕が紹介した広瀬であろう人物の話など大まかに聞き、間違いがなかった。その間にも何件かコメントが寄せられることもあったが、僕にとっては、今やこの掲示板を立ち上げたことこそが、香奈との再会をするための運命だったのではないかと思うほどだった。さりげなく昔の話をするように進めてみると、意外にも僕の記憶と香奈の記憶には違いがあることもあり、今更ながら一人でパソコンを睨みながら笑ってしまうこともある。

【名前】 ペンギンの宝石

【内容】 こんにちは

相談は……結構あるのですが、徐々にお話しします。私自身の身体のこともあるので、たとえネットだと言っても今はお話することを考えてしまいます。彼はとても楽しい人でした。とはいって

も、大学生の時はですかね。温泉巡りなど色んな旅行にも行きました。いつも喧嘩が絶えませんでした、それでも幸せでした。それに、寂しがりで。携帯に絵文字が入らないと怒るんです。女の子みたいでしょう？ 初めはすごく面倒くさい男だなんて思いましたけど、だんだん可愛く思えたんです。女の子ってそういうところがあるんですよ。神さんは知っていて当たりまえかな。なあんて。

……そんなこともあった。あれは僕たちが付き合い始めて最初の喧嘩だった。どうにか花火を見ながら口説き落とすことに成功した僕は、先へ進みたくて仕方がなかった。香奈は、初めて会ったときから夢中になって話す僕を幾分怪訝そうに窺っている感じだった。それでもお笑い芸人の真似をすれば腹を抱えて笑ってくれるし、ご飯を食べていてスープを吹き零しても、苦笑いをしながら口元を拭ってくれた。でも、キスをさせてくれなかった。そう、三ヶ月も。僕はあの手この手を尽くして、香奈に触れようとした。海へ誘い出し、では綺麗な夕日が見られる時間まで粘って、さりげなく後ろから抱きしめたり。テーマパークに連れて行つては、待ち時間に手を繋ぎ、人影のないところで抱きしめた。香奈がどんうち解けてきてくれるのもわかったし、どうやったらもつと好きでいてくれるかを必死で考え、色んなところへ遊びに行った。

だがある日、僕はきれた。彼女の笑顔を見るたびにキスしたい衝動に駆られ試みるも、雰囲気を読んだ彼女は顔をさりげなく背けるのだ。僕の家と香奈の家は電車で二時間。しかも快速で、だ。香奈が来てくれることから、愛情が有るのは分かっていたが、動物的行動で示してほしかった。帰ろうとする香奈の腕を掴んで、僕は怒りをぶつけたんだ。

「お前、本当に俺のこと好きなの？ 別に義理で付き合ってくれなくて良いんだけど」

怒りの言葉が返ってくると思った。しかし、彼女はしおらしく泣いてしまったのだ。それを見ると怒りは暴発した。

「メールだって返事はなかなかしないし、文だって可愛くない。会

つてもこれじゃあ、普通の友達とかわらん。なんの為に来ているんだよ」

言ってから気づいた。もう終わった、振られる。しかし、三日後会った彼女は笑って許してくれたのだ。そして僕の唇に、やっとやさしくキスをしてくれた。後々までからかわれることになったのだが、でも、最後にはそれもお互いに笑えることだった。そんなときもあったね、と懐かしみながら。それをずっと一緒に思い出として生きていくと思っていた。でも、その思い出も破裂した風船のようにバラバラだ。中に入っていた空気に代わる思い出は空に解き放たれた。香奈は意外にも楽しいことも思い出さたくないことまでも話してくれた。香奈は華奢な割に色っぽさを持った体つきで、趣向の変わった人間に好かれる傾向があった。

たとえば焼き肉屋に行ったとき。レジで会計をすると、次回来店時の割引券をくれるそこは、僕のお気に入りだった。いつもなら会計を済ませると、支払った人間にくれるのに、あの男は違った。僕たちと同年代らしくその男は、フワフワのパーカーを着た香奈にまぶす目を奪われた。そして、割引券を渡すと、僕など視界に入っていないかのように券の説明をしたのだ。その三十分後、僕の機嫌が悪くなったこと。

そして香奈が電車の中で変出者に追いかけられたときのこと。僕と遊んだ帰り、地元へ帰る電車は平日の帰宅ラッシュだった。しかも別れてほんの三駅のところだった。立っていると後ろに三十歳前後の男がぴつたりと張り付いている。気味が悪くなり、香奈はそれなりに混雑している人と人の間をかき分けて反対側のドアへ移動した。すると、また数秒もすると後ろにいることに、窓に映る顔で気づいたのだ。悲鳴をあげてしまいくらい驚いたものの、香奈はその電車が次の駅に停車したと同時に飛び出し、車両を変えることにした。すると、どうだろう。その男も付いてきたのだ。行き交う人は皆疲れた顔をして夢中で歩いている。肩がぶつかるくらいで睨まれる。車両の中間布巾だと、見える位置に駅員も見あたらない。無

我夢中でどんどん車両をさかのぼり、乗った、と見せかけ電車が発車する瞬間に降りると、その男は諦めたかのように降りなかったらしい。足下からわき上がる恐怖に膝が震えて立てなくなった香奈は、電話で僕に助けを求めた。僕も同じように地元に戻ってしまっていたので、香奈の電話には出てあげられたが、駆けつけてあげることが出来なかった。いや、実際には出来ただけけれども、女性が追いかけることにどれだけの恐怖を感じるか分からなかったし、正直香奈との行為の後で、すぐにでも眠りにつきたいほど僕は安らかな気持ちだったのだ。そこでこう言ってしまった。

「駅員さんのところへ行った方がいいぞ」

なんとも思いやりのない言葉だろう。香奈は怒ることなく半べそを掻きながら電話を切った。そして今、彼氏のどこが最低だったかと聞いた僕の質問に香奈がこの事件を話したのには肝が冷えた。僕なんてすっかり忘れていた。そして仕舞いには、僕が言ったこともご丁寧に教えてくれたのだ。

それは電車の事件から一週間後のこと。僕達はショッピングモールで買い物をしていた。

アイスクリームを食べたいと言い出した香奈の為に、僕は鞆と香奈を少し離れた広場のベンチに置き去りに、店頭に並んだ。ただ馬鹿なことに財布を忘れて鞆の中身を見に戻ると、香奈は涙目で抱きついてきたのだ。原因は隣に知らない男が座ったことで恐怖心が蘇った、と彼女は言うが、僕にはくだらない小さな問題に思えたのだ。「あのさあ、いつまでそんなこと覚えているんだよ。気にしすぎだよ。早く忘れろよ」

僕は香奈が他の男に付けられたことを（しかも密着して）思い出してほしくなかったの

だ。早く忘れてほしかった。思い出している香奈に腹が立った。香奈はその時も何も言わ

なかった。僕はまったく記憶にもなく、思い出すことも出来ず、言われた瞬間少しへこん

だ。香奈はなんでこんなことを、知らないはずの男に言っているのかと、不思議に思うよ

うになった。香奈は、どこにいる。

*

また眠ってしまったようだ。目を開けると、母がニヤニヤ笑いながら僕の顔を見下ろしていた。

「なんだよ。じろじろ見るなよ」

たとえ母親だろうと寝顔を見られるのは恥ずかしい。

「あんた、まだ香奈ちゃんのこと引きずっているの？」

どう考えても楽しんでいる顔だ。

「え？ そんなわけないでしょ」

母は香奈の存在を知っていて、歓迎してくれていたのだ。別れたと知ったときは随分僕が悪者にされた。

「香奈、香奈」

母がいきなり叫ぶと、隣のベッドからブツと吹き出す声が聞こえた。

「なんだよ。みつともないからやめてくれよ！」

慌てて起きあがろうとしたが、最近では身体を起こすのにも手を借りたいくらいだ。一人

で起きあがろうとすると時間がかかる、上に腹に力が入らなくて痛みを伴う。しかしなる

べく平気な様子を装って起きあがると、母は見ても見ぬ振りをしてくれた。頼まない限り自

分で何でもさせてくれるのは有り難い。

「みつともないのはあんたよ」

今度は本当に高笑いをしながら母が僕の足を布団の上からバシバシと叩いた。そう言う

と、一つため息を漏らした。

「そんなこと言わなくていいだろう？ 笑われるだろう、ガキじゃないんだから」

「あーら、ガキじゃないんだから笑わないわよ。それにもう遅いよ。あんなに大きい声で

叫べば自分ではらしているようなもんよ。母さんのせいにしないでよ。ねえ？ 弓削さん」

弓削は僕のベッドのカーテンを開けると、母と同じ顔をしていた。こっちが親子なので

はないかと疑ってしまつくらいに、その顔はよく似ている。

「ああ。俺はなあーんにも聞こえてない」

それだけの笑顔で何を言う、と突っ込みたかったけれど、弓削は先日手術も無事に終え

て、経過を見ている時だ。それも今のところ良好らしく、最初に会ったときとは別人のよ

うに明るい姿だった。彼に生気を吸い取られているかのように、僕はほとんど元気がなくなつていくようだった。しかし、そうでもないようだ。

「とし坊が元気なもの、香奈ちゃんのおかげかしらね。あんた、薬が前よりよく効いているらしいの」

「え？」

「だから、抗ガン剤。前は血液中の数値もよくなかったらしいんだけど、今はグングン効いている」

僕は信じられない半面、最近の状況に疑問があつたのが解けた。一時は水も飲みたくな

くなつたのが、最近は再び固形物も食べたいと思うのだ。実際は無理なのだが。それでも、

こんな時も香奈は僕を助けてくれるとは。どこまで恋しくさせるんだ。そんな辛くとも、

励まし合い、へこみながら毎日過ごしたある日、弓削が退院することになった。再発の可

能性もあるのでしばらくは毎月、その後隔月で検査に訪れるようだが、ひとまず治癒した。

それを聞いた夜、嬉しさの残る一方で手が震えるほどの淋しさが襲った。誰もが静かに

眠る中、一人枕を濡らした僕は、数ヶ月前に大将が泣いていたのを思い出した。あの時は偉そうに言って一丁前の気分になっていた。幸せか、なんてよく聞いたものだ。次から次へと溢れる涙で、身体が干からびてしまいそうに感じた。音を出さないように気遣いながら、僕はベッドの脇に今は用意されている車椅子に移った。ほとんどいつも誰かに押し
てもらえるので、意外にも力が必要なことを初めて知った。

リノリウムの床とタイヤが擦れ、小さな軋むような滑る音が部屋に響く。しかし、誰も

気付かないようだ。静かにドアに手をかけ、ゆっくりと右へスライドさせる。カラカラカラと、今度は廊下に響く。真冬の病院は、冷気に支配されている。

それがより一掃不気味

で、夜中に見回りをする彼女たちに、心のなかで敬意を表した。力を入れて手でタイヤを

回す。病院なので、段差もなく楽に移動できるのがいい。エレベーターに乗り込むと、無

意識に三階のボタンを押した。建物の中でいくところなど限られてしまふのだ。

数秒でそこへ着くと、急いでタイヤに手をかける。間違っただけで挟まれることが心配なのだ。

娯楽ルームは目の前で、今の時間明かりがついているはずもない。病室の前の廊下はあん

なにも気味悪く感じたのに、都会の明かりが見えるここは、妙な安心感を取り戻せた。い

たままのドアをくぐり、中へとはいる。外の明かりが差し込み、見

えないということはない

かった。U字型に建設され、病室の窓は向かいの建物に面している。それでも部屋はほん

のり明るいのだ。街に面したここは、ほぼ全てが見えた。涙が静かに流れ続けてはいたが、

拭くことはしなかった。今では自然に身体が反応するだけで生きている証をもらっている気がする。

「村上さん？」

部屋の真ん中まで進んだとき、不意に脇から声をかけられた。廊下からではない。すぐ

横だ。足音に気付かなかった訳ではない、彼女のほうが先にいたのだ。

「小野さん？」

彼女は夜には不釣り合いなほどの白い顔で、子供たちが遊ぶスペースにいた。小さな滑

り台の斜面に窮屈そうに座り込んでいたが、僕に気づくと慌てた様子で近づいてきた。

「何しているんですか！ 寒いでしょう？」

白衣の上に羽織っていたカーディガンを脱ぐと、僕に掛けてくれる。やることなすこと

抜かりがない。

「すみません、すぐ戻りますので。って、これ」

ほんのり薬品の匂いがするそれは袖が少し濡れている。彼女の顔を見ると、僕と同じよ

うな跡があった。

「ごめんね、ちょっと汚いけど」

目にはすでに、その濡れた原因は浮かんではない。

「いえ。なんかあったんですか？」

瞳を大きく見開いた彼女が、僕の顔に穴が開いてしまいそうなほど

見詰めてきた。眼鏡

をかけた、一見インテリに見える彼女の皮がはがれかけたのがわかった。

「いいのよ。あなたはそんなこと気にしないで、病気を治さなくっちゃ」

細い右腕で力こぶを作るポーズで振っている。彼女がそんなにも強くいるのはなぜなんだ。

まるで人と関わることを全てを拒絶しているようだった。

「俺なんてただの病人ですよ。気使わないでください。なんでも、ゴミ箱のように聞き流しますよ」

それでも彼女は何も言わない。しかし外から差し込む光で頬が紅潮していくのがわかった。

「噂のことで虐められたりしているんですか？」

びくっと肩を震わせると、彼女は無意識だろう一筋の涙をこぼした。「知っているんだ」

呟いた彼女は、悲しそうに微笑んでいた。

「まあ、なんとなく。すいません。生意気なこと言って」

一応形だけ頭を下げる。彼女はただ首を横に振った。

「いいのよ。みんな知っていてもおかしくないんだもの。それだけ広まっちゃったし。元

がいなくならない限り、あたしの看護婦人生お先真っ暗。でも、他に出来ることもないから仕方がないの」

「元つて。この業界にいれば無理ですよ。大将も言っていました。

あ、田中さんですけど、

退院した。ちよつと話したんですよ、その、あなたのこと。でも、責めるなって言ってい

ました。誰でもみんな死ぬんだって」

そう言っていると、不思議そうな顔でじつと僕を見てから彼女は言った。
「死ぬ？ なんのこと言っているの？」

「えっ！ 噂ってそのことではないんですか。僕てつきり」
「いいから。どんな噂？」

追求されるような形で僕は諦めて全てを話した。彼女の担当した患者が次々に亡くなる

現象が起ると。その日も、担当が違う弓削の担任が決まったことで、同病患者ではひと

しきり話されたことだった。僕は彼女がショックで倒れてしまうのではないかと訝ったが

意外にも彼女は笑ったのだ。初めて聞いた、しかし皮肉を含む悲しい高笑いを。

「やんなっちゃうわ。そんなことまで言われているなんて。そんなの嘘よ。私の患者さん

でも担任して元気な方は大勢いる。もしかして村上さん、心配していた？」

「あ、いえ！ 僕は、全然」

この嘘は通じただろうか。いや、小野看護士がクスリと笑ったことから、ばれているだろう。

「あーあ！ 自分で撒いた種なんだけどね。あたし、この病院に来る前に大学病院にいた

の。そこで、浮気しちゃったのよ。外科の先生とね」

「はあ、浮気。ですか」

現実にも身の回りで見ている人など初めて会った。

「でも、自分がする方ならまだよかったのよね、家庭を持って。でも、あたしは独身。相手は子供もいた」

「その彼とは」

聞かないわけにいかない。

「別れた。いえ、別れさせられた。彼はそのまま病院にいるわよ。いえ、いなければいけないの。その病院の跡取りだから。いつの間にか周りにばれて、あたしは居ることができ

なかった。奥さんがその病院の娘で、彼はお婿さんだったしね」

「へえ、ドラマっすね」

「あら、意外と世間ではよくあるのよ、こんな話。あたしは辞めたけれども、彼の家庭はめちゃくちゃ。奥さんもちょっとおかしくなって、あちこちで変な噂を流すようになったの」

「え？ でも、小野さんのおじいさんとかも大病院の院長とかって聞きましたけど？」

もう一度高笑いが響く。そんなに笑って大丈夫かというくらいだ。

「そこまでいくと噂の元凶に尊敬するって。あたしの実家はサラリーマンだし、祖父なん

て農家よ？ もし病院の院長の孫だったら、こんな噂してないわよ」

「そうなんですか。やっぱり当てにならないですよね」

「あたしは占いも噂もみんな信用しない。信じるのは自分だけよ。確かに、彼の家庭を壊

して悪かったと思っている。でも、先に誘ってきたのは彼だし、その気持ちに答えた自分

の気持ちに忠実に従っただけよ。自分を信じたの。彼には間違っていたかもしれないけれど、あたしには正解なの」

「それって。でも、なんか違うくないっすか？」

「そうね、でも選ぶのは自分なの。未来も今もその人生のシナリオを描くのは自分なのよ。

誰にも代わりに書くことは出来ない。自分にとっては全てが間違いじゃないの」

「でも、自分じゃ選べないときもありますよね、神様が決めているように。人が死んだり

するのもそうじゃないですか。それに、恋愛をしても自分が好きでも相手が違うとか。

一概にはそうもいえないし」

「それはね、みんな逃げているのよ。確かに生き死には自分で決められることじゃないか

もしれない。でも、気を付けられることもいっぱいあるわ。それに、例えばかつこわるい

男の子が、頑張って頑張って、綺麗な女の子と結婚だつてするときだつてあるわよ」

僕はそれに納得はいかなかった。僕の死期は少なくとも必ず迫ってきているし、それは

望んだことでもない。きちんと定期検診を受けなかったのが悪かったとでもいうのか。

「村上さん、あなたは自分の病氣のことが納得いかないかもしれない。でも、それにも理

由はあるんじゃないかしら。それに、今だからこそ出来ることも、きつとある」

「まあ、そうか」

「こういう時間は苦しいかもしれない。もがきたい、あがいても足が重い。そんな気分か

もしれない。あたしも病院を辞めさせられた時にそう思った。生死とは関係ないと思う？

同じなのよ。生きる手段だもの」

「ん、いまいち難しいです。すいません、なんか役に立たなくて」
一人になりたかったただけなのに、なんだか変なことを聞いて余計目が覚めてしまった

「いいのよ。あたしの方こそごめんなさい、無駄なことを色々話しちゃった。忘れて？」

「あ、はい」

「こんな風に話すのも癖なの。うるさいでしょ？ 色んなことを偉そうに話すことで、周りを牽制しているのよ。でもまさか患者さんの間で不幸な噂が飛び交っているなんてね。」

無駄な努力をしているわ」

「いや！ そんなことないですよ！ 頼りにしています。患者の間で噂しているやつにもよく」

「やめてっ！」

最後まで言わぬうちに強い口調で遮られた。その目は先程までの悲しそうなものではなく、鋭く光っている。

「え？」

「いいのよ。何も言わないで」

「どうして、誤解なら」

「だからこそいいの。神様はシナリオを描かない、自分でかく。神様がしているのは、罰を与えることよ」

「罰？」

「そう、罰よ。あたしは自分がしたことに後悔してない。でも世間一般には許されない。」

これは、許されないことをした、あたしの罪なの。あたしも苦しまなければいけないの。

生きて」

「でも、いつでも泣くのは構わないと思いますよ」

目に微笑みを浮かべると、彼女は呟いた。

「ありがと」

「じゃあ、戻ります」

小野看護士は、僕を部屋まで送ろうとはしなかった。それが自分の

ためか、僕に気を遣

ったかは分らないが、それがいいと思った。

「人生いろいろだな」

エレベーターを待っている間呟いたが、どこからも返事はない。心にズシリとくる重い

話を聞いたはずだが、行きよりも僕のタイヤを回す手には力がより加えられた。

「最期まで描き続けてやる」

そう決意した僕を睡魔がおそい始め、病室に帰るまでに数回のあくびを繰り返した。

6 折り返し地点

弓削が退院したあと、病室はさらに静かになった。森ちゃんの症状も似たようなものだ。

ただテレビの音だけがしている。ぼんやりする頭で、かろうじて世の中のニュースを聞こうとするが、まるで別世界のようだった。香奈とのネットでの会話は順調だった。行ったレストラン、公園、展望台。ありありと思い出せる世界で、僕は記憶の旅に何度も出かけることができた。外は珍しく雪が降っているそうだが、まるで春のようにそれは心を暖かくしてくれた。

「ふう。寒い。あれ、起きていたの？」

「ああ。すごいよ、肩。積もっている」

外からやってきた母のコートにはあちこちに雪のかたまりがはびこっていた。あられで

はなく本格的な雪なのがその大きさで感じ取れた。

「積もりそうよ」

母は肩や背中を払いながら、手袋を取り、マフラーをはずした。

「そう。電車も止まっちゃうかな。あ、地下鉄なら大丈夫か」

電車など久しく乗ってはいない。通勤で満員電車に揺られることは一番の不快な日常の

一遍だった。今ではそれさえも懐かしい。

「雪合戦、したい」

そつと呟いた言葉に、母は何も応えなかった。下の階からだろうか。子供の声が響いて

いる。僕ももう無理なのはわかっている。ただ、言うてみるだけで、現実になるかもしれない

ないと希望を抱いたが、結局は虚しい響きだけが残った。

「母さん。僕さ、小学校の頃に、初めて母さんに怒られたことを覚えてるんだ。それま

では何をしても母さんは怒らなかった。いいや、怒ったけど、子供ながらに怖くなかった

んだ」

母さんはちよつと困ったように笑いながら、僕の隣の椅子に腰掛けた。そして僕がベツ

ドから上半身を起こそうとするのを手伝ってくれる。

「ええ、母さんだつて覚えてるわよ。あんたが変なこと言つて、あの時はよく手が出なかったと、一晩中自分を褒めたんだもの」

精一杯の母の冗談に、思わず声を上げて笑いそうになり、咳き込んだ。腹に響く。

「僕がなんて言つたか覚えてる？」

あんなに昔のことなのに、僕は昨日のことに思い出せたし、記憶の中の母は綺麗なままだ。目の前にいる母はなんと老けたことだろう。生きるとはこういうことなのだろう。でも、きつと母の記憶でも、子供の自分は一步手前の記憶に過ぎないのだろう。父結婚したときも、僕が生まれたときも、きつと全てが同じラインに描かれているに違いない。それは母が描いたシナリオだ。いくつもの記憶が織物となつて、母専用のタンスにしまわれている。思い出したいときに、その引き出しを開けて取り出し、身にまとう。そんな風にして生きてきた証。記憶のタンス預金。

「覚えてるわよ。あんた給食やら掃除当番やら、何かにつけて、僕は天に見放されたんだつて言いふらしていたらしいじゃない。今まで黙つていたけど、あれは子供として、ひどいわね」

そう言つて、反対にクスクスと思い出したように笑つた。一番上の引き出しが、開いた。

「そうだよな、最低だ。でも、今僕は病気になつたけど、こんな時なのに天に見放されたとは思わないよ。僕は、ちゃんと描いてきたから」

薬のせいで、僕がおかしくなつたとも思つたのだろうか、母は眉間に皺を寄せたが、僕の目がしっかりしていることを確かめると、

ため息をついた。

「実は黙っていたけどね、お父さんが癌だつてわかったのは、あんなに生まれる前なのよ」

「えっ？」

「結婚してすぐに、お父さんに腫瘍が見つかったの。お父さんは謝つて実家に帰ろうと言つてくれた。今なら間に合うと。でも、そんなことしたらお父さんに会えなくなりそうだったし、お母さんは断つて、必死で頼んであなたを生んだの」

「そうなんだ。お父さん、頑張ったんだな」

「あなたの記憶にはないかもしれないけれど、しょっちゅう病院に通つたし、治療を続けた。でも、一向によくならなくて、最期はね。それでも、宣告された期間よりすごく長くお父さんは生きてくれたの」

何も言えない僕に母は続ける。

「お父さんが死んだとき、お母さんは思ったの。神様はちゃんというんだつて。お父さんの記憶を少しでもあなたに与えるために、ちよつと長く生かしてくれたの」

違うんだ、母さん。それは父さんが自分で描いたシナリオなんだよ。父さんの力なんだ。

「だから、頑張つてあなたを育てなければつて思ったわ。でも、家はあつたから助かつたけれど、実際に現金はほとんどなくて毎日毎日苦しかった」

そうだ、母さんはそんなに必死で僕を育ててくれた。初めて聞く話に、タンスの扉はどんどん開く。

「あの時の一言は、びっくりしたわ。先生に言われた時に、まさにお母さんが自分で思っていたことだったのよ。父親もいない、親戚もない。ただただ必死で働いて、でもふと虚しくなったとき、もうお母さんなんて神様、ううん、世界中の誰にも救ってもらえないのかもつて思つた」

思い出している母の目に、涙はなかった。

「でも、その時学校に呼び出されてあなたがそんなことを触れ回っているって聞いて、横っ面をひっぱたかれたようだった。めげている自分に力ツを入れられた気がしたのよ。しっかりしなきゃって。お母さんにはあなたがいたんだもの。全然見放されてなんていなかった」

「母さん、ありがとう。僕、ずっと気になっていたんだ。謝れていないこと。でも、責めないでくれてごめん。母さんのそういうところ、すごく好きだよ」

実の母親に何を言っているんだと、今健康体なら、恥ずかしさで自分を殴っているかもしれない。でも、決めたんだ。最期のシナリオまで自分できちんと描くことを。

「なに言っているのよ。好きで当たり前でしょう。あなたは、ここから出てきたんだから。自分の寢床が嫌いな子供なんていないわよ」

そう言つと、母はトイレだ、と言つてカーテンの外へ消えていった。母がいなくなると、僕はパソコンに手を伸ばした。最近睡眠薬を貰っていない僕は、夜目覚めることがしょっちゅうだった。そして一度目覚めると、なかなか眠りに落ちることが出来ない。そんな中でひたすら考え、僕は今までの全てを香奈に告げることを決めたのだ。それは僕の病気のことを含め、今まで神として会話をしていた存在であること、そしてもう会えないということ。何度も文を考えては消し、思いつくままに入力しては白紙にした。そして母も帰り、夕飯を食べ終わり、再びまとめたところでやっと完成した。そこからしばらく送るのにまた時間がかかったが、【送信】のボタンを押してしまつてからは一瞬だった。

【名前】 神

【内容】 ごめんなさい

今日は色んなことを謝りたくて、メールをしました。信じられないかもしれないけれど、僕は村上俊幸です。【恋愛診療所】を開いたのは俺なんだ。そこでコメントを残してくれて、やりとりをしていたのは俺だよ、黙っていてごめん。驚かないで読んでほしい。実

は僕は何ヶ月か前に、胃がんを宣告されたんだ。ずっと病院で治療をしているけど、治る見込みはない。香奈には言うつもりはなかった。忘れてほしかったんだ。迷惑をかけたくなかった。残りの人生何をすべきか迷っていたとき、あの診療所を作ることにした。でも結構シビアな質問もきて、どう答えればいいかわからなくなりやめようと思ったときに、偶然香奈が書き込んでくれたんだ。正直ビックリした。でも、嬉しかったんだ。本当に。きっと俺から連絡することはできなかったから。どうか謝らせてほしい。読んでくれるだけいいんだ。香奈と付き合っていた時の昔話をしていたとき、幸せだった。でも、一年前の自分を思い出すと、いかに自分勝手だったかわかり、恥ずかしいよ。辛い思いさせてごめん。約束破ってごめん。まだ好きなんだ、ごめん。香奈はこれから幸せになっただけ。忘れてほしいとはいわない。むしろ、忘れてほしくないんだ。でも、【最低の元カレ】ではなく、記憶の中でほんのりと、楽しかった破片の一つとしてしまっておいてほしい。お願いばかりで最後まで申し訳ない。でも、香奈は一年前別れてからずっと力をくれた。仕事をしていても、闘病していても、浮かぶのは香奈の笑顔だったよ。その顔を大切に、香奈は香奈の人生のシナリオを描いて下さい。いつまでも応援しています。本当にありがとう。さようなら。

読み返してみると、なんとまた自分勝手なメールなんだろう。最後まで自分の気持ちや意見だけを押しつけている僕を、香奈はどうして一瞬でも好きだと思ってくれたのだろう。香奈との区切りはつけた。僕は重い上半身を引きあがらせると、両手を脇に置いたままの車いすに預けた。肩に力を入れ、引きずるようにして身体を移動させる。意地でも僕は自由が利くその瞬間まで自分で排泄をこなしたかった。弓削がくれた千羽鶴が、取っ手のところで舞っている。それがベッドから離れるときの僕の心の支え、お守りのような物だった。母は最近仕事を休んで僕の側にいてくれるようになった。部屋の外のトイレくらいには一人で行きたいという僕の申し出を心配そうにでも見守ってくれる。病室での重苦しい空気、隣人が咳き込む

緊張感、薬品の匂いが染みついたようなベッド、その全てから解放される場所は、トイレであろうが嬉しかった。前輪を力の入らない手で必死に転がすと、右の方から子供の甲高い笑い声が聞こえてきた。続いて走る駆け足の音と、追いかける大人達の叱る声。小さな足音は近づいてきたかと思うと、僕の車椅子に衝撃が加えられた。衝撃でエレベーターのドアに身体が飛ばされそうになったのを、駆けつけた医師に支えられた。

「大丈夫ですかっ」

男の医師が、慌てて顔を覗き込んできた。僕はといえば、改めて自分の体重がこんなにも軽くなったのかと、しばし呆然としてしまった。

「すみません、ごめんなさい。ほら、まあくんも謝りなさい」

どうやら原因は子供だったようで、僕の視界に男の子が割り込んできた。頭には毛糸で

編まれたニットの帽子を被り、ニコニコと僕を見上げている。

「ごめんなさいー。あつ、ママ！ 下りだよー」

隣に来たエレベーターに向かって、男の子がはしゃいだように声を上げる。

「本当にすみません」

母親は何度も頭を下げてから、少年の後を追うように箱に乗り込んだ。

「まあくん。ちょっとしかダメだからね、走ってもダメだよ」

僕を支えていた医師が手を振る男の子に叫ぶ。

「ばいばーいっ！ ばいばーい！」

扉が閉まる瞬間まで手を振る男の姿に、周りみんな笑っていた。と、その声に聞き覚え

があつた僕は、記憶の断片を探った。笑顔で手を振る男の子、そして母親。思い出した。

検診の結果を取りに来た数ヶ月前。エレベーターですれ違った親子だ。病気で悲観的にな

っている自分とは対照に、笑っている男の子はただの風景に過ぎなかった。自分が幼少時

代に父親の病室を訪れた経験から、見舞いに来たのかと思っていたが、あの子自信が入院

しているとは考えなかった。そしてフサフサにあった髪の毛が全くないほどに変化していたのも、薬のせいだろう。

「先生、今の子は」

「ああ、昌明くんといってね。白血病なんだ。彼ももう半年近くになるかな。ほとんど外

にもいけなくてね。許可がでるとああしてはしゃいじゃうんだな」

「そうなんですか」

僕は尿意を失い、車いすをUターンさせると、病室へと戻ろうとした。医師が押してく

れようとすることを丁寧に断ると、僕は胸に広がる空しさを押さえ、手に力を込めた。し

ばらくすると、パソコンを開くことはもうなくなった。一番は身体を起こすこと自体が苦

しくなっていたからだ。身体全体に力が入らずに、尿意を知らせると、看護師や母親が洩

瓶を布団の中に潜り込ませてくれる。もう、僕は抵抗をすることをやめた。天に見放され

たとは思わない。しかし、僕のシナリオは、もう書き終わるのだ。

【恋愛診療所】の閉鎖は

基本行わなかった。最後に覗いたときにはいくつかのコメントがさがれていたが、何人か固

定の人物が現れるようになって、彼らがお互いに質問に答え合ったりしていた。きっとそ

のまましばらくは続いていくのだろう。それでよかった。少しでも、ちよつとでも長く僕

の香りを残す存在がどこに残っているだけで、誰かに必要とされている気がするから。

それでいいんだ。

布団の中は温かい。温かいはずなのだが、今日は朝からなぜか熱っぽさがあり、小野さ

んが体温計を何回も口にくわえさせた。彼女もたまに目を腫らしていることもあるが、以前のような妙な冷たさはなくなった。それだけで、僕は嬉しかった。水枕に頬をくっつけて冷たさを感じながら、今日の日付を思い出そうとしたのだが、どうも分からない。今まで出会った人たちの顔が次々に思い浮かぶ。無性に母さんに会いたくなる。どんどん気持ちよくなってきて、目をつぶると、すぐにでも眠りにつけそうだった。ちょっとだけ。僕は眠れるがままに任せた。規則正しい呼吸が自分でも分かる。一目でいいんだ。香奈に会いたい。

「久しぶり」

僕がベッドの上でパソコンをいじっていると、目の前には、なんと香奈が立っている。

そうだ、これは夢だ。夢に出てきてくれたんだ。

「香奈！」

慌てて立ち上がろうとすると、僕の身体は自由だった。思い通りに動くそれを俊敏に動

かすと、僕はそのまま香奈を抱きしめた。全く変わっていない。外見ではわからない、人

よりちょっと大きめの胸が僕の両方の肺の位置に当たる。

「ねえ、放して？ …… 顔が見たいじゃない」

放してと言われた途端、びくつとした僕の身体、子供を落ち着かせるように香奈は背中

をなでた。そつと香奈顔を放してみると、そこには変わらない笑顔の香奈が居た。

「ちょっと痩せた？ 前はお腹だって、おじさんみたいに飛び出し

ていたのに。でも、それ以外は何も変わらない」

「香奈。なんでこっ」

夢だと分かっているのに、僕の口は頭のなかとは違うことを発する。本当は聞きたいこともたくさんあるのに。目が覚めない間、ずっと触れていたいのに。

「メール！ くれたでしょ？ ビックリしちゃった。でもね、本当は知っていたんだ。あたし。神があなただっていうこと」

「え？ どうして」

「実は広瀬くんが教えてくれたの。ここ、来たでしょ？」

「そんな」

「広瀬くんを責めないで？ 彼はあなたのことを心配していたの。本当にそれにあたしは教えて貰ったことを感謝している」

「そっか。そうなんだ」

「それに言ってくれたでしょ？ 笑顔を大切に人生のシナリオを描いてほしいって。だから、ちゃんと自分で描きにきたのよ。あたしの好きな人に会いにきたの」

「香奈。だからそれは」

「いいの！ 分かっている。でも、好きよ。今でもずっと」

香奈は一年前には見せなかったような大人びた笑顔で僕を真つすぐに見上げた。

「もしかしたら、あたし達はもつと違う形もあつたかもしれない。でも、これが今なのよ。それなら、いいじゃない。あたしは、好きなの。運命なんて簡単には言わない。もう、二度と会えないかもしれない。でもあたしは、自分で、あなたを選んだのよ」

「運命か。いいね、それ」

香奈は再びクスクス笑った。

「昔からあたしよりもロマンチックだもんね」

「夜景見て泣いたりとか？」

「そうそう！ あたしだって泣いてないのに。楽しかった。それもあたし達の宝物よ」

「そうだな。ありがとう。香奈、俺も。ずっと好きだったんだよ」
僕は香奈の顔がぐしゃぐしゃに歪んで見えなくなった。溢れる涙をそのままに、頬が痒くなってくる。鼻の奥がツンとして、くしゃみが出そうになる。声が出ない。一度言ったら止まらない。僕は何度も何度も伝えたかった。

「すきだ。すきだ、すきだ好きだ！」

しかし無情にも、脳はどんどん覚醒していく。目の前の彼女に手を伸ばすも、どんどん彼女は霞んでいく。自分の右手も指先から失われていく。心の中で、夢はもつといきなり覚めるのではと疑問も浮かんだが、どうでもよかった。

*

「あら！来てくれていたの。ありがとう、ほら、見て？よかったら」

僕がゆつくりと瞼を開けると、冷たい水枕の感触は残っていた。やはり夢だった。廊下

から母の声が聞こえる。人と会う時は、いくら自分の元気がなくても明るい声を出すのは、

彼女の悪い癖だ。後で言っただけなげなきや。ぼんやりとそんなことを考える。と、瞬間病室のドアが開く音がした。

「村上いー！」

聞き覚えのある声に、一気に目が見開いた。熱が下がってしまったようだ。

「広瀬？」

カーテンを勢いよく開けたのは広瀬、そしてその後ろに藤沢と黒田もいた。

「みんな？」

僕の口元には酸素マスクが当てられていて、一息吐くことに内側が曇る。

「おーい！お前今日何の日か覚えているかぁ！」

広瀬は元気な僕に話し掛けるのと同じように、声を張って近寄ってきた。黒田も藤沢も

両手に花を抱えている。

「ほら、髪切ったの。かわいい？」

黒田は相変わらず唇にグロスをぬりたくって、頭に手を添えた。小声では聞こえないだ

ろつと、何度か頷く仕種をした。胸元まであったはずの髪は、綺麗に肩で切りそろえられている。

「黒田、そんなことより！今日は村上さんの誕生日でしょ。あんたは可愛い、はい、終了」

藤沢は 身を乗り出している黒田を押しつけた。藤沢は仕事が休みなだけありぺったんこの靴を履いている。いつも営業で疲れた足のふくろはぎを揉んでいる姿は、もう見られない。

「誕生日おめでとう！」

広瀬は騒ぐ女二人を尻目に、なにやらケーキが入っているだろう箱を持ち上げた。

「あ！ お前忘れていた？」

広瀬は案の定、という風に笑った。

そうか。今日誕生日かあ。だから、香奈は夢に出て来てくれたんだ。息を吐くと、またマスクは曇る。そして、夢で流したはずの涙がまた伝って、耳へと落ちる。

「村上くん」

涙をみた藤沢は、言葉を失い広瀬を見上げたが、彼は何も言わなかった。

「ねえ、やっぱりさっきの」

黒田がいいかけたのを、広瀬が手で制した。僕の涙は止まらない。それが生きていることを主張するように。張り裂けるような声は、もう出せない。それならありったけの感情を表現したかった。止まらない、止めたくない。僕は、生きている。

7 ゴールの行方

築二十年を過ぎるこの家は、昔ながらの匂いはせずとも、新興の住宅とはやはり違った落ち着きがある。畳は何年も張り替えていないのだろうか、ところどころに黄ばみが見える。

しかしそれも汚れと言うより、一種の生活感としてどこか趣を感じるのが不思議だ。

「二人とも、どうもありがとう。最後まであの子は幸せだったわ」
家主の女は、テーブルを挟んで前に座る男女に頭を下げた。二人は正座をして困ったように笑っている。

「あたしの方こそお礼をいいたいんです。最後に病室で、俊幸さんがあたしの手を握り返してくれたとき、すごく感動したんです。それに、この子も」

「香奈ちゃん」

男は、香奈の腕の中でスヤスヤと眠る赤ん坊の頬をつついた。

「広瀬くんも本当にありがとう。あたし、彼と別れてからお腹にこの子がいるのが分かって。両親にすごく助けて貰いながらこの子を生んで。あ、勿論お母さんと彼を責めているわけではありません。知らせるつもりはなかったんです。一年後の約束、私の中では大切な思い出であり、大きな迷いでもありました。でも、時間と共に彼のことを忘れたわけではないのに、どこか離れていくのは感じました。ううん、そうしないと、立っていられなかったし、強くなれなかった」

今よりもなお頭を深く下げる母親に、香奈は首を大きく横に振った。赤ん坊がぐずり声を一瞬上げる。それを何度か上下に揺すった後、彼女は続けた。

「彼と……やり直すつもりは私にはもうありませんでした。でも、この子のことを彼に話さなかったのは、あたしがいけないんです。怖かったんです。何て言われるのが。病院では寝ていたし、彼に

はこの子の存在は分からなかったかもしれない、でも、一度でも会えたことは幸せだったと思います」

香奈は幸せそうに、仏壇に飾られた俊幸の写真を見つめた。

「病室から香奈ちゃんが出てきたときはビックリしたよ。それに、まさかパソコンで連絡を取っていたなんて。俺もちよつとでも役に立てたのかと思うと嬉しいよ」

広瀬は赤ん坊を触り続ける。

「ありがとう。香奈さん、私はあなた達の交際をすごく歓迎していました。別れたと聞いたときは本当に、自分のことのように悔しかった。もし」

「お母さん！」

びくつと母親の身体が震える。

「それは病室に伺った日にも申しましたが、いいんです。もしそれを挙げたらきりがありません。病院を聞きに電話した時、教えてくれてありがとうございます」

香奈の言葉には迷いが無い。きつとここまで来るには相当の迷いと葛藤と戦ってきたのだろう。

「でも、きつとあいつも香奈ちゃんと会えたの分かっていたと思うよ。あんなに楽しそうに笑っていたんだもん。俺や会社の連中がいのを尻目に懐かしそうな顔をして、泣いていたんだ」

広瀬は、彼がいつも定期入れに香奈の写真を入れていたことを話そうとは思わなかった。二人の時間は、あの別れた時に本当に離れていたのかもしれない。思い続けても叶わないことなどたくさんある。それなら、二人を静かに見守りたかった。余計な事実はいらない。

村上は、確かに彼女を愛し続けていたのだから。

「その子は」

母親がいとおしそうに香奈の腕の中を見る。

「頑張つて育てます。その力も、俊幸さんに貰いましたから」

「でも、あなたにはあなたの人生が。その、まだ若いんだし」

母親に子供を引き取りたいという考えはなかった。そんなことを言

えるはずがない。た

だ、彼女の人生を台無しにさせた責任が自分の息子にある気がしてやるせなかったのだ。

「これが、あたしの人生なんです。多分両親に頼ることも出てくるかもしれません。でも、

大丈夫です」

その強い視線に、広瀬も母親も何か覚悟を感じ取り、それ以上の言葉を発することはな

くなった。彼女の、たまに遊びに来る、という言葉信じて待つのだろう。香奈は子供の

顔を見ると、赤ん坊はいつの間にか起きていて、笑っている。その顔はすでにどことなく

俊幸に似ている。

あたし、頑張るから。未来のシナリオは自分で描いてみせるから。

香奈がそう思っ

て写真を見ると、彼もまた笑い、頷いているようだった。

—香奈に、幸あれ。

【了】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7107p/>

神はシナリオを描く

2011年6月17日18時12分発行